

第九十三條 短銃型救命索發射器ニ使用スル「ロケット」ニ在リテハ第九十一條ノ規定ニ依ルノ外之ヲ短銃ニ依リ發射シタル際點火スル爲ノ點火裝置ヲ備フルコトヲ要ス

第九十四條 箭竿ハ其ノ材料及寸法適當ニシテ使用ノ際「ロケット」又ハ彈丸ニ取附クルコトヲ要スルモノニ在リテハ適當ナル取附裝置ヲ備フルコトヲ要ス

第九十五條 銃砲ハ移動シ得ルモノニシテ且其ノ仰角ハ六〇度以上ナルコトヲ要ス

第九十六條 標準到達距離ハ救命索發射試驗ヲ四回以上行ヒ風其ノ他天候ノ影響ヲ除キタル平均到達距離ヲ以テ之ヲ定ム

附則

本令ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

昭和四月六月遞信省令第二十一號救命具試驗規程ハ之ヲ廢止ス

消火器試驗規程

(昭和九年二月五日 遞信省令第二二號)

第一條 本令ニ於テ消火器ト稱スルハ船内ニ於ケル火災ノ場合ニ使用スル持運式(携帶用)及移動式ノ消火器ヲ謂フ

第二條 消火器ヲ分チテ左ノ二種トス

一 液体消火器 消火液ヲ放射スル持運式消火器

二 泡消火器 消火氣泡ヲ放射スル持運式消火器及移動式消火器

第三條 本令ノ規定ニ該當セザル消火器ハ當該官吏ニ於テ本令ノ規定ニ該當スルモノト同一ノ效力ヲ有スト認ムルモノニ限リ之ヲ本令ニ適合スルモノト看做ス

第四條 消火器ハ起動容易ナルモノナルコトヲ要ス

第五條 消火器ノ重量ハ一人ノ力ヲ以テ之ヲ有效ニ取扱ヒ得ル程度ニシテ且移動式泡消火器ヲ除キ一七キログラムヲ超エザルコトヲ要ス

消火器ノ容量ハ水準線迄測リ五リットル以上ナルコトヲ要ス

水準線以上ノ空氣部ハ容器ノ全容積ノ五%ヨリ小ナルベカラズ

消火器ニハ水準線ヲ明瞭ニ標示スベシ

第六條 消火液及消火氣泡發生液ノ容器ノ形狀ハ圓筒形又ハ圓錐形ト爲シ圓筒形ナルトキハ兩端板

ヲ、圓錐形ナルトキハ大ナル徑ヲ有スル端板ヲ外方ニ突出シタル皿形ト爲スベシ

端板ノ皿ノ内半徑ハ容器ノ端部ノ内徑ヲ超エザルコトヲ要ス

第七條 容器ノ胴板及端板ニハ銅板又ハ鋼板ヲ使用シ其ノ内面ニハ十分ニ錫引若ハ鉛引ヲ施スベシ

第八條 持運式消火器ノ容器ノ構造及寸法ハ左ノ各號ノ條件ニ適合スルモノナルコトヲ要ス

一 接合部ハ累接銲縮ト爲シ且鐵附ト爲スコト

二 銲孔ハ錐揉シ縱接合ニ於テハ心距ヲ二センチメートル乃至一・五センチメートルト爲スコト

三 端板ノ周縁ハ折返ト爲サザルコト

四 垂直ニ据置ク消火器ニハ下部端板ト胴板トノ接合部ヲ庇護スル金屬製受臺ヲ附スルコト

五 胴板及端板(皿形ニ爲シタル後)ノ厚サ及銲孔徑ハ容器ノ外徑及使用材料ニ應ジ左表ニ依ルコト

容器ノ外径	鋼板		銅板	
	厚サ(耗)	紙孔徑(耗)	厚サ(耗)	紙孔徑(耗)
一五センチメートル以下	一・二	四・〇	一・〇	四・〇
一五センチメートルヲ超エ二〇センチメートルト以下	一・二	四・〇	一・二	四・〇

移動式消火器ノ容器ノ構造及寸法ハ當該官吏ノ適當ト認ムル所ニ依ル

第九條 裝填口ハ徑七・五センチメートルヨリ小ナラザルモノト爲シ之ニ螺絲部ノ長サ約二センチメートルヲ有スルニ砲金製螺込蓋ヲ取附クベシ

蓋又ハ裝填口ノ螺絲部ニハ消火器ヲ起動セシメタル後消火液又ハ消火氣泡ノ放射孔閉塞ノ場合ニ殘留スル瓦斯ノ壓力ヲ蓋蓋螺込中徐々ニ降下セシムル爲小ナル完全孔若干ヲ穿ツベシ

螺絲部ノ螺絲ハ連續セルモノト爲スベシ

裝填口頂部ノ氣密ヲ保ツ爲ニハ油ヲ浸潤セシメタル良質ノ革、耐酸性護膜其ノ他適當ノ材料ヲ使用スルコトヲ要シ其ノ厚サハ三ミリメートル以下ト爲スベシ

第十條 藥液罐受籠ハ容器ノ掃除及檢査ノ爲容易ニ取出シ得ルモノト爲スベシ

第十一條 消火器ニハ其ノ水壓試驗ヲ行フトキ及起動ノ際器内ニ生ズル壓力ヲ確メントスルトキ壓力計ヲ取附クル爲標準螺絲ヲ有スル壓力計取附口ヲ附シ置クベシ

第十二條 放射孔又ハ放射管ニハ適當ナル濾過裝置ヲ取附クベシ

内部放射管ヲ取附クル場合ニハ該管ハ容器ヲ略空虛ト爲スコトヲ得ル長サノモノト爲スベシ

第十三條 内部放射管ヲ備フル消火器ニ在リテハ溫度ノ變化ニ依リ消火液ガ放射孔ノ方ニ押出サレ取附物ヲ腐蝕シ又ハ放射孔ヲ填塞スルコトヲ防グ爲適當ノ膨脹室ヲ設クルカ又ハ其ノ他適當ナル裝置ヲ施スベシ

第十四條 蛇管ヲ使用スル消火器ニ在リテハ蛇管ハ耐久性ノモノナルコトヲ要ス

第十五條 放射口金ノ孔ノ大サハ徑四ミリメートル以上ト爲シ消火液又ハ消火氣泡ノ放射ハ六〇秒時以上連續的ニシテ消火液又ハ消火氣泡ノ到達スル水平距離ハ放射ノ初期ニ於テ九メートル以上六〇秒時ニ於テ六メートル以上ナルコトヲ要ス

放射口金端ニハ薄護膜其ノ他適當ノ塵埃除ヲ附スベシ

第十六條 持運式消火器ニハ其ノ持運及取扱ニ便ナル樣適當ノ固定把手ヲ設クルコトヲ要シ移動式消火器ニハ移動及取扱ニ便ナル樣適當ノ裝置ヲ設クルコトヲ要ス

第十七條 消火器ノ裝填物ハ左ニ掲グルモノ其ノ他當該官吏ノ適當ト認ムルモノナルコトヲ要ス

液体消火器

一 重碳酸曹達又ハ炭酸加里ノ溶液及礬ニ容レタル硫酸又ハ塩酸

二 清水及壓縮炭酸瓦斯

泡消火器

重碳酸曹達ト氣泡劑トノ混合液及礬ニ容レタル硫酸「アルミニウム」溶液

第十八條 裝填物及空氣部ハ液体ノ溫度三八度ノトキ一切ノ口孔ヲ閉塞シテ起動セシメタル場合ニ生ズル壓力ヲ每平方センチメートル一四キログラム以下ニ調節シタルモノナルコトヲ要ス

第十九條 容器ハ每平方センチメートル二五キログラムノ壓力ヲ五分時持續スル水壓試驗ニ堪フル

モノナルコトヲ要ス

前項ノ壓力ハ前條ニ掲グル調節セラレタル壓力ノ二倍ニ止ムルモ妨ナシ

第二十條 消火器ニハ左ノ事項ヲ標示スベシ

一 型式承認番號(型式承認ヲ受ケタルモノニ限ル)

二 消火器ノ種類

三 製造番號

四 容量

五 重量

六 製造年月

七 製造者ノ氏名又ハ名稱

第二十一條 消火器ニハ裝填物ニ關スル明細書ヲ添附スベシ

封緘シタル裝填物ニハ一箇毎ニ説明書ヲ添附スベシ

附則

本令ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

火災警報裝置試驗規程

(昭和九年二月五日 逕信省令第二三號)

第一章 總則…………… 七九

第三章 空氣管式火災警報裝置…………… 七九三

第二章 電氣「サーモスタット」式…………… 七九五

第四章 煙管式火災警報裝置…………… 七九五

火災警報裝置…………… 七九〇

附則

第一章 總則

第一條 本令ニ於テ火災警報裝置ト稱スルハ船内ニ於ケル火災ヲ自動的ニ警報スル裝置ヲ謂フ

第二條 火災警報裝置ヲ分チテ左ノ三種トス

一 電氣「サーモスタット」式火災警報裝置

二 空氣管式火災警報裝置

三 煙管式火災警報裝置

第三條 本令ノ規定ニ該當セザル火災警報裝置ハ當該官吏ニ於テ本令ノ規定ニ該當スルモノト同一

ノ效力ヲ有スト認ムルモノニ限リ之ヲ本令ニ適合スルモノト看做ス

第四條 警報器又ハ探知器ハ火災ノ存在又ハ徵候ヲ船員ガ最速ニ認メ得ベキ場所又ハ消防詰所ニ設

置セララルモノナルコトヲ要ス

第五條 一警報區域ニ含マルル室數ハ五〇ヲ超ユルコトヲ得ズ又一警報區域ノ船首尾方向ノ長サハ

四〇メートルヲ超ユルコトヲ得ズ

第六條 水密隔壁又ハ防火隔壁ニテ仕切ラレタル場所ハ之ヲ同一警報區域ニ含マシムルコトヲ得ズ

但シ倉庫ニ付テハ此ノ限ニ在ラズ

法規ニ依リ設クベキ支水隔壁ガ暴露甲板ニ到達セザル船舶ニ在リテハ甲板間ノ場所ハ該隔壁ガ暴

露甲板ニ到達セルモノト看做ス

同一甲板上ニ在ラザル場所ハ之ヲ同一警報區域ニ含マシムルコトヲ得ズ但シ船首尾狹部其ノ他ノ

場所ニシテ當該官吏ニ於テ差支ナシト認ムルモノハ此ノ限ニ在ラズ

第七條 火災警報裝置ハ一警報區域關係ノ裝置ガ動作不能トナリタル場合ニ於テモ他ノ警報區域關

係ノ装置ヲ動作不能トナラシメザルモノナルコトヲ要ス

火災警報装置ハ一箇若ハ同時ニ數箇ノ火災警報信號ヲ爲シ得ルモノナルコトヲ要ス

第八條 火災警報装置ハ火災警報以外ノ信號ノ傳達ニ流用シ得ザルモノナルコトヲ要ス

第九條 火災警報装置ノ電路ハ電氣の接地ヲ有セザルコトヲ要ス

第十條 火災警報装置ニ使用スル電導体ノ構造、大サ、鉛被、鐵裝、防護、支持其ノ他詳細ハ當該官吏ノ適當ト認ムル所ニ依ル但シ電線ハ電線式ノ電氣「サーモスタット」ノ電線ヲ除クノ外鉛被ヲ爲シ尙損傷ヲ受クル處アルモノニ在リテハ鐵裝スルコトヲ要ス

第十一條 火災警報装置ハ其ノ全裝置ニ付耐久試驗ヲ行ヒ故障ナキモノナルコトヲ要ス

第十二條 火災警報装置ニハ一組毎ニ其ノ操作、維持又試驗ニ關スル詳細並ニ豫備品ノ品目又數量ヲ記載シタル揭示用圖表ヲ添付スルコトヲ要ス

前項ノ圖表ニハ試驗ノ執行年月日記入ノ爲並ニ試驗ニ立會フ當該船舶職員ノ署名ノ爲餘白欄ヲ存セシメ試驗ノ都度之ガ記入ニ便ナラシムベシ

第二章 電氣「サーモスタット」式火災警報装置

第十三條 電氣「サーモスタット」式裝置ノ警報器ハ各警報區域ニ付一箇ノ警燈又ハ表示器ヲ有スルモノナルコトヲ要ス

前項ノ警報器ハ火災ノ發生シタル警報區域ヲ明ニ表示シ且特ニ人爲的ニ之ヲ復セシメザル限り指示又ハ動作ヲ繼續スルモノナルコトヲ要ス

第十四條 警報器ニハ警報中自動的ニ警報音信號ヲ連續鳴響スル警鐘一箇ヲ附屬セシムルコトヲ要ス

第十五條 長サ一〇〇メートル以上ノ船舶ニハ機關室ニ補助警音裝置ヲ設置スルコトヲ要ス

第十六條 電氣「サーモスタット」ハ之ヲ各警報區畫室ノ天井ニ取附クベシ但シ貨物艙以外ノ場所ニ設クル電線式ノ電氣「サーモスタット」ニ在リテハ之ヲ仕切壁若ハ隔壁ニ於テ天井ヨリ三〇センチメートル以内ノ位置ニ架スルコトヲ得

第十七條 平面天井ニ在リテハ電氣「サーモスタット」相互間ノ距離ハ四・五メートルヲ超エザルコトヲ要ス

一箇ノ電氣「サーモスタット」ニ依ル警報面積ハ一八・五平方メートルヲ超エズ又天井ノ何レノ部分モ電氣「サーモスタット」ヨリノ距離三メートルヲ超エザルコトヲ要ス

電線式ノ電氣「サーモスタット」ニ在リテハ各電路ハ三〇〇メートルヲ超エザル電線ヨリ成ルコトヲ要シ之ヲ各警報區畫室ニ配線シ天井ノ何レノ部分モ電線ヨリノ距離三メートルヲ超エザルコトヲ要ス

第十八條 天井ガ深サ二五センチメートル以下ノ梁ニ依リ格子又ハ小間ニ區分セラレタルモノナルトキハ之ヲ平面天井トシテ取扱フベシ

梁ノ深サ二五センチメートルヲ超ユルトキハ梁ニ依リテ仕切ラレタル各區畫ヲ別箇ノ天井トシテ取扱フベシ

第十九條 梁ノ構造ガ特殊ノ爲前二條ノ規定ニ依リ難キ場合ニハ電氣「サーモスタット」ノ配置ハ當該官吏ノ適當ト認ムル所ニ依ル

第二十條 貨物搭載場所ニ在ル電氣「サーモスタット」及損傷ヲ受クル處アル電氣「サーモスタット」ハ適當ニ之ヲ防護スベシ

第二十一條 電源及電路ニハ第二十三條ニ規定スル場合ヲ除クノ外故障音信號裝置ヲ備フルコトヲ要ス

故障音信號裝置ハ電源又ハ電路ニ故障ヲ生ジタル場合該故障ヲ修復シ終ル迄明確ナル音信號ヲ自動的ニ連續鳴響スルモノナルコトヲ要ス

故障音信號ヲ停止スル爲開閉器ヲ設クルモノニ在リテハ別ニ故障燈ヲ備ヘ音信號ヲ停止セシムルト同時ニ自動的ニ故障燈ニ點燈セシメ得ルコトヲ要ス

第二十二條 警鐘ニハ故障音信號裝置ヲ備フルコトヲ要ス但シ數箇ノ警鐘ヲ使用スルトキハ其ノ一箇ニ限り之ヲ備フルモ妨ナシ

第二十三條 故障音信號裝置ニ使用スル電路及之ニ對スル電源竝ニ受信盤上ノ常時開放二次電路ニハ故障音信號裝置ヲ備フルコトヲ要スセズ多數連結シタル「サーモスタット」ニ付亦同ジ

第二十四條 火災警報裝置ニ使用スル電源ハ封緘シタル専用ノ蓄電池ニシテ照明系統ノ幹ヨリ自動的ニ充電セラルルモノナルコトヲ要ス

第二十五條 火災警報裝置ニ使用スル電壓ハ二〇ヴォルト以上六〇ヴォルト以下ナルコトヲ要ス火災警報裝置ハ其ノ標準電壓ノ八〇%ニテ動作スルモノナルコトヲ要ス

第二十六條 火災警報裝置ニ使用スル蓄電池ハ充電ヲ更新スルコトナクシテ四八時間以上電流ヲ供給シ得ルモノニシテ其ノ容量ハ一〇アンペア時以上ナルコトヲ要ス

第二十七條 火災警報裝置ニハ容量三アムペア以上六アムペア以下ノ「フューズ」ヲ充電用電流ヲ供給スル幹線又ハ其ノ附近ニ於テ蓄電池主放電路中ノ充電盤上ニ裝置スルコトヲ要ス

第二十八條 受信盤及其ノ附屬裝置ハ振動ニ依リ影響ヲ受ケズ又四五度傾キタル場合ニ於テモ動作

スルモノナルコトヲ要ス

第二十九條 警報音信號ハ鐘ノ徑一五センチメートルヨリ小ナラザル蔽圍型警鐘ニ依リ發スルモノナルコトヲ要ス

前項ノ音信號ハ適當ノ裝置ニ依リ之ヲ停止シ得ルコトヲ要ス

第三章 空氣管式火災警報裝置

第三十條 空氣管式裝置ノ警報器ハ各警報區域ニ付一箇ノ警燈又ハ表示器ヲ有スルモノナルコトヲ要ス

前項ノ警報器ハ火災ノ發生シタル警報區域ヲ明ニ表示シ且特ニ人爲的ニ之ヲ復セシメザル限り指示又ハ動作ヲ繼續スルモノナルコトヲ要ス

第三十一條 警報器ニハ警報中自動的ニ警報音信號ヲ連續鳴響スル警鐘一箇ヲ附屬セシムルコトヲ要ス

第三十二條 長サ一〇〇メートル以上ノ船舶ニハ機關室ニ補助音響裝置ヲ設置スルコトヲ要ス

第三十三條 空氣管式裝置ニ於ケル各空氣管回路ハ長サ三〇〇メートルヲ超エザルコトヲ要シ且管ハ岐路ヲ有セズ其ノ兩端ヲ一箇ノ檢出器ニ連結スルコトヲ要ス

前項ノ檢出器ハ電線ニ依リ警報器ニ連結スルモノナルコトヲ要ス

第三十四條 空氣管ハ之ヲ各警戒區畫室ノ天井ニ取附クベシ但シ貨物艙以外ノ場所ニ設クル空氣管ニ在リテハ之ヲ仕切壁若ハ隔壁ニ於テ天井ヨリ三〇センチメートル以内ノ位置ニ取附クルコトヲ得

第三十五條 各蔽圍場所又ハ各室ニハ空氣管回路ノ全長ノ少クトモ五%ヲ露出セシムルコトヲ要シ

且露出部ノ長サハ如何ナル場合ニ於テモ八メートルヨリ少ナカラザルコトヲ要ス
 第三十六條 平面天井ニ在リテハ天井ノ何レノ部分モ空氣管ヨリノ距離三・五メートルヲ超エザルコトヲ要ス

第三十七條 天井ガ深サ二五センチメートル以下ノ梁ニ依リ格子又ハ小間ニ區分セラレタルモノナルトキハ之ヲ平面天井トシテ取扱フベシ

梁ノ深サ二五センチメートルヲ超ユルトキハ梁ニ依リテ仕切ラレタル各區畫ニ少クトモ一條ノ空氣管ヲ配置スルコトヲ要ス

第三十八條 梁ノ構造ガ特殊ノ爲前二條ノ規定ニ依リ難キ場合ニハ空氣管ノ配置ハ當該官吏ノ適當ト認ムル所ニ依ル

第三十九條 貨物搭載場所ニ在ル空氣管及損傷ヲ受クル虞アル空氣管ハ適當ニ之ヲ防護スベシ
 區畫室其ノ他ノ場所ニシテ其ノ用途ノ性質上相當高温トナルコトアルベキ箇所ニ在ル空氣管ニハ必要ニ應ジ適當ニ防熱裝置ヲ施スベシ

第四十條 電源及電路ニハ第四十二條ニ規定スル場合ヲ除クノ外故障音信號裝置ヲ備フルコトヲ要ス

故障音信號裝置ハ電源又ハ電路ニ故障ヲ生ジタル場合該故障ヲ修復シ終ル迄明確ナル音信號ヲ自動的ニ連續鳴響スルモノナルコトヲ要ス

故障音信號ヲ停止スル爲閉閉ヲ設クルモノニ在リテハ別ニ故障燈ヲ備ヘ音信號ヲ停止セシムルト同時ニ自動的ニ故障燈ニ點燈セシム得ルコトヲ要ス

第四十一條 警鐘ニハ故障音信號裝置ヲ備フルコトヲ要ス但シ數箇ノ警鐘ヲ使用スルトキハ其ノ一

箇ニ限り之ヲ備フルモ妨ナシ

第四十二條 故障音信號裝置ニ使用スル電路及之ニ對スル電源竝ニ受信盤上ノ常時開放二次電路ニハ故障音信號裝置ヲ備フルコトヲ要セズ

第四十三條 火災警報裝置ニ使用スル電源ハ封緘シタル専用ノ蓄電池ニシテ照明系統ノ幹線ヨリ自動的ニ充電セラルルモノナルコトヲ要ス

第四十四條 火災警報裝置ニ使用スル電壓ハ二〇ヴォルト以上六〇ヴォルト以下ナルコトヲ要ス
 火災警報裝置ハ其ノ標準電壓ノ八〇％ニテ動作スルモノナルコトヲ要ス

第四十五條 火災警報裝置ニ使用スル蓄電池ハ充電ヲ更新スルコトナクシテ四八時間以上電流ヲ供給シ得ルモノニシテ其ノ容量ハ一〇アムペア時以上ナルコトヲ要ス

第四十六條 火災警報裝置ニハ容量三アムペア以上六アムペア以下ノ「フューズ」ヲ充電用電流ヲ供給スル幹線又ハ其ノ附近ニ於テ蓄電池主放電路中ノ充電盤上ニ裝置スルコトヲ要ス

第四十七條 受信盤及其ノ附屬裝置ハ振動ニ依リ影響ヲ受ケズ又四五度傾キタル場合ニ於テモ動作スルモノナルコトヲ要ス

第四十八條 警報音信號ハ鐘ノ徑一五センチメートルヨリ小ナラザル蔽圍型警鐘ニ依リ發スルモノナルコトヲ要ス

前項ノ音信號ハ適當ノ裝置ニ依リ之ヲ停止シ得ルコトヲ要ス

第四章 煙管式火災警報裝置
 第四十九條 火災探知器ハ各警戒區畫室ヨリ之ニ導キタル煙管ニ依リ火災ニ伴フ細微稀薄ナル煙ヲ容易ニ判別シ得ルモノナルコトヲ要シ之ニ附隨スル照明裝置ハ夜間航海ニ支障ヲ來サザルモノナ

ルコトヲ要ス

第五十條 各警戒區畫室ニハ火災探知器ニ通ズル煙管一箇以上ヲ備フルコトヲ要ス但シ相隣接セル小區畫室ニシテ當該官吏ニ於テ差支ナシト認ムルモノニ在リテハ此等區畫室ヨリノ煙管ハ之ヲ連絡シ一煙管トシテ火災探知器ニ導クモ妨ナシ

煙管ハ内徑二〇ミリメートルヨリ小ナラザルモノナルコトヲ要ス
一警戒區畫室ニ數箇ノ煙蒐集器ヲ備フル場合ニハ二箇ヨリ多クノ煙蒐集器ヲ同一煙管ニ連結セザル構造ト爲スコトヲ要ス

煙蒐集器ハ各警戒區畫室ノ天井ニ裝置シ天井ノ何レノ部分モ煙蒐集器ヨリノ距離一二メートルヲ超エザルコトヲ要ス

第五十一條 排氣ハ嗅覺ニ依リ火災ノ存在又ハ微候ヲ認メ得ル様之ヲ火災探知器ヲ備フル室内ニ排出スルコトヲ要ス
排氣ガ嫌忌スベキ臭氣ヲ有スルトキ之ヲ室外ニ誘出シ得ル様適當ナル裝置ヲ設ケ其ノ瓣ハ明瞭ナル標示ヲ有シ取扱容易ナル構造ノモノナルコトヲ要ス

第五十二條 吸氣扇ハ二重ニ設ケ何レモ非常點燈用電源ニ依リ動作シ得ル様閉器ヲ設クベシ
非常點燈用電源ノ電壓ガ常用ノ點燈用電源ノ電壓ヨリ低キモノナルトキハ吸氣扇ノ内一箇ニ限り非常點燈用電源ニ依リ動作シ得ザルモ妨ナシ

第五十三條 火災探知器ニハ吸氣扇ガ運轉ヲ停止シタルトキ、吸氣作用ガ停止シタルトキ又ハ煙分照映燈ガ滅シタルトキ直ニ之ヲ標示スル故障音信號裝置ヲ備フルコトヲ要ス

第五十四條 貨物搭載場所其ノ他之ニ準ズル場所ニ在ル煙蒐集器及煙管ニシテ損傷ヲ受クル虞アルモノハ適當ニ之ヲ防護スベシ

第五十五條 煙管ハ適當ノ傾斜ニ之ヲ架設シ其ノ低點ニ當該官吏ノ適當ト認ムル排水口ヲ備フルコトヲ要ス
煙管ノ屈曲部ハ其ノ彎曲度ヲ成ルベク緩ニスルコトヲ要ス

附則

本令ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

防毒面試験規程

(昭和九年二月五日 遞信省令第二四號)

第一條 本令ニ於テ防毒面ト稱スルハ呼吸氣及吸氣瓣ヲ備フル覆面、連結管及吸收罐ヨリ成リ船内ニ於ケル火災ノ場合ニ使用スル防毒面ヲ謂フ

第二條 本令ノ規定ニ該當セザル防毒面ハ當該官吏ニ於テ本令ノ規定ニ該當スルモノト同一ノ效力ヲ有スト認ムルモノニ限リ之ヲ本令ニ適合スルモノト看做ス

第三條 防毒面ハ火災ニ伴フ煙、一酸化炭素其ノ他ノ有害物ヲ含ム空氣中ニ於テ呼吸ヲ安全ナラシメ得ルモノナルコトヲ要ス

第四條 防毒面ハ其ノ構造成ルベク簡易ニシテ裝著、吸收罐取換等取扱容易ナルモノナルコトヲ要ス

第五條 防毒面ハ其ノ構造堅牢ニシテ普通ノ取扱ニ於テハ容易ニ損傷セザルモノナルコトヲ要ス

第六條 防毒面ハ寒熱濕乾ニ對シ十分ノ耐久性ヲ有スルモノナルコトヲ要ス
 第七條 防毒面ハ其ノ大サ及重量過大ナラズ且形狀適當ニシテ之ヲ裝著シタル場合作業ヲ妨ゲザルモノナルコトヲ要ス

第八條 覆面、吸收罐、連結管及其ノ接続部ハ氣密ナルコトヲ要ス

吸收罐ノ氣密度ハ水柱一五〇ミリメートルノ壓力ニ對シ、覆面、連管結及其ノ接続部ノ氣密度ハ水柱一〇〇ミリメートルノ壓力ニ對シ堪フルコトヲ要ス

第九條 防毒面ノ吸氣系ノ通氣抵抗ハ毎分三〇リットルノ吸氣ニ對シ水柱三〇ミリメートル以下ナルコトヲ要シ呼氣系ノ通氣抵抗ハ毎分三〇リットルノ呼氣ニ對シ水柱八ミリメートル以下ナルコトヲ要ス

第十條 防毒面ヲ裝著シタル場合覆面ハ顔面ハ適合シ接著良好ニシテ異狀ノ壓迫ヲ感ゼズ且作業ニ依リ其ノ接著ヲ害セラレザルモノナルコトヲ要ス

第十一條 眼鏡ノ位置及大サハ裝面シタル場合相當ノ視界ヲ與ヘ又眼鏡ノ透明度ハ良好ニシテ映像ヲ歪曲セシメザルモノナルコトヲ要ス

眼鏡ハ溫度零度ニ於テ一五分時連續裝面スルモ曇ヲ生ゼザルモノナルコトヲ要ス

第十二條 覆面材料ハ刺戟性ヲ有セザルモノナルコトヲ要ス

第十三條 呼氣瓣ハ内外部壓力平衡ノ場合閉鎖狀態ヲ保チ普通ノ呼氣及毎分一リットルノ割合ノ吸氣ニ對シ確實鋭敏ニ閉鎖スルモノナルコトヲ要ス
 呼氣瓣ノ氣密度ハ内部壓力ヲ外部壓力ヨリ水柱二〇〇ミリメートル低下シテ一五秒時放置シタル場合内部壓力ノ上昇水柱一〇ミリメートル以下ナルコトヲ要ス

呼氣瓣ノ通氣抵抗ハ毎分三〇リットルノ通氣ニ對シ水柱六ミリメートル以下ナルコトヲ要ス

第十四條 吸氣瓣ハ普通ノ吸氣及呼氣ニ對シ確實鋭敏ニ閉鎖シ其ノ通氣抵抗ハ毎分三〇リットルノ通氣ニ對シ水柱二ミリメートル以下ナルコトヲ要ス

第十五條 連結管ハ伸縮性及屈撓性十分ニシテ管腔容易ニ變形セザルモノナルコトヲ要ス
 連結管ノ通氣抵抗ハ毎分五〇リットルノ通氣ニ對シ連結管眞直ノ場合水柱一ミリメートル以下、

一八〇度屈曲ノ場合水柱三ミリメートル以下ナルコトヲ要ス

第十六條 吸收罐ハ金屬製トシ堅牢ニ構成シ火災ニ伴フ煙、一酸化炭素其ノ他ノ有害物ヲ吸收スル吸收劑ヲ充填シタルモノナルコトヲ要ス

前項ノ吸收劑ハ濾層、脱水劑、「ホブカリット」劑及活性炭ト「アルカリ」吸收劑トノ混劑ヲ順次別ノ層ト爲シタルモノ又ハ其ノ他適當ノ配劑ノモノニシテ裝面後連續二時間以上ノ使用ニ堪フルモノナルコトヲ要ス

第十七條 吸收罐ノ吸收試驗ニ於テハ通氣毎分三〇リットル、溫度二〇度、濕度五〇%ニ於テ左記各號ノ試験ヲ各別箇ノ吸收罐ニ付行ヒ之ニ合格スルコトヲ要ス

一 濃度〇・五%ノ「クロルピクリン」瓦斯ヲ一〇分間通過セシメタル後漏洩瓦斯ノ濃度〇・〇〇一%ヲ超エザルコト

二 濃度一・〇%ノ一酸化炭素瓦斯ヲ二時間通過セシメタル後漏洩瓦斯ノ濃度〇・〇五%ヲ超エザルコト

三 濃度一立方メートルニ付二〇〇ミリグラムノ煙草ノ煙ヲ通過セシメ煙ノ漏洩二五%ヲ超エザルコト

第十八條 吸收罐ノ通氣抵抗ハ毎分三〇リットルノ通氣ニ對シ水柱二五ミリメートル以下ナルコトヲ要シ且前條ノ規定ニ依ル各吸收試驗後ニ於ケル抵抗ノ増加ハ毎分三〇リットルノ通氣ニ對シ水柱五ミリメートル以下ナルコトヲ要ス

第十九條 吸收罐ノ通氣抵抗ハ之ヲ一五分時振盪シタル場合ニ於テ減少セザルコトヲ要シ其ノ増加ハ毎分三〇リットルノ通氣ニ對シ水柱五ミリメートル以下ナルコトヲ要ス

第二十條 吸收罐ハ二年以上有效ナルモノナルコトヲ要ス

第二十一條 吸收罐ノ外面ハ紅白二色ヲ以テ上下二層ニ塗裝スベシ

第二十二條 防毒面ノ覆面及吸收罐ニハ左ノ事項ヲ標示スベシ

- 一 型式承認番號(型式承認ヲ受ケタルモノニ限ル)
- 二 製造番號
- 三 製造年月
- 四 有効期間(吸收罐ニ限ル)
- 五 トナル記號(吸收罐ニ限ル)

第六 製造者ノ氏名又ハ名稱

第二十三條 防毒面ニハ一組毎ニ使用方法ヲ詳記シタル説明書ヲ添附スベシ尙吸收罐ニハ其ノ取扱説明書ヲ貼附シ置クベシ

附則
本令ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

海員審判及管轄區域

海員懲戒法

(明治二十九年四月 法律第六十九號)

第一章 總 則

第一條 海技免狀ヲ受行スル者其ノ職務ヲ行フニ當リ左ノ事項ニ該當スルトキハ海員審判所ノ裁決ヲ以テ懲戒ヲ加フベシ

- 一、 正當ノ理由ナクシテ其ノ船舶ヲ放棄シタルトキ
- 二、 過失懈怠又ハ不當ノ所爲ニ因リ自他ノ船舶ヲ問ハス之ニ損害ヲ加ヘ若ハ之ヲ沈没セシメタルトキ
- 三、 過失懈怠又ハ不當ノ所爲ニ因リ人ヲ殺傷シタルトキ
- 四、 海難ニ罹リ其ノ船舶又ハ船客乗組員ヲ救助スルノ方法ヲ盡サ、ルトキ
- 五、 海難ニ罹リタル船舶アルコトヲ認メ正當ノ理由ナクシテ其ノ船舶又ハ船客乗組員ヲ救助スルノ方法ヲ盡サ、ルトキ
- 六、 職務上ノ義務ニ違背シ又ハ職務ヲ怠リタルトキ
- 七、 亂醉粗暴其ノ他ノ失行アリタルトキ

第二條 懲戒ハ左ノ三種トス

- 一、免狀行使ノ禁止
- 二、免狀行使ノ停止
- 三、譴責

第三條 前條懲戒ノ適用ハ所爲ノ輕重ニ從ヒ海員審判所之ヲ定ム

第四條 免狀行使ノ停止ハ一月以上三年以下トス

第五條 海員審判所ハ左ノ原因アルトキハ審判ヲ行ハス

- 一、確定裁決
- 二、時効

第一條各號ニ該當スルモノハ廢業ノ故ヲ以テ懲戒ヲ免ルコトヲ得ス

第六條 時効ノ期間ハ審判ヲ受クヘキ事件ノ生シタル日ヨリ五年トス

第七條 海員審判所ノ審判ニ關シ此ノ法律ニ規程ナキモノニ付テハ刑事訴訟法ノ規程ヲ準用ス

第二章 海員審判所ノ組織及管轄

第八條 海員審判所ハ地方海員審判所及高等海員審判所ノ二トス

地方海員審判所ハ船舶司檢所ニ置キ高等海員審判所ハ逕信省ニ置ク

第九條 海員審判所ニハ審判所長、審判官、理事官及書記ヲ置ク

審判所長、審判官、理事官及書記ノ定員並其ノ任用ニ關スル規程ハ勅令ヲ以テ之ヲ定ム

第十條 地方海員審判所ノ審判ハ審判所長及審判官ヲ併セテ三人高等海員審判所ノ審判ハ審判所長及審判官ヲ併セテ五人ノ列席合議ヲ以テ之ヲ行フ

第十一條 地方海員審判所ノ管轄區域ハ勅令ヲ以テ之ヲ定ム

第十二條 審判ニ付スヘキ事件ノ管轄權ハ其ノ事件ノ生シタル船舶ノ定繫場ヲ管轄スル地方海員審判所ニ屬ス

同一ノ事件ニ付二箇以上ノ地方海員審判所管轄權ヲ有スルトキハ其ノ事件ノ生シタル地ニ最モ近キモノ、管轄トス

第十三條 地方海員審判所ノ理事官又ハ被審人ハ其ノ事件ヲ他ノ地方海員審判所ニ移付スルノ申請ヲ爲スコトヲ得

前項ノ申請ヲ爲ス者ハ審判期日前ニ管轄海員審判所ヲ經由シテ高等海員審判所ニ申請書ヲ差出スヘシ

高等海員審判所ハ前項ノ申請アリタル場合ニ於テ審判上便益ナリト認ムルトキハ其ノ決定ヲ以テ他ノ地方海員審判所ニ該事件ヲ移付スルコトヲ得

前項ノ場合ニ於テ該事件ハ移付ヲ受ケタル地方海員審判所ノ管轄權ニ屬ス

第十四條 高等海員審判所ハ左ノ場合ニ於テ理事官又ハ被審人ノ申請書ニ依リ何レノ海員審判所ニ於テ本件ヲ審判スルノ權アルヤヲ決定ス

- 一、權限アル地方海員審判所ニ於テ法律上ノ理由若ハ特別ノ事情ニ因リ審判權ヲ行フコトヲ得サルトキ
- 二、二以上ノ地方海員審判所審判權ヲ有シ又ハ有セストノ確定裁決ヲ爲シタルトキ

第三章 審判前ノ手續

第十五條 船舶司檢所司檢官、同司檢官補、警察官吏、市町村長及村役人ニ於テ此ノ法律ニ依リ審判ニ付スヘキ事實アリタルコトヲ認知シタルトキハ直ニ其ノ事實ヲ詳記シ管轄地方海員審判所ノ理事官ニ報告スヘシ

第十六條 領事官及貿易事務官帝國外ニ於テ前條ノ事實アリタルコトヲ認知シタルトキハ證憑ヲ集取シ管轄地方海員審判所ノ理事官ニ報告スヘシ

第十七條 理事官審判ニ付スヘキ事實アリタルコトヲ認知シタルトキハ證憑ヲ集取シ又必要ニ應シ實地臨檢スルコトヲ得

第十八條 理事官ハ職權ヲ以テ審判ノ開始ヲ地方海員審判所ニ申立ツヘシ
前項ノ申立ヲ爲ストキハ證憑其ノ他必要ノ書類ヲ添附スヘシ

第四章 地方海員審判所ノ審判

第十九條 地方海員審判所ハ理事官ノ申立ニ因リ又ハ職權ヲ以テ審判ヲ開始スヘキヤ否ヤヲ決定ス但シ職權ヲ以テスル場合ニ於テハ理事官ノ意見ヲ聽クヘシ

第二十條 地方海員審判所ニ於テ下調ノ必要アリト決定スルトキハ審判所長ハ審判官ニ其ノ下調ヲ命スヘシ

第二十一條 下調ノ命ヲ受ケタル審判官ハ被審人ヲ呼出シテ之ヲ訊問スルコトヲ得
受命審判官ハ必要ナル證憑ヲ集取スヘシ

受命審判官ハ證人、鑑定人ヲ呼出シ又ハ通事ヲ命シ若ハ臨檢ヲ爲スコトヲ得

第二十二條 被審人若ハ證人正當ノ理由ナクシテ受命審判官ノ呼出ニ應セサルトキハ受命審判官ハ引致狀ヲ發シテ之ヲ引致セシムルコトヲ得

引致狀ハ理事官ノ命令ニ因リ拘引狀執行ノ手續ヲ準用シテ之ヲ執行ス

第二十三條 被審人逃走シ又ハ逃走ノ虞アルトキハ受命審判官ハ免狀行使ノ假停止ヲ爲シ若ハ之ヲ差押フルコトヲ得

第二十四條 被審人又ハ證人疾病其ノ他正當ノ事故アリテ呼出ニ應スルコト能ハサルコトヲ疏明スルトキハ受命審判官ハ其ノ所在ニ就テ之レヲ訊問シ若ハ他ノ地方海員審判所ニ其ノ訊問ヲ囑託スルコトヲ得

第二十五條 受命審判官下調ヲ終リタルトキハ調書及一切ノ證憑ヲ審判所長ニ差出し審判所長ハ直ニ之ヲ理事官ニ送付スヘシ

理事官ハ三日以内ニ意見ヲ付シ其ノ書類ヲ審判所長ニ還付スヘシ

第二十六條 地方海員審判所ハ下調ヲ十分ナリト思料スルトキハ審判ヲ繼續スルヤ否ヤヲ決定スヘシ
審判ヲ繼續スヘシト決定スルトキハ審判期日ヲ定メ被審人ヲ呼出スヘシ

審判ヲ繼續セスト決定スルトキハ被審人ヲ放免スヘシ

第二十七條 審判ハ之ヲ公開ス但シ安寧秩序又ハ風俗ヲ害スルノ虞アルトキハ地方海員審判所ノ決定ニ依リ其ノ公開ヲ停止ス

第二十八條 第二十一條乃至第二十四條ハ地方海員審判所ノ審判ノ場合ニモ亦之ヲ適用ス

第二十九條 開廷中秩序ノ維持ハ審判所長ニ屬ス審判所長ハ審判ヲ妨タル者又ハ不當ノ言語ヲ發スル者ヲ退廷セシムルコトヲ得

第三十條 被審人及證人ノ訊問ハ審判長之ヲ爲ス

・審判官及理事官ハ審判長ニ告ケ被審人及證人ヲ訊問スルコトヲ得

第三十一條 理事官ハ審判ニ立會ヒ其ノ意見ヲ述フルコトヲ得

第三十二條 被審人ハ補佐人ヲ用フルコトヲ得但シ地方海員審判所ノ認許シタル者ニ限ル

第三十三條 地方海員審判所ハ呼出テ受ケタル被審人審判期日ニ出頭セサルトキハ闕席裁決ヲ爲スヘシ但シ被審人ノ疾病其ノ他ノ故障ニ依リ審判ヲ行フコト能ハサルトキハ決定ヲ以テ其ノ審判ヲ延期又ハ中止スルコトヲ得

第三十四條 刑事裁判手續中ハ被審人ニ對シ審判ヲ開始スルコトヲ得ス

被審人刑事訴追ヲ受ケタルトキハ其ノ事件ノ判決ヲ終ルマテ審判ヲ中止スヘシ

第三十五條 理事官及被審人ハ本案ノ裁決アルマテ何時ニテモ管轄違又ハ審判ヲ行フヘカラサルノ中立ヲ爲スコトヲ得

地方海員審判所ハ職權ヲ以テ管轄違又ハ審判ヲ行フヘカラサルノ言渡ヲ爲スコトヲ得

第三十六條 地方海員審判所ニ於テ前條ノ申立ヲ却下シタルトキハ本案ノ裁決ヲ待タス直ニ高等海員審判所ニ控告スルコトヲ得

第三十七條 裁決ニハ其ノ理由及證據ヲ明示スヘシ

第三十八條 裁決及裁決始末書ノ原本ハ審判ヲ爲シタル地方海員審判所之ヲ保存スヘシ

第五章 高等海員審判所ノ審判

第三十九條 理事官及被審人ハ地方海員審判所ノ裁決ニ對シ高等海員審判所ニ控告スルコトヲ得

第四十條 控告ノ期間ハ裁決言渡アリタル日ヨリ七日トス

闕席裁決ニ對スル控告ノ期間ハ被審人自ラ裁決ノ送達ヲ受ケタル日ヨリ十四日トス

第四十一條 控告ヲ爲スニハ其ノ申出書ヲ原地方海員審判所ニ差出スヘシ

原地方海員審判所ハ直ニ該申出書及一件書類ヲ高等海員審判所ニ送付スヘシ

第四十二條 高等海員審判所ノ審判ニ付テハ地方海員審判所ノ審判ニ關スル規程ヲ適用ス

第四十三條 高等海員審判所ハ控告ヲ理由アリトスルトキハ原裁決ヲ取消シ更ニ裁決ヲ爲スヘシ

控告ヲ理由ナシトスルトキハ裁決ヲ以テ之ヲ棄却スヘシ

第六章 執行處分

第四十四條 懲戒ハ裁決確定ノ後之ヲ執行ス

第四十五條 免狀行使ノ禁止ヲ言渡シタルトキハ其ノ審判ヲ爲シタル海員審判所ニ於テ免狀ヲ取上ケ
逕信省ニ送付スヘシ

免狀行使ノ停止ヲ言渡シタルトキハ其ノ審判ヲ爲シタル海員審判所ニ於テ免狀ヲ取上ケ期限滿了ノ後之ヲ本人ニ還付スヘシ

免狀行使ノ禁止若ハ停止ヲ言渡サレタル者海員審判所ニ免狀ヲ差出サ、ルトキハ海員審判所ハ其ノ免狀ヲ無効ト爲シ官報ニ告示スヘシ

第七章 罰則

第四十六條 海員審判所又ハ受命審判官ヨリ證人トシテ呼出サレタル者及鑑定又ハ通事ノ爲呼出サレ

タル者正當ノ理由ナクシテ呼出ニ應セス若ハ其ノ義務ヲ盡サ、ルトキハ貳圓以上四拾圓以下ノ罰金ニ處ス

第四十七條 證人トシテ海員審判所ニ呼出サレタル者偽證ヲ爲シタルトキ及ヒ鑑定又ハ通事ノ爲メ海員審判所ニ呼出サレタル者詐僞ノ陳述ヲ爲シタルトキハ一年以上一年以下ノ重禁錮ニ處シ五圓以上五拾圓以下ノ罰金ヲ附加ス

賄賂其ノ他ノ方法ヲ以テ人ニ囑託シテ偽證又ハ詐僞ノ鑑定通事ヲ爲サシメタル者亦同シ
前二項ノ罪ヲ犯シタルモノ其ノ事件ノ裁決言渡ニ至ラサル前ニ自首シタルトキハ本刑ヲ免ス

附 則

第四十八條 此ノ法律ハ明治三十年七月一日ヨリ施行ス

第四十九條 海員審判所ノ事務章程ハ勅令ヲ以テ之ヲ定ム

第五十條 此ノ法律施行ノ際西洋型船舶長、運轉士、機關士免狀規則第十條ニ依リ審問中ノ事件ハ此ノ法律ニ依リ管轄權ヲ有スル地方海員審判所ノ管轄トス其ノ既ニ審問ノ判定ヲ受ケタルモノハ第五章ノ規程ニ依リ高等海員審判所ニ控告スルコトヲ得

海事ニ關スル逓信局ノ管轄區域表

局名	管轄區域
東京逓信局	東京府、神奈川縣、埼玉縣、群馬縣、千葉縣、茨城縣、栃木縣、靜岡縣、山梨縣
名古屋逓信局	愛知縣、三重縣(南牟婁郡ヲ除ク)、岐阜縣、長野縣、福井縣、石川縣、富山縣

大阪逓信局	大阪府、京都府、兵庫縣、奈良縣、滋賀縣、和歌山縣、三重縣ノ内南牟婁郡、徳島縣、高知縣
廣島逓信局	廣島縣、鳥取縣、島根縣、岡山縣、山口縣ノ内大島郡、香川縣、愛媛縣
熊本逓信局	熊本縣、長崎縣、山口縣(大島郡ヲ除ク)、福岡縣、大分縣、佐賀縣、宮崎縣、鹿兒島縣、沖繩縣
仙臺逓信局	宮城縣、福島縣、岩手縣、青森縣、山形縣、秋田縣
札幌逓信局	北海道

逓信局海事部出張所名稱、位置及管轄區域表

名稱	位置	管轄區域
東京逓信局海事部	横濱市	神奈川縣(横須賀市、三浦郡、鎌倉郡ヲ除ク)
東京逓信局海事部出張所	横濱市	靜岡縣(加茂郡ノ内下田町、濱崎町、白濱町、下河津村、稲取町、城東村及田方郡ノ内熱海町、伊東町、多賀村、網代村、宇佐美村、小室村、對馬村ヲ除ク)
東京逓信局海事部出張所	神奈川縣三浦郡浦賀町	神奈川縣ノ内横須賀市、三浦郡、鎌倉郡
東京逓信局海事部出張所	新潟市	新潟縣
名古屋逓信局海事部出張所	富山縣射水郡伏木町	富山縣、福井縣(敦賀郡、三方郡、遠敷郡、大飯郡ヲ除ク)、石川縣
大阪逓信局海事部出張所	神戸市	兵庫縣(三原郡ヲ除ク)

大阪逓信局海事部……德島縣板野撫養出張所……郡撫養町
兵庫縣ノ内三原郡、德島縣、高知縣(安藝郡ノ内甲浦町)

大阪逓信局海事部……高知市
高知縣(安藝郡ノ内甲浦町ヲ除ク)

廣島逓信局海事部……岡山縣兒島玉出張所……郡日比町
香川縣、岡山縣(淺口郡及小田郡ヲ除ク)

廣島逓信局海事部……鳥取縣境出張所……西伯郡境町
鳥取縣、島根縣

廣島逓信局海事部……愛媛縣温泉三津濱出張所……郡三津濱町
愛媛縣(今治市、越智郡、周桑郡、新居郡、宇摩郡ヲ除ク)、山口縣ノ内大島郡

廣島逓信局海事部……郡土生町
廣島縣御調郡ノ内土生町、三庄町、大濱村、田熊村、中庄村、三浦村、重井村

熊本逓信局海事部……長崎市
熊本縣ノ内天草郡、長崎縣、佐賀縣

熊本逓信局海事部……大牟田市
福岡縣ノ内久留米市、大牟田市、浮羽郡、三井郡、三潞郡、八女郡、山門郡、三池郡、熊本縣(天草郡ヲ除ク)

熊本逓信局海事部……鹿兒島市
鹿兒島縣、宮崎縣、沖繩縣

札幌逓信局海事部……小樽市
北海道ノ内後志國、石狩國、天鹽國、北見國

地方海員審判所管轄區域 (昭和二年十月逓信省令第四十一號抄錄)

東京(東京、神奈川、新潟、埼玉、群馬、千葉、茨城、栃木、三重、愛知、靜岡、山梨、岐阜、長野、野、宮城、福島、巖手、山形ノ各府縣)

大阪(大阪、京都、兵庫、奈良、滋賀、福井、石川、富山、鳥取、島根、岡山、廣島、和歌山、徳島、香川、愛媛、高知ノ各府縣)

門司(長崎、山口、福岡、大分、佐賀、熊本、宮崎、鹿兒島、沖繩ノ各縣及支那ニ船籍ヲ置ク船舶)

函館(北海道、青森、秋田ノ各縣)

海上衝突豫防及其他

海上衝突豫防法

(明治二十五年六月公布
大正十四年三月改正)

總 則

本法ハ海洋ト海洋接続ノ場所トヲ問ハス凡ソ航洋船ノ運航シ得ヘキ水上ニ於ケル船舶ニ適用ス

本法中汽船ト雖モ帆ヲ以テ運轉シ汽力ヲ用キサルトキハ帆船ト看做シ汽力ヲ用ウルトキハ帆ヲ用フルト用キサルトノ別ナク汽船ト看做スヘシ

本法中汽船トハ凡ソ機關ノ作用ニ因テ運轉スル船舶ヲ謂フ

本法中船舶航行中トハ碇泊若ハ繫留又ハ坐礁、膠沙ニ非サル場合ヲ謂フ

船 燈

本法中船燈ニ關シテ見得ルトハ晴天ノ暗夜ニ於テ認メ得ルヲ謂フ

第一條 船燈ニ關スル規定ハ天氣ノ如何ニ關セス日没ヨリ日出マテ必ス遵守スヘシ此ノ時間中ハ本法ニ定メタル船燈ノ外之ニ紛レ易キ燈ヲ掲クヘカラス

第二條 汽船ハ航行中必ス左ノ燈ヲ掲クヘシ

一、前橋若ハ其ノ前面ニ於テ又ハ前橋ヲ具ヘサルトキハ本船ノ前方ニ於テ船體上二十尺ヨリ低カ

ラサル所ニ若シ船幅二十尺ヲ超ユルトキハ其ノ船幅ヨリ低カラサル所ニ亮明ノ白燈一個ヲ掲クヘシ、然レトモ船體上四十尺以上ノ所ニ掲クルヲ要セス此ノ燈ハ常ニ不同ナキ光ヲ發シテ鏡盤ノ二十點間ヲ照スヘク製造シ其ノ射光ヲ左右舷外へ十點間ツ、即チ船ノ正首ヨリ各舷正横後ノ二點マテ及フヘキ様裝置シ且少クモ五海里ノ距離ヨリ見得ヘキモノヲ用ウヘシ

二、右舷ニ綠燈ヲ掲クヘシ、此ノ燈ハ常ニ不同ナキ光ヲ發シテ鏡盤ノ十點間ヲ照スヘク製造シ其ノ射光ヲ船ノ正首ヨリ右舷正横後ノ二點マテ及フヘキ様裝置シ、且少クモ二海里ノ距離ヨリ見得ヘキモノヲ用ウヘシ

三、左舷ニ紅燈ヲ掲クヘシ此ノ燈ハ常ニ不同ナキ光ヲ發シテ鏡盤ノ十點間ヲ照スヘク製造シ其ノ射光ヲ船ノ正首ヨリ左舷正横後ノ二點マテ及フヘキ様裝置シ、且少クモ二海里ノ距離ヨリ見得ヘキモノヲ用ウヘシ

四、本條第二項第三項ノ燈ニハ其ノ燈ヨリ前ニ少クモ三尺突出シタル隔板ヲ其ノ燈ノ内側ニ裝置シ右舷ノ綠光ハ左舷ニアル船ヨリ、左舷ノ紅光ハ右舷ニアル船ヨリ見得サル様ニ爲スヘシ

五、汽船航行中ハ本條第一項ニ規定シタル白燈ノ外ニ同種ノ白燈一個ヲ増掲スルヲ得、但シ此ノ場合ニ於テハ其ノ兩燈ヲ龍骨線上前後ニ隔テ其ノ前燈ヲ後燈ヨリ少クモ十五尺下方ニ掲ゲ其ノ前後ノ距離ハ上下ノ距離ヨリ多キヲ要ス

第三條 汽船他船ヲ引キテ航行スルトキハ兩舷燈ヲ掲クルノ外ニ白燈二個ヲ上下ニ少クモ六尺ヲ隔テ連掲スヘシ、此ノ白燈ハ第二條第一項ノ白燈ト同一ノ構造ニシテ且同一ノ場所ニ掲クルヲ要ス、然レトモ二艘以上ヲ引キテ航行スルトキハ其ノ引キタル船ノ船尾ト最後ニ引カル、船ノ船尾トノ距離六百尺以上ノ場合ニ於テハ右二個ノ白燈ヨリ上方若ハ下方六尺ノ所ニ尙同種ノ白燈一個ヲ増掲スヘシ

本條ノ引船ハ引カル、船舶ノ操舵目標トシテ烟突若ハ後橋ノ後面ヘ小形ノ白燈一個ヲ掲クルヲ得但シ此ノ白燈ハ本船正横ヨリ前面ニ見得サル様ニ爲スヲ要ス

第四條 事變ノ爲運轉自由ヲ得サル船舶ハ夜間ニアリテハ第二條第一項ニ規定シタル白燈ト同一ノ高サニ於テ最モ見得易キ所ニ(汽船ナレハ其ノ白燈ノ代リニ)二個ノ紅燈ヲ上下ニ少クモ六尺ヲ隔テ連掲スヘシ、此ノ紅燈ハ周回少クモ二海里ノ距離ヨリ見得ヘキモノタルヲ要ス又晝間ニアリテハ最モ見得易キ所ニ直徑二尺ノ黑球若ハ黑色ノ形象二個ヲ上下ニ少クモ六尺ヲ隔テ連掲スヘシ

海底電信線ノ布設又ハ引揚ニ從事スル船舶ハ夜間ニアリテハ第二條第一項ニ規定シタル白燈ノ位置ニ於テ(汽船ナレハ其ノ白燈ノ代リニ)三個ノ燈ヲ上下ニ少クモ六尺ツ、ヲ隔テ連掲スヘシ但シ此ノ燈三個ノ内上下ノ二個ハ紅色中央ノ一個ハ白色ニシテ、周回少クモ二海里ノ距離ヨリ見得ヘキモノタルヲ要ス又晝間ニアリテハ最モ見得易キ所ニ直徑二尺以上ノ形象三個ヲ上下ニ少クモ六尺ツ、ヲ隔テ連掲シ其ノ上下ノ二個ハ紅色球形ヲ用キ中央ノ一個ハ白色菱形ヲ用フヘシ、本條ノ船舶全ク運

行セサルトキハ舷燈ヲ掲クヘカラス然レトモ運行スルトキハ必ス之ヲ掲クヘシ
本條規定ノ燈及形象ハ運轉自由ヲ得スシテ他船ノ航路ヲ避クル能ハサルノ信號ト認ムヘシ
本條ノ信號ハ難船信號ト混同スヘカラス、難船信號ハ第三十一條ニ於テ之ヲ規定ス

第五條 航行中ノ帆船及他船ニ引カレテ運行スル船舶ハ第二條第二項第三項ノ舷燈ノミヲ掲クヘシ決シテ同條第一項ノ白燈ヲ掲クヘカラス

第六條 小形船航行中天氣ノ模様ニ因リ綠紅ノ二舷燈ヲ掲ケ置キ難キトキハ何時ニテモ使用シ得ヘキ様點火シテ之ヲ手近カニ備ヘ置キ他船ノ我船ニ近寄り來ルカ又ハ我船ノ他船ニ近寄り行クトキハ衝突ヲ防クニ充分ナル時間ヲ見定メテ其ノ舷燈ヲ他船ヨリ最モ見得易キ様各舷ニ表示スヘシ但シ此ノ

時綠光ハ左舷ヨリ、紅光ハ右舷ヨリ見得ス且成ルヘク各舷正横後ノ二點ヨリ後方ヘ見得サル様ニ爲スヲ要ス

此ノ綠紅ノ各燈ヲ間違ヒナク容易ニ取扱フ爲メ綠燈ハ綠色、紅燈ハ紅色ニテ外面ヲ塗リ且ツ適當ノ隔板ヲ備置クヘシ

第七條 總積量四十噸未満ノ汽船總積量二十噸未満ノ帆船及櫓權ヲ以テ運轉スル船、航行中ハ必スシモ第二條第一項第二項第三項ニ規定シタル燈ヲ掲クルヲ要セス然レトモ若シ之ヲ掲ケサルトキハ必ス左ノ規定ニ依ルヘシ

一、四十噸未満ノ汽船

甲、船ノ前部又ハ煙突若ハ其ノ前面ニ於テ舷縁上九尺ヨリ低カラス且最モ見得易キ所ニ第二條第一項ニ規定シタル構造裝置ニシテ少クモ二海里ノ距離ヨリ見得ヘキ白燈一個ヲ掲クヘシ

乙、第二條第二項、第三項ニ規定シタル構造裝置ニシテ少クモ一海里ノ距離ヨリ見得ヘキ綠紅ノ二舷燈ヲ掲クルカ又ハ船首ヨリ各舷正横後ノ二點マテ右舷ハ綠色左舷ハ紅色ノ射光ヲ及ホスヘク製造シタル兩色燈一個ヲ掲クヘシ、但シ此ノ燈ハ白燈ヨリ少クモ三尺下方ニ掲クルヲ要ス

二、汽艇ハ第一項甲ノ白燈ヲ舷縁上九尺ノ所ヨリ下方ニ掲クルヲ得、然レトモ其ノ白燈ハ乙ノ兩色燈ヨリ高キヲ要ス

三、二十噸未満ノ帆船ハ帆ヲ用ウルト櫓權ヲ用ウルトニ拘ハラス一面ハ綠色一面ハ紅色ノ玻璃ヲ用キタル燈籠一個ヲ手近カニ備置キ他船ノ我船ニ近寄り來ルカ又ハ我船ノ他船ニ近寄り行クトキハ衝突ヲ防クニ充分ナル時間ヲ見定メテ之ヲ表示スヘシ、但シ此ノ時綠光ハ左舷ヨリ紅

光ハ右舷ヨリ見得サル様ニ爲スヲ要ス

四、櫓權ヲ以テ運轉スル船ハ櫓權ヲ用ウルト帆ヲ用ウルトニ拘ハラズ白色ノ燈籠一個ヲ手近ニ備ヘ置キ衝突ヲ防クニ充分ナル時間ヲ見定メテ臨時之ヲ表示スヘシ

本條ノ諸船ハ第四條第一項及第十一條末項ノ燈ヲ掲クルニ及ハス

第八條 水先船水先業務ノ爲メ其ノ營業所ニ在ルトキハ他船ニ要スル燈ヲ表示セス周回ヨリ見得ヘキ白燈一個ヲ檣頭ニ掲ケ且十五時間ヲ超エサル短時ノ間隙ヲ以テ閃火一個若ハ數個ヲ發スヘシ

水先船ニハ點火シタル舷燈ヲ用意シ置キ、他船ノ我船ニ近寄り來ルカ又ハ我船ノ他船ニ近寄り行クトキハ我船ノ進行スル方向ヲ示ス爲メ短時ノ間隙ヲ以テ之ヲ表示スヘシ、但シ此ノ時綠光ハ左舷ヨリ紅光ハ右舷ヨリ見得サル様ニ爲スヲ要ス

水先人ヲ要招スル船舶ヘ直付ケスヘキ水先船ハ白燈ヲ檣頭ニ掲クル代リニ隨時之ヲ表示シ又前項ノ舷燈ノ代リニ一面ハ綠色、一面ハ紅色ノ玻璃ヲ用キタル燈籠一個ヲ手近カニ備置キ前項ノ規定ニ依リ之ヲ使ムルヲ得

免許水先人ノ業務ニ專用スル水先汽船水先業務ノ爲メ其ノ營業所ニアリテ碇泊セサルトキハ第一項ノ規定ニ依リ水先船ニ要スル燈及閃火ノ外ニ檣燈ノ下方八尺ノ所ニ周回少クモ一海里ノ距離ヨリ見得ヘキ紅燈一個ヲ増掲シ、且航行中ノ船舶ニ要スル舷燈ヲ掲クヘシ

前項ノ水先汽船水先業務ノ爲メ其ノ營業所ニアリテ碇泊スルトキハ第一項ノ規定ニ依リ水先船ニ要スル燈及閃火ノ外ニ前項ノ規定ニ依リ紅燈ヲ増掲スヘシ但シ舷燈ヲ掲クヘカラス

水先船其ノ營業所ニアルモ水先業務ニ從事セサルトキハ其ノ積量ニ相當スル他船ト同様ノ燈ヲ掲クヘシ

第九條 漁船ハ航行中特ニ本條ニ規定アル場合ヲ除ク外其ノ積量ニ相當スル航行中ノ船舶ニ對シテ規定シタル燈ヲ掲クルカ又ハ之ヲ表示スヘシ

一、無甲板船即チ全部張詰メタル甲板ニ因リテ海水ノ浸入ヲ防カサル船、夜間漁業ニ從事スルニ當リ其ノ放出スル漁具ノ端ト本船トノ水平上ノ距離カ百五十尺以内ナルトキハ周回ヨリ見得ヘキ白燈一個ヲ掲クヘシ

無甲板船夜間漁業ニ從事スルニ當リ其ノ放出スル漁具ノ端ト本船トノ水平上ノ距離カ百五十尺ヲ超ユルトキハ周回ヨリ見得ヘキ白燈一個ヲ掲ク、且我船ノ他船ニ近寄り行クトキ又ハ他船ノ我船ニ近寄り來ルトキハ其ノ白燈ノ下方ニ少クモ三尺ヲ隔テ、且漁具ノ結著シタル方向ニ於テ水平上少クモ五尺ヲ隔テ白燈一個ヲ増表スヘシ

二、第一ニ規定シタル無甲板船ヲ除ク外、流シ網ヲ用キテ漁業ニ從事スル船舶ハ網ノ全部又ハ一部水中ニ投下シアル間ハ最モ見得易キ所ニ白燈二個ヲ掲クヘシ、此ノ兩燈ハ上下ノ距離六尺ヨリ少カラズ十五尺ヨリ多カラズ、且韻骨線ニテ測リタル前後ノ距離五尺ヨリ少カラズ十尺ヨリ多カラズ様其ノ一燈ヲ他燈ノ下方ニ裝置シ其ノ下燈ハ網ノ方向ニ掲クヘシ、此ノ兩燈ハ周回少クモ三海里ノ距離ヨリ見得ヘキモノタルヲ要ス

總積量二十噸未滿ノ帆走漁船ハ地中海及日本國並韓國ノ沿海ニ於テハ必スシモ兩燈中其ノ下燈ヲ掲クルヲ要セス然レトモ之ヲ掲ケサルトキハ他船ノ我船ニ近寄り來ルカ又ハ我船ノ他船ニ近寄り行クトキ少クモ一海里ノ距離ヨリ見得ヘキ白燈一個ヲ同一ノ位置（網又ハ漁具ノ方向ニ於テ）ニ表示スヘシ

三、第一ニ規定シタル無甲板船ヲ除ク外延繩ヲ用キテ漁業ニ從事スルニ當リ延繩ヲ結著シ又ハ之

ヲ曳入ル、船舶ニシテ碇泊セス又ハ第八條ニ依リ停留セサルモノハ流シ網ヲ用ヒテ漁業ニ從事スル船舶ト同一ノ燈ヲ掲クヘシ、其ノ延繩ヲ延ヘ又ハ曳繩ヲ用フルモノハ其ノ船ノ種類ニ應シ航行中ノ汽船又ハ帆船ニ對シテ規定シタル燈ヲ掲クヘシ
總積量二十噸未満ノ帆走漁船ハ地中海及日本國並韓國ノ沿海ニ於テハ必スシモ兩燈中其ノ下燈ヲ掲クルヲ要セス然レトモ之ヲ掲ケサルトキハ他船ノ我船ニ近寄り來ルカ又ハ我船ノ他船ニ近寄り行クトキ少クモ一海里ノ距離ヨリ見得ヘキ白燈一個ヲ同一ノ位置(釣繩ノ方向ニ於テ)表示スヘシ

四、打タセ網(總テ海底ニ漁具ヲ曳クモノヲ包含ス)ヲ用キテ漁業ニ從事スル船舶ハ左ノ規定ニ依ルヘシ

甲、汽船ハ第二條第一項ニ規定シタル白燈ノ位置ニ三色ノ燈籠一個ヲ掲ケ尙其ノ下方六尺ヨリ少カラス十二尺ヨリ多カラサル所ニ白色ノ燈籠一個ヲ増掲スヘシ、此ノ三色燈ハ船ノ正首ヨリ左右各二點マテハ白色、其レヨリ各舷正横後ノ二點マテ右舷ハ綠色左舷ハ紅色ノ射光ヲ及スヘク製造シ且裝置スルヲ要シ又白燈ハ常ニ不同ナク亮明ノ光ヲ發シテ周回ヲ照スヘク製造シタルモノタルヲ要ス

乙、帆船ハ常ニ不同ナク亮明ノ光ヲ發シテ周回ヲ照スヘク製造シタル白色ノ燈籠一個ヲ掲ケ、且他船ノ我船ニ近寄り來ルカ又ハ我船ノ他船ニ近寄り行クトキハ衝突ヲ防クニ充分ナル時間ヲ見定メ最モ見得易キ所ニ白色ノ閃火又ハ炬火一個ヲ表示スヘシ
甲及ヒ乙ニ規定シタル諸燈ハ少クモ二海里ノ距離ヨリ見得ヘキモノタルヲ要ス

五、桁網ヲ用キテ牡蠣採取ニ從事スル船舶其ノ他桁網ヲ用キテ漁業ニ從事スル船舶ハ、打タセ網

ヲ用キテ漁業ニ從事スル船舶ト同一ノ燈ヲ掲ケ、及之ヲ表示スヘシ
六、漁船ハ本條ニ規定シタル燈ヲ掲ケ及之ヲ表示スル外何時ニテモ閃火ヲ用キ且漁業用ノ燈火ヲ用ウルヲ得

七、長サ百五十尺未満ノ漁船碇泊中ハ周回少クモ一海里ノ距離ヨリ見得ヘキ白燈一個ヲ掲クヘシ長サ百五十尺以上ノ漁船碇泊中ハ周回少クモ一海里ノ距離ヨリ見得ヘキ白燈一個ヲ掲ケ且第十一條ニ規定シタル白燈一個ヲ増掲スヘシ
長サ百五十尺未満ナルト百五十尺以上ナルトヲ問ハス碇泊中ノ漁船漁網其ノ他ノ漁具ヲ結著シタルトキハ他船ノ我船ニ近寄り來ルトキ碇泊燈ノ下方少クモ三尺ヲ隔テ、且漁網其ノ他ノ漁具ノ方向ニ於テ水平上少クモ五尺ヲ隔テ白燈一個ヲ増表スヘシ

八、漁船漁業ニ從事中漁具ノ岩礁其ノ他障礙物ニ纏著シタル爲メ停留スルトキハ晝間ニアリテハ第十二規定スル晝間信號ヲ引下シ夜間ニアリテハ碇泊船ト同一ノ燈ヲ表示シ又霧中降雪其ノ

他暴雨中ハ碇泊船ニ對シテ規定シタル霧中信號ヲ爲スヘシ(第十五條第四項及末項參照)
九、霧中降雪其ノ他暴雨中流シ網、打タセ網、桁網又ハ延繩ヲ用キテ漁業ニ從事スル總積量二十噸以上ノ船舶ハ汽船ニアリテハ汽笛、若ハ汽角、帆船ニアリテハ號角ヲ用キ一分時ヨリ多カラサル間隙ヲ以テ一聲ヲ發シ之ニ續キテ號鐘ヲ鳴ラスヘシ、總積量二十噸未満ノ漁船ハ必スシモ此ノ信號ヲ爲スヲ要セス然レトモ之ヲ爲サ、ルトキハ一分時ヨリ多カラサル間隙ヲ以テ適宜他ノ有效ナル音響信號ヲナスヘシ

十、網、延繩又ハ打タセ網ヲ用キテ漁業ニ從事スル船舶航行中晝間ニアリテハ最モ見得易キ所ニ籃其ノ他ノ信號ヲ掲ケ近寄り來ル他船ニ其ノ漁業中ナルコトヲ表示スヘシ若シ碇泊中ノ船舶

漁具ヲ投下セルトキハ他船ノ近寄り來リタルトキ同様ノ信號ヲ他船ノ航過シ得ル舷側ニ於テ表示スヘシ

本條ニ依リ特ニ規定シタル燈ヲ掲ケ又之ヲ表示スルヲ要スル船舶ハ第四條第一項及第十一條末項ノ燈ヲ掲クルニ及ハス

第十條

他船ニ追越サレントスル船舶ハ他船ニ向テ船尾ヨリ白燈ヲ表示シ又ハ閃火ヲ發スヘシ

本條ニ從テ表示スヘキ白燈ハ豫メ船尾ニ掲置クヲ得、然レトモ此ノ燈ハ少クモ一海里ノ距離ヨリ見得ヘキモノニシテ常ニ不同ナキ光明ノ光ヲ發シ鏡盤ノ十二點間ヲ照スヘク製造シ船ノ正後ヨリ左右ヘ六點間宛射光ノ及フヘキ様、隔板ヲ裝置シ成ルヘク舷燈ト同一ノ高サニ掲クヘシ

第十一條

長サ百五十尺未満ノ船舶碇泊中ハ前方ノ最モ見得易クシテ船體上ヨリ二十尺ヲ越エサル所ニ白燈一個ヲ掲クヘシ此ノ燈ハ常ニ不同ナキ光明ノ光ヲ發シ周回少クモ一海里ノ距離ヨリ見得ヘキモノタルヲ要ス

長サ百五十尺以上ノ船舶碇泊中ハ前方ノ最モ見得易クシテ船體上二十尺以上四十尺以下ノ所ニ前項ノ白燈一個ヲ掲ケ且船尾若ハ其ノ最寄ニ於テ前方ノ燈ヨリ少クモ十五尺下方ニ同種ノ白燈一個ヲ掲クヘシ

本條船舶ノ長サハ本船、船籍證書面ノ長サニ依ルヘシ

船路若ハ其ノ最寄ニ於テ乗揚ケタル船舶ハ本條白燈ノ外、尙第四條第一項ニ規定シタル紅燈二個ヲ掲クヘシ

第十二條

各船他船ノ注意ヲ喚起スル爲メ必要ナリトスルトキハ本法ニ規定シタル船舶燈ノ外、尙閃火ヲ發シ或ハ離船信號ト混同セサル爆裂信號ヲ發スルヲ得

第十三條

本法船舶燈ノ規定ハ二艘以上ノ軍艦又ハ軍艦ニ護送セラル、船舶ニ増掲スル列位燈及信號燈ニ關シ各國政府ニ於テ特ニ制定シタル規則ノ施行ヲ妨ケス又船舶所有主ニ於テ其ノ國政府ノ許可ヲ受ケ登簿公告ノ手續ヲ經テ私用スル識別信號ノ使用ヲ妨ケス

第十四條

汽船畫間ニ帆ノミヲ以テ運轉スルモ其ノ煙突ヲ引下ケサルトキハ前方ノ最モ見得易キ所ニ直徑二尺ノ黑球若ハ黑色形象一個ヲ掲クヘシ

霧中信號

第十五條

航行中ノ船舶ニ關シ本條ニ規定シタル信號ヲ爲スニハ左ノ信號器ヲ用ウヘシ

汽船ハ汽笛若ハ汽角

帆船及他船ニ引カレテ運行スル船舶ハ霧中號角

本條中長聲トハ四秒乃至六秒時間ノ發聲ヲ謂フ

汽船ハ汽力其ノ他之ニ代用スヘキモノニ因リ發聲スル適當ノ汽笛若ハ汽角ヲ音響ノ妨害物ナキ所ニ裝置シ且號鐘及機齒ノ作用ニ因リ發聲スル適當ノ霧中號角ヲ備フヘシ又總積量二十噸以上ノ帆船ハ汽船同様ノ號鐘及霧中號角ヲ備フヘシ

霧中降雪其ノ他暴雨中ハ晝夜ノ別ナク左ノ各項ニ規定シタル信號ヲ爲スヘシ

一、汽船航行中ハ二分時ヨリ多カラサル間隔ヲ以テ長聲ヲ一發スヘシ

二、汽船航行中運轉ヲ止メテ速力ヲ有タサルトキハ二分時ヨリ多カラサル間隔ヲ以テ長聲ヲ二發スヘシ但其ノ二發ノ間隔ハ大約一秒時タルヲ要ス

三、帆船航行中ハ一分時ヨリ多カラサル間隔ヲ以テ右舷開ナレハ一聲ヲ發シ左舷開ナレハ二聲ヲ

連發シ船ノ正横後ニ風ヲ受ケタルトキハ三聲ヲ連發スヘシ

四、船舶碇泊中ハ一分時ヨリ多カラサル間隙ヲ以テ大約五秒時間劇シク號鐘ヲ鳴ラスヘシ

五、他船ヲ引キテ運航スル船舶、海底電信線ノ布設若ハ引揚ニ從事スル船舶及航行中運轉自由ヲ得スシテ近寄り來ル他船ノ航路ヲ避ケ能ハサルカ又ハ本法ニ違テ運轉シ能ハサル船舶ハ本條第一項及第三項ニ規定シタル信號ノ代リニ二分時ヨリ多カラサル間隙ヲ以テ三聲ヲ連發シ即チ長聲ヲ一發シタル後、直ニ短聲ヲ二發スヘシ又他船ニ引カレテ運行スル船舶モ此ノ信號ヲナスハ妨ケナシト雖他ノ信號ヲナスヘカラス

總積量二十噸未滿ノ帆船ハ必スシモ前數項ニ規定シタル信號ヲ爲スヲ要セス然レトモ其ノ信號ヲ爲サ、ルトキハ一分時ヨリ多カラサル間隙ヲ以テ適宜他ノ音響信號ヲ爲スヘシ

霧中速度

第十六條 霧中降雪其ノ他暴雨中ハ各船現時ノ狀況ニ注意シ、適度ノ速度ヲ以テ進行スヘシ汽船其ノ正横ヨリ前面ニ方リテ他船ノ霧中信號ヲ聞キ其ノ所在ヲ定メ得サルトキハ成ルヘク機關ノ運轉ヲ止メ全ク衝突ノ虞ナキニ至ルマテ其ノ運航ニ注意スヘシ

航方

衝突ノ危險ハ其ノ現況ニヨリ我船ニ近寄り來ル他船ノ方位ヲ看守シテ之ヲ豫知スルヲ得、若其ノ方位隨カニ變更スルヲ認メサルトキハ危險アルモノト知ルヘシ

第十七條 二艘ノ帆船互ニ近寄りテ衝突ノ虞アルトキハ其ノ一船ヨリ左ノ如ク他船ノ航路ヲ避クヘシ

一、一杯ニ開カサル船ハ一杯ニ開キタル船ノ航路ヲ避クヘシ

二、左舷ニ一杯ニ開キタル船ハ右舷ニ一杯ニ開キタル船ノ航路ヲ避クヘシ

三、一杯ニ開カサル二艘ノ船、風ヲ受ケル舷同シカラサルトキハ左舷ニ風ヲ受ケタル船ヨリ他船ノ航路ヲ避クヘシ

四、一杯ニ開カサル二艘ノ船、風ヲ受ケル舷、同シキトキハ風上ノ船ヨリ風下ノ船ノ航路ヲ避クヘシ

五、船尾ヨリ風ヲ受ケタル船ハ他船ノ航路ヲ避クヘシ

第十八條 二艘ノ汽船正シク眞向、又ハ幾ント眞向ニ行逢フテ衝突ノ虞アルトキハ兩船トモ針路ヲ右舷ニ轉シ互ニ他船ノ左舷ノ方ヲ行過クヘシ

本條ハ兩船正シク眞向又ハ幾ント眞向ニ行逢フテ衝突ノ虞アルトキニ限り適用スヘシ、兩船各々其ノ針路ヲ保チテ互ニ替リ行クトキニハ適用スヘカラス

本條ヲ應用スヘキ場合ハ兩船共ニ正シク眞向又ハ幾ント眞向ニ行逢ヒタルトキ即チ晝間ニアリテハ我船ノ櫓ト他船ノ櫓ト一直線又ハ幾ント一直線ニ見ユルトキ夜間ニアリテハ互ニ他船ノ兩舷燈ヲ見ルトキニ限ルヘシ

本條ハ晝間他船ノ我針路ヲ横切リテ我船ノ前面ニ見ユルトキ又ハ夜間我船ノ紅燈他船ノ紅燈ニ對シ或ハ我船ノ綠燈他船ノ綠燈ニ對スルトキ又ハ我船ノ前面ニ綠燈ヲ見スシテ紅燈ヲ見、或ハ紅燈ヲ見スシテ綠燈ヲ見ルトキ又ハ綠紅ノ兩燈ヲ我船ノ前面ヨリ他ノ位置ニ見ルトキハ適用スヘカラス

第十九條 二艘ノ汽船互ニ航路ヲ横切リ衝突ノ虞アルトキハ他船ヲ右舷ニ見ル船ヨリ他船ノ航路ヲ避クヘシ

第二十條 帆船ト汽船ト互ニ近奇リ衝突ノ虞アルトキハ汽船ヨリ帆船ノ航路ヲ避クヘシ
第二十一條 本法航方ニ依リ二船ノ内一船ヨリ他船ノ航路ヲ避クルトキハ他船ニ於テ其ノ針路及速力ヲ保ツヘシ

但シ他船ニ於テ天氣密濛又ハ其ノ他ノ事故ニヨリ航路ヲ避クル船ノ處置ノミニテハ衝突ヲ避ケ能ハサル程、兩船接近シタルコトヲ認ムルトキハ自ラ亦臨機衝突ヲ避クルニ至當ノ處置ヲ爲スヘシ

第二十二條 本法航方ニ依リ他船ノ航路ヲ避クヘキ船ハ成ルヘク他船ノ前面ヲ横切ルヘカラス

第二十三條 本法航方ニ依リ他船ノ航路ヲ避クヘキ汽船ハ他船ニ近寄りタルトキ、時宜ニ應シテ速力ヲ緩メ若ハ運轉ヲ止メ又ハ後退スヘシ

第二十四條 總テ他船ヲ追越ス船ハ本法航方中前數條ノ規定ニ拘ハラズ他船ノ航路ヲ避クヘシ總テ他船ノ兩舷ト横後ノ二點以外即チ夜間ニアリテ舷燈ヲ見難キ位置ヨリ其ノ船ヲ追越サントスル船舶ハ

之ヲ追越船ト爲シ其ノ後兩船ノ位置ニ變更ヲ來スモ其ノ追越船ヲ以テ本法ノ航路横切船トナサス故ニ其ノ船ハ他船ヲ全ク追越シ了ルマテ他船ノ航路ヲ避クヘキモノトス

晝間他船ヲ追越サントスル船舶ニシテ前項ニ記載シタル方位ノ内外ヲ辨知シ難キモノハ本船ヲ追越船ト見做シテ他船ノ航路ヲ避クヘシ

第二十五條 汽船狹隘ノ水道ニ於テ無難ニ通航シ得ルトキハ其ノ中流ノ右側即チ本船ノ右舷ニ當ル方ヲ航行スヘシ

第二十六條 航行中ノ帆船ハ網或ハ繩ヲ用キテ漁業ニ従事スル帆船ノ航路ヲ避クヘシ但シ漁船ト雖モ獵ニ他船ノ通航スヘキ線路ヲ妨クヘカラス

第二十七條 本法ヲ履行スルニ當リ運航及衝突ニ關シ百般ノ危險ニ注意スルハ勿論若シ危險切迫シテ

シ 本法ヲ履行シ能ハサル特殊ノ場合ニ於テハ其ノ危險ヲ避クル爲メ臨機ノ處置ヲ爲スコトニ注意スヘシ

航路信號

第二十八條 本條中短聲トハ大約一秒時間ノ發聲ヲ謂フ

航路中ノ汽船他船ニ近寄り針路ヲ變セントスルトキハ汽笛若クハ汽角ヲ以テ左ノ信號ヲ爲シ他船ニ我行ノ針路ヲ通知スヘシ

短聲一發我船針路ヲ右舷ニ取ル

短聲二發我船針路ヲ左舷ニ取ル

短聲三發我船全速力ニテ後退ス

懈怠ノ責

第二十九條 本法ハ點燈、信號又ハ見張ノ忘リ其ノ他海員ノ常務又ハ臨機ノ處置ニ必要ナル注意ノ忘リヨリ生シタル結果ニ付船、船主、船長、海員ヲシテ其ノ責ヲ免レシメサルモノトス

特例

第三十條 本法ハ行政官廳ニ於テ規定シタル港、川其ノ他内海ノ運航ニ關スル特別規則ノ施行ヲ妨ケ

難船信號

第三十一條 危難ニ罹リテ他船又ハ陸地ヨリ救助ヲ要スル船舶ハ左ノ信號ヲ同時又ハ別々ニ使用スヘシ

晝間信號

- 一、大約一分時ノ間隙ヲ以テ砲又ハ其ノ他ノ爆裂發火信號ヲ一發ス
- 二、國際船舶信號書ニ掲載スルNCノ難船信號ヲ表示ス
- 三、方形旗ノ上又ハ下ニ球若ハ之ニ類似ノモノヲ掲クル遠隔信號ヲ表示ス
- 四、霧中信號器ヲ以テ間斷ナク音響ヲ發ス

夜間信號

- 一、大約一分時ノ間隙ヲ以テ砲又ハ其ノ他ノ爆裂發火信號ヲ一發ス
- 二、船上、發焰(タール桶、油樽等ヲ燃燒スルノ類)
- 三、星火ヲ發スル榴彈或ハ火箭ヲ一次一發ツ、度々打揚ク
- 四、霧中信號器ヲ以テ間斷ナク音響ヲ發ス

附則

第三十二條 本法中船舶積量噸數ニ關シ日本形船ハ十石ヲ以テ一噸ニ通算ス

第三十三條 本法ハ明治二十六年一月一日ヨリ施行ス

第三十四條 明治十三年七月第三十五號布告海上衝突豫防規則同十四年五月第三十三號布告同規則追加同十八年八月第二十七號布告同規則改正追加ハ本法施行ノ日ヨリ廢止ス

海難其ノ他ノ事實屆出方

(昭和八年五年二十五日遞信省令第二十三號)

第一條 海技免狀ヲ受有スル者其ノ職務ヲ行フニ當リ左ノ事項ニ該當シタルトキハ當該船舶ノ船長、船長不在ナルトキハ之ニ代リテ其ノ職務ヲ行フ者ニ於テ其ノ地若シ其ノ地ニ當該官公署ナキトキハ其ノ後最初ニ到着シタル地ノ管海官廳、警察官署又ハ市町村役場、外國ニ在リテハ領事官又ハ貿易事務官ニ其ノ旨届出ツヘシ

但シ船員法第十七條ノ規定ニ依リ報告ヲ爲シタルトキハ此ノ限ニ在ラス

- 一、船舶ヲ放棄シタルトキ
 - 二、自他ノ船舶ヲ問ハス之ニ損害ヲ加ヘ又ハ之ヲ沈没セシメタルトキ
 - 三、人ヲ殺傷シタルトキ
 - 四、海難ニ罹リタル船舶アルコトヲ認メタルトキ
 - 五、職務上ノ義務ニ違背シ又ハ職務ヲ怠リタルトキ
 - 六、亂醉粗暴其ノ他ノ行アリタルトキ
- 第二條 前條各號ニ該當スル事實アリタルコトヲ認知シ又ハ其ノ事實アリト思料スル者ハ其ノ所在地ニ於テ前條ニ掲クル官公署ニ其ノ旨届ツヘシ
- 第三條 第一條ノ規定ニ違反シタル者ハ五十圓以下ノ罰金又ハ科料ニ處ス

附則

本令ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス
明治三十年遞信省令第十九號ハ之ヲ廢止ス

内海水道航行規則

(昭和四年二月一日遞信省令第三三號
昭和九年二月三日遞信省令第十三號)

第一條 本令ハ備讃瀬戸、來島海峡及下關海峡ニ於ケル船舶ニ之ヲ適用ス

本令ニ於テ備讃瀬戸、來島海峡及下關海峡トハ左ノ水域ヲ謂フ

備讃瀬戸、男木島燈臺ヨリ豊島ノ南端、大槌島ノ頂、小與島ノ南端、本島シヨケンボ鼻及黒鼻、佐柳島ノ南西端、二面島ノ頂、高見島板持鼻、沖ノ洲挂燈浮標、牛島九五米山ノ頂、三ツ子島燈臺、小瀬居島ノ頂及小槌島ノ頂ヲ經テ男木島ノ南端ニ引キタル線ニ依リ圍マルル水域
來島海峡、蒼社川口ノ東岸ヨリ大島「タケノ」鼻ニ引キタル線竝大下島「アゴノ」鼻ヨリ梶取鼻及大島宮ノ鼻ニ引キタル線ニ依リ圍マルル水域但シ今治ノ港域ヲ除ク
下關海峡、部埼燈臺ヨリ四十五度(眞方位)ニ海里ノ點ヨリ部埼燈臺及滿珠島ノ頂ニ引キタル線、滿珠島ノ頂ヨリ串埼ニ引キタル線竝和合良島ノ頂ヨリ臺場鼻及堺鼻ニ引キタル線ニ依リ圍マルル水域但シ門司、下關及若松ノ港域ヲ除ク

第二條 船舶ハ左ノ各號ノ場合ヲ除クノ外航路筋ニ於テ碇泊又ハ停留スルコトヲ得ス

- 一、衝突其ノ他急迫ノ危険ヲ避ケムトスルトキ
- 二、運轉自由ヲ得ザルトキ
- 三、人命又ハ船舶ノ救助ニ從事スルトキ
- 四、海底電線又ハ航路標識ノ工事ニ從事スルトキ
- 五、水路ノ測量又ハ浚渫作業ニ從事スルトキ

六、所轄官廳ノ許可ヲ得テ難破物又ハ沈没物等ノ引揚其ノ他海中ノ工事ニ從事スルトキ

前項第二號乃至第五號ノ船舶晝間ニ於テ航路筋ニ碇泊スルトキハ法令ニ特ニ規定セル場合ヲ除クノ外最モ見易キ場所ニ黒球又ハ黒色ノ形象一個ヲ掲クヘシ

第一項第六號ノ船舶晝間ニ於テ航路筋ニ碇泊スルトキハ最モ見易キ場所ニ紅色ノ方旗ヲ掲クヘシ

前三項ノ規定ハ漁撈中ノ漁船ニハ之ヲ適用セス但シ備讃瀬戸中小與島ノ南端ヨリ小瀬居島ノ頂ニ引キタル線以西ノ水域、來島海峡及下關海峡ニ於テハ漁撈中ノ漁船ヨリ通航船舶ノ進路ヲ避クルコトヲ要ス

第三條 船舶ハ安全ニ替リ行ク餘地ヲ有スル場合ニ非サレハ他ノ船舶ヲ追越スコトヲ得ス

汽船他ノ汽船ノ右舷側ヲ航行シテ追越サムトスルトキハ汽笛又ハ汽角ヲ以テ一長聲ニ引續キ一短聲ヲ其ノ左舷側ヲ航行シテ追越サムトスルトキハ一長聲ニ引續キ二短聲ヲ發スヘシ

第四條 海上衝突豫防法第七條第一項第三號、第四號、同第九條第一項及同第十條第一項ノ規定ニ依リ臨機ニ表示スルヲ以テ足ル船燈ハ第一條ノ水域航行中ノ船舶ニ限り常ニ之ヲ掲ケ置クヘシ

第五條 汽船ハ備讃瀬戸ニ於テハ左ノ航法ニ依ルヘシ

一、島嶼岬角等ノ爲前面ヲ望見スルコト困難ナル場所ニ於テハ其ノ島嶼岬角等ヲ右舷ニ見ル汽船ハ之ニ近寄り左舷ニ見ル汽船ハ之ニ遠サカリテ航行スルコト

二、波節岩ノ東行又ハ西行スル汽船ハ之ヲ左舷ニ見テ航行スルコト

第六條 汽船ハ來島海峡ニ於テハ左ノ航法ニ依ルヘシ

一、中水道ハ順潮ノ場合ニ限り又西水道ハ逆潮ノ場合ニ限り通航スルコト但シ小島波止濱間ノ水道ヲ通航スル汽船ハ順潮ノ場合ト雖西水道ヲ通航スルコトヲ妨ケス

二、前號ノ規定ニ依リ中水道ヲ通航スル汽船ハ龍神島、津島及「アゴノ」鼻ニ近寄り又西水道ヲ通航スル汽船ハ之ニ遠サカリテ航行スルコト即チ行逢汽船ニ在リテハ南流ニ於テ互ニ右舷ヲ北流ニ於テ互ニ左舷ヲ相對シテ航過スルモノトス

三、第一號但書ノ規定ニ該當スル汽船ハ海峽ノ西側（今治港防波堤燈臺、大濱燈臺、來島白石燈標）ニ近寄りテ航行スルコト

中水道又ハ西水道ヲ通航スル汽船ハ轉流時ニ在リテハ一ノ瀬鼻又ハ龍神島ニ竝航シタルトキヨリ中水道又ハ西水道ヲ通過シ終ル迄汽笛又ハ汽角ヲ以テ數回左ノ信號ヲ爲スヘシ

中水道通航汽船 一長聲

西水道通航汽船 二長聲

小島波止濱間ノ水道ヲ通航スル汽船ハ來島又ハ龍神島ニ竝航シタルトキヨリ西水道ヲ通過シ終ル迄汽笛又ハ汽角ヲ以テ數回三長聲ヲ發スヘシ

第七條 前條ノ潮流ノ流向ニ付テハ中渡島潮流信號所ノ潮流信號ニ又之ニ依リ難キ場合ハ水路部刊行潮汐表ニ依ルモノトス

第八條 汽船ハ下關海峽ニ於テハ左ノ航法ニ依ルヘシ

一、東口ヨリ西行スル汽船ハ火ノ山ノ頂ヨリ駕ケ鼻ニ引キタル線ニ達スル前門司埼燈標ヨリ滿珠島ノ頂ニ引キタル線以北ノ水域ニ入ルコト又東口ニ向ケ東行スル汽船ハ下關高燈ヨリ三角山ノ頂ニ引キタル線ニ達スル前門司埼燈標ヨリ巖流島燈臺ニ引キタル線以北ノ水域ニ入ルコト

二、南水道ヨリ西行スル汽船又ハ南水道ニ向ケ東行スル汽船ハ前號ノ規定ニ拘ラス相互危險ナク

通航シ得ル限度ニ於テ出來得ル限り門司埼ニ近寄りテ航行スルコト（若シ門司埼ニ近寄りテ航行シ能ハサルトキハ前號ノ規定ニ依リテ航行スルコト）

三、第一號ノ汽船行逢ヒタルトキハ互ニ左舷ヲ相對シテ航過スルコト

四、潮流ニ遡リ早瀬瀬戸（杓ヶ鼻ヨリ下關低燈ニ引キタル線及鷗ヶ鼻ヨリ火ノ山ノ頂ニ引キタル線ニ依リ圍マル水域）ヲ通航スル汽船ハ潮流ノ速度（水路部刊行潮汐表及下關海峽潮流圖ニ依ル）ヲ超ヘ一時間三海里以上ノ速度ヲ保ツコト

五、下關高燈附近ト山底ノ鼻附近トノ間ニ於テハ航行ニ因リ生スル波浪ノ爲海難其ノ他ノ事故ヲ生セサル程度ノ速度ニテ航行スルコト

帆船ハ早瀬瀬戸ニ於テハ縫航スヘカラス

第九條 船舶ハ船首ヲ回轉スル爲下關海峽ニ於テ投錨スルトキハ晝間ニ在リテハ黒球又ハ黒色ノ形象一個ヲ、夜間ニ在リテハ海上衝突豫防法ニ規定スル船燈ニ加ヘテ紅燈一個ヲ最モ見易キ場所ニ掲クヘシ

第十條 門司港、下關港又ハ若松港ヨリ出港シタル汽船ニシテ下關海峽ノ東口ニ向ケ航行スルモノハ國際信號旗第一代表旗ノ下ニEヲ、又西口ニ向ケ航行スルモノハ國際信號旗第一代表旗ノ下ニWヲ各下關海峽ノ航路筋ニ入ル迄前橋又ハ其ノ附近ノ最モ見易キ場所ニ掲クヘシ但シ平水航路ヲ航路定限ト爲スモノハ此ノ限ニ在ラス

門司港、下關港又ハ若松港ニ入港スル汽船ハ前橋又ハ其ノ附近ノ最モ見易キ場所ニ左ノ各號ノ規定ニ依リ國際信號旗ヲ掲クヘシ但シ平水航路ヲ航路定限ト爲スモノハ此ノ限ニ在ラス

一、門司港ニ入港スルモノニシテ錨地指定ニ關スル特定信號ヲ掲ケサルモノ

- 壇ノ浦燈臺―山底ノ鼻間 第一代表旗ノ下ニM
- 二、下關港ニ入港スルモノ
- 壇ノ浦燈臺―山底ノ鼻間 第一代表旗ノ下ニS
- 三、若松港ニ入港スルモノ
- 山底ノ鼻―臺場鼻間 第一代表旗ノ下ニY

附 則

本令ハ昭和四年七月一日ヨリ之ヲ施行ス

内海水道航行規則ヲ海軍艦船ニ準用ノ件

(昭和四年二月海軍省達第十六號)

昭和四年逡信省令第三號内海水道航行規則ヲ海軍艦船ニ準用ス

開 港 港 則

(明治三十一年七月勅令第一三九號
昭和九年一月改正勅令第六號)

第一條 左ニ記載スル外國通商ヲ許シタル諸港ノ經界ハ左ノ如ク之ヲ定ム
横濱ノ港界ハ十二天鼻ヨリ北四十六度東五海里ニ引キタル一線及該線ノ北東端ヨリ正北ニ引キタル一線以內

神戸ノ港界ハ新在家ノ東角ヨリ南十五度西ニ引キタル一線ト和田岬ヨリ北八十四度三十四分東ニ引キタル他ノ一線トノ二線ヲ經界トナシタル面積內

新潟ノ港界ハ燈臺ヲ中心トシ二海里半ノ半經ヲ有スル圓圈ノ一弧內ニ含マル

夷港ノ港界ハ稚泊村ヨリ北五十里村外堺マテ引キタル一線ト加茂湖東岸港町ヨリ同湖北西岸加茂村マテ引キタル一線トノ內ニ含マル

大阪ノ港界ハ神崎川口東岸ヨリ南西微南ニ引キタル一線ト大和川口南岸ヨリ正西ニ引キタル他ノ一線トノ二線ヲ經界トナシタル面積內

長崎ノ港界ハ小瀬戸浦ノ南東端ヨリ鼠島ノ外端ヲ經テ蔭ノ尾島長刀崎ニ引キタル一線ト蔭ノ尾島三角點(一五四呎)ヨリ正南ニ向ヒ香燒島ニ引キタル一線及香燒島石燈籠ノ鼻ヨリ深堀村堂ノ埵ニ引キタル一線以內

函館ノ港界ハ阿野間崎ヨリ南方沖合半海里ノ所ヨリ上磯村有川口ノ東岸マテ引キタル一線內ニ含マル

清水ノ港界ハ眞崎ヨリ正北ニ引キタル一線以內
 武豊ノ港界ハ布土村ヨリ正東ニ引キタル一線以內
 名古屋ノ港界ハ西突堤燈臺ヲ中心トシテ二海里半ノ半徑ヲ有スル圓圈ノ一弧以內
 四日市ノ港界ハ燈臺ヲ中心トシテ二海里半ノ半徑ヲ有スル圓圈ノ一弧以內
 尾道糸崎ノ港界ハ犬吠山ノ山頂ヨリ岩子島三角點(三九〇呎)ニ引キタル一線、岩子島鷄小島ヨリ向島布刈鼻ニ引キタル一線、向島大磯鼻ヨリ戸崎ニ引キタル一線及向島松ヶ鼻ヲ中心トシテ八鏈ノ半徑ヲ有スル圓圈ノ一弧以內
 宇野ノ港界ハ高邊岬(高邊山三角點ヨリ南三十度東)ヨリ下島島ノ西端及飛洲ヲ經テ蛸崎(五十米三角點ヨリ正東)ニ引キタル一線以內
 徳山ノ港界ハ仙島ノ洲鼻ト蛇島ノ北東端トノ連結線ヲ兩岸ニ延長シタル一線以內
 今治ノ港界ハ蒼社川口ノ東岸ヨリ正北ニ引キタル一線ト大濱燈臺ヨリ南六十度東ニ引キタル一線トノ二線ヲ經界トナシタル面積以內
 下關ノ港界ハ彦島弟子待ノ鼻ヨリ巖流島ノ南東端マテ夫ヨリ北東微北ニ向ヒ引キタル一線及彦島海士浦ノ鼻ヨリ北東ニ引キタル一線以內
 萩ノ港界ハ大瀬鼻ヨリ笠山ノ山頂ニ引キタル一線以內
 門司ノ港界ハ白木崎ノ北西四鏈ノ所ヨリ門司崎ニ引キタル一線ト白木崎ノ北西四鏈ノ所ヨリ正南四鏈ノ所ニ引キタル一線及其線ノ南端ヨリ一番橋川口ニ引キタル一線トノ三線ヲ經界トナシタル面積以內

若松ノ港界ハ燈臺ヲ中心トシテ二海里ノ半徑ヲ有スル圓圈ノ一弧以內
 博多ノ港界ハ殘島ノ北端ヨリ滿切ニ引キタル一線及小戸鼻ヨリ殘島ノ南端ニ引キタル一線以內
 唐津ノ港界ハ高島ノ北端ヨリ西北西ニ引キタル一線ト同島ノ南東端ヨリ正南ニ引キタル他ノ一線トノ二線ヲ經界トナシタル面積以內
 住ノ江ノ港界ハ船津川口ノ西岸ノ南端ヨリ正西ニ引キタル一線以內
 口ノ津ノ港界ハ宮崎鼻ヨリ正南ニ引キタル一線ト白間崎ヨリ正東ニ引キタル他ノ一線トノ二線ヲ經界トナシタル面積以內
 三池ノ港界ハ北突堤燈臺ヲ中心トシテ一海里半ノ半徑ヲ有スル圓圈ノ一弧以內
 三角ノ港界ハ瀬戸ノ鼻ヨリ大矢野島コンピラ鼻マテ際崎ノ鼻ヨリ戸馳島野崎マテ同島兎鼻ヨリ千束島六四郎鼻マテ夫ヨリ大矢野島塔ヶ崎マテ引キタル四線以內
 鹿兒島ノ港界ハ一丁臺場南端ノ燈臺ヲ中心トシテ一海里ノ半徑ヲ有スル圓圈ノ一弧以內
 巖原ノ港界ハ虎崎ヨリ耶良崎(一名寢釋迦鼻)ニ引キタル一線以內
 那覇ノ港界ハ先原崎ヨリ千ノ瀬ノ北端ニ引キタル一線及安里川口ヨリ千ノ瀬ノ北端ニ引キタル一線以內
 濱田ノ港界ハ黒崎ヨリ馬島ノ西端ニ引キタル一線ト馬島ノ北端(千疊敷鼻)ヨリ入道鼻ニ引キタル一線以內
 境ノ港界ハ境港燈臺ヲ中心トシテ一海里半ノ半徑ヲ有スル圓圈ノ一弧以內及外ノ江ノ西端ヨリ正北ニ引キタル一線以東

宮津ノ港界ハ片島鼻ヨリ日置崎ニ引キタル一線以內
 敦賀ノ港界ハ赤崎ヨリ蛭子崎ニ引キタル一線以內
 七尾ノ港界ハ能登島松ヶ崎ヨリ南東ニ引キタル一線以西及屏風崎峽以東
 伏木ノ港界ハ燈臺ヲ中心トシテ一海里半ノ半徑ヲ有スル圓圈ノ一弧以內
 船川ノ港界ハ生鼻崎ヨリ正南ニ引キタル一線ト南平澤ノ南東角ヨリ正東ニ引キタル一線トノ二線ヲ經界トナシタル面積以內
 青森ノ港界ハ鼻線岬ヨリ正西ニ引キタル一線以內
 釜石ノ港界ハ鷲ノ鼻崎ヨリ鎌ヶ崎ニ引キタル一線以內
 鹽釜ノ港界ハ花淵崎ヨリ唐戸島ノ南端ニ引キタル一線及唐戸島三角點(三十六米)ヨリ寒風澤島長濱天測點ヲ經テ腕崎ニ引キタル一線以內
 小樽ノ港界ハ平磯岬ヨリカヤシバ岬ニ引キタル一線以內
 根室ノ港界ハ辨天島燈臺ヲ中心トシテ一海里ノ半徑ヲ有スル圓圈ノ一弧以內
 釧路ノ港界ハ燈臺ヨリ正西二海里ニ引キタル一線以北及該線ノ西端ヨリ正北ニ引キタル一線以東
 室蘭ノ港界ハエンルム崎ヨリ大黒島ヲ經テホテイシ崎ニ引キタル一線以內
 大泊ノ港界ハ燈臺ヲ中心トシテ二海里半ノ半徑ヲ有スル圓圈ノ一弧以內
 眞岡ノ港界ハ導標ノ紅光燈ヲ中心トシテ一海里ノ半徑ヲ有スル圓圈ノ一弧以內
 第二條 各船舶ハ入港スルニ當リ其國旗及信號符字ヲ掲クヘシ定期郵便船ハ會社旗ヲ以テ信號符字ニ代用スルコトヲ得

右國旗及信號符字又ハ會社旗ハ船舶ノ著港ヲ港長ニ届出タル後ニアラサレハ之ヲ引下スヘカラス
 著港届ハ日曜日及大祭日ヲ除クノ外著港後二十四時間以內ニ之ヲ差出スヘシ但シ著港届ヲ差出シタル後ニアラサレハ如何ナル船舶タリトモ稅關手續ノ便利ヲ與ヘサルモノトス
 第三條 各船長ハ其著港ニ際シ自由交通ノ許可ヲ受クルマテハ其船舶ト他ノ船舶或ハ陸地トノ間ニ於ケル一切ノ交通ヲ差止ムヘシ
 第四條 港長ノ端艇ハ港ノ入口近傍ニ出向キ居リ港長ハ各船舶ノ入港スルニ當リ其泊船所ヲ示定スヘシ而シテ各船舶ハ止ムコトヲ得サル場合ヲ除クノ外特許ナクシテ其泊船所ヲ去ルヘカラス但シ港長ニ於テ必要ト認ムルトキハ船舶ヲシテ其泊船所ヲ移サシムルコトヲ得
 第五條 港長ハ其執務ノ間常ニ制服ヲ著ケ其端艇ニハ別紙雛形ノ如キ旗ヲ掲クヘシ港長ハ何時タリトモ船舶ノ運動繫船ノ適否及碇泊所ニ關スル指揮カ果シテ實行セラレ居ルヤ否ヲ検査スルコトヲ得
 第六條 如何ナル船舶モ公ケノ航路ニ投錨シ若クハ其他航海ノ自由ヲ障礙スヘカラス「チヂブ、ブーム」ヲ接キ出シタル船舶ニシテ其「チヂブ、ブーム」カ航海ノ自由ヲ障礙スルトキハ港長ノ請求ニ從ヒ之ヲ取込ムヘシ
 第七條 港界内ニ碇泊シ又ハ運航スル各船舶ハ日没ト日出ノ間ニハ海上衝突豫防ニ關スル法令ニ規定シタル各種ノ船燈ヲ掲クヘシ
 第八條 暴風雨ノ來ラムトスルトキ或ハ警報信號ヲ掲ケタルトキハ各船舶ニ於テ直ニ一箇又ハ一箇以上ノ豫備錨ヲ投下スルノ準備ヲ爲スヘシ尤モ汽船ハ此外別ニ蒸氣ヲ發生セシムヘシ

第九條 常用ニ超過シ爆發物又ハ容易ニ燃燒スヘキ物料ヲ積載シタル一切ノ船舶ハ港界外ニ來リ其處ニテ港長ノ指揮ヲ待ツヘシ斯ク指揮ヲ待ツ間右船舶ハ日出ト日没ノ間ニハBノ信號日没ト日出ノ間ニハ紅燈ヲ前橋ノ頂上ニ掲クヘシ

各船舶ハ港長ノ指定シタル場所ニアラサレハ前記ノ物料ヲ積入レ又ハ荷卸スヘカラス
港長ハ港界内ニ於テ前項ノ場所ヲ指定シ難シト認ムルトキハ港界外ニ於テ適當ノ場所ヲ指定スルコトヲ得

前項ニ依リ指定シタル場所ハ港界内ニ在ルモノト看做ス

第十條 休繋中又ハ修繕中ノ船舶及總テ「ヤット」倉庫船、貨船及端艇等ハ特ニ港長ノ指定シタル泊船所ニ碇泊スヘシ

第十一條 船舶カ港界内ニ於テ火ヲ失シタルトキハ救援ノ來ルマデ船鐘ヲ打鳴スヘシ且ツ日出ト日没ノ間ニハNMノ信號ヲ掲ケ日没ト日出ノ間ニハ斷ヘス紅燈ヲ上下スヘシ

警察官ノ救援ヲ要スルトキハ日出ト日没ノ間ニハG信號ヲ掲ケ日没ト日出ノ間ニハ藍火若クハ閃火ヲ示スヘシ前記ノ如キ信號ニ用ユル場合ノ外港長ノ允許ヲ得ルニアラサレハ港界内ニ於テ銃砲及煙火等ヲ發スルコトヲ得ス

第十二條 帝國政府ニ於テ流行病若クハ傳染病(虎列刺、天然痘、黃熱、猩紅熱、「ベスト」ノ類)アル地ト布告シタル地ヨリ來著シ又ハ航海中船中ニ該病アリタル船舶ハ港界外ニ來リ日出ト日没ノ間ニハ黃旗ヲ日没ト日出ノ間ニハ紅白二燈ヲ上下ニ連ネ前橋ノ頂上ニ掲クヘシ又前記ノ船舶ハ當該衛生官吏ノ臨檢ヲ受クヘシ衛生官吏臨檢ノ爲メ其船舶ニ近寄りタルトキハ適當ノ豫防ヲ施シ得

ル爲メニ航海中現ニ該病發生ノ有無及該病ノ性質如何ヲ該官吏ニ通知スヘシ
右船舶ハ自由交通ノ允許ヲ受クルマテ黃旗若クハ前記ノ燈火ヲ引下スヘカラス且當該衛生官吏ノ允許ヲ得ルニアラサレハ何人タリトモ上陸セシメ又ハ一切他ノ船舶ト交通スルヲ許サス
前數項ノ規定ハ港界内ニ碇泊スル船舶中ニ於テ前記ノ流行病及傳染病ノ内何病ニテモ發生シタルトキニ之ヲ適用ス

右船舶ハ港長ヨリ其旨命令ニ接スルトキハ其泊船所ヲ移轉スヘシ

牛羊等傳染病アル地ヨリ來著シ又ハ航海中該病ヲ發生シタル船舶ハ當該衛生官吏ノ允許ヲ得ルニアラサレハ牛羊等又ハ其死體、皮革又ハ骨ヲ陸揚シ又ハ他船ニ積換ユルコトヲ許サス

第十三條 港界内ニ於テ死體、荷足、灰燼、塵芥等ヲ海中ニ投棄スヘカラス

石炭、荷足其他之ニ類スル物料ヲ積卸スルトキハ其海中ニ脱落スルヲ防ク爲メ必要ノ豫防ヲ爲スヘシ

何船舶ニテモ港ニ害アル一切ノ物料ヲ海中ニ投棄シ又ハ怠慢ニ依リ脱落セシメタルトキハ港長ヨリ其旨命令ニ接セハ該船舶ニ於テ之ヲ取除クヘシ若シ取除カサルニ於テハ港長ハ該船舶ノ費用ヲ以テ之ヲ取除カシムルコトヲ得

第十四條 船舶出港セムトスルトキハ其旨港務局ニ届出テ且出帆旗ヲ引揚クヘシ

一定ノ時日ニ出帆スル汽船ハ其著港及出帆ニ對シ單ニ一回ノ届出ヲ爲スヲ以テ足レリトス

第十五條 一港内又ハ其附近ノ公ケノ航路ノ妨害トナルヘキ總テノ難破物又ハ其他ノ物件ハ港長ノ指定セル時間内ニ其所有主ニ於テ之ヲ取除クヘシ若シ港長ノ指定セル時間内ニ此命令ヲ遵行セサ

ルニ於テハ港長ハ所有主ノ費用ヲ以テ之ヲ取除カシメ又ハ破壊セシムルコトヲ得

第十六條 港務局ハ定期郵便汽船ノ爲メニ適切ニシテ且充分ナル浮標ノ繫船器若干ヲ備ヘ置キ之ヲ使用スル所ノ船舶ヲシテ成規ノ使用料ヲ拂ハシムヘシ

第十七條 燈船、信號用浮標又ハ立標ニハ鏈、綱其他ノ器具ヲ繫クヘカラス
船舶若シ燈船、浮標、立標、埠頭及其他ノ造營物ニ乗掛ケ又ハ之ヲ毀損シタルトキハ其修繕又ハ再設ノ爲メニ必要ノ費用ハ該船舶ニ於テ之ヲ支辨スヘシ

第十八條 本則ノ規定ヲ犯シタルトキハ二百圓以下ノ罰金ニ處ス

第十九條 船舶ニ科スル罰金、使用料又ハ費用ニ付テハ船長モ亦其責ヲ負フモノトス

第二十條 本則ニ依リ船舶ニ科シタル罰金、使用料又ハ費用ヲ完納スルカ或ハ之ニ對シ港長ノ満足スヘキ擔保物ヲ港長ニ差出スニアラサレハ其船舶ノ出港ヲ許サス

第二十一條 本則ニ於テ港長ト稱スルハ助役及代理者ヲモ包含シ船長ト稱スルハ其名稱ノ何タルヲ問ハス船舶ヲ指揮監督スル者ノ義ニシテ港ト稱スルハ本則第一條中ニ列記セル諸港ノ一ヲ指ス

第二十二條 各港ニ於テ其一部分ヲ軍艦ノ碇泊所トシテ取除ケ置クヘシ

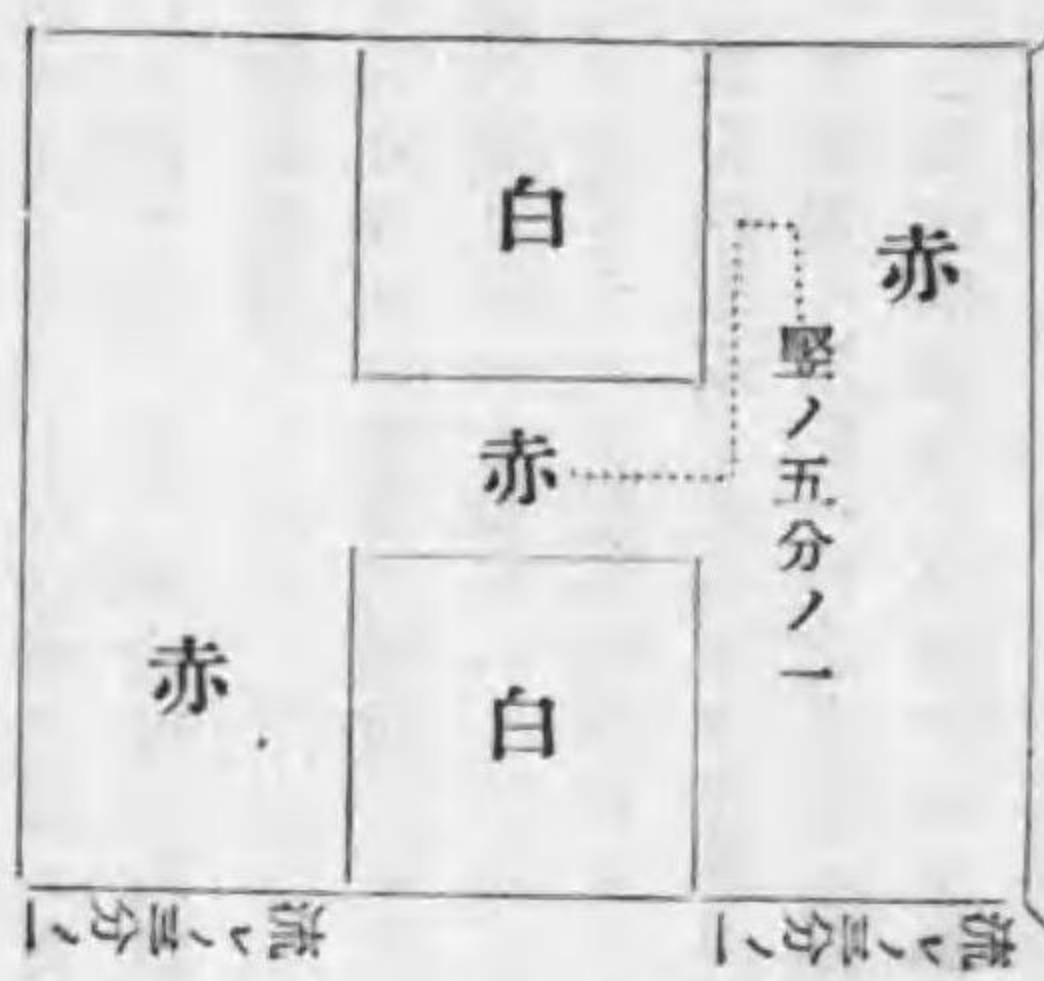
第二十三條 本則ノ規定中軍艦ニ適用セラルヘキモノハ第四條、第六條、第十二條、第二十一條ノ規定及第十三條第一項第二項ノ規定ニ限ル

第二十四條 本則施行ノ時期及場所ハ逓信大臣之ヲ告示ス

本則實施ニ關スル細則ハ逓信大臣之ヲ發布ス

(別紙)

第五條ノ旗章雛形



開港港則施行規則

第一章 鋪地

昭和二年四月十二日 逓信省令第七號
 昭和八年六月改正 逓信省令第二十八號
 昭和八年十一月改正 逓信省令第四十七號
 昭和九年二月改正 逓信省令第十二號

第一條 開港港則ヲ施行スル港ニ於ケル船舶ノ錨地ハ別表第一號表ノ定ムル区域内ニ於テ港長之ヲ指定ス

港長港内ノ實況ニ依リ必要アリト認ムルトキハ前項ノ區域ニ拘ラス錨地ヲ指定スルコトヲ得

第二條 入港船舶ハ左ノ各號ニ定ムル場所ニ於テ港長ヨリ錨地ノ指定ヲ受クヘシ但シ豫メ港長ノ許可ヲ受ケタルモノハ此ノ限ニ在ラス

一、横濱ニ在リテハ本牧挂燈浮標ノ内方

二、神戸ニ在リテハ和田岬檢疫所附近但シ大阪方面ヨリ入港スルモノハ同檢疫所附近又ハ第四突堤信號所附近

三、大阪ニ在リテハ港界線附近

四、長崎ニ在リテハ女神外

五、門司ニ在リテハ下關海峽西口ヨリ入港スルモノハ六連島燈臺附近、同東口ヨリ入港スルモノハ部埼燈臺附近、若松又ハ下關ヨリ入港スルモノハ港界線附近

前項ニ掲クル錨地ノ指定ハ特定信號(無線電信又ハ無線電話ヲ含ム)ニ依リ之ヲ爲スコトアルヘシ

前項ニ掲クル特定信號及之ヲ行フヘキ場所ハ之ヲ告示ス

第三條 錨地ノ指定ヲ受クヘキ船舶日没後到着シタルトキハ日出迄前條第一項各號ニ掲クル場所ニ於テ假泊スヘシ但シ定期郵便船其ノ他ノ船舶ニシテ港長ノ許可ヲ受ケタルモノハ此ノ限ニ在ラス

第四條 港長ノ指定シタル錨地ヲ變更セムトスルトキハ豫メ港長ノ許可ヲ受クヘシ但シ風波、災害其ノ他已ムヲ得サル場合ハ此ノ限ニ在ラス

前項但書ノ規定ニ依リ港長ノ許可ヲ受ケスシテ錨地ヲ變更シタルトキハ遲滞ナク其ノ事由及錨地ヲ

港長ニ届出ツヘシ

第五條 總噸數八百噸未満ノ内地各港間ノミヲ航行スル船舶ニシテ開港港則第九條第一項若ハ第十二條第一項ニ該當セサルモノハ別表第一號表ノ定ムル区域内ニ碇泊スル場合ニ限り第二條ノ指定ヲ受クルコトヲ要セス

第六條 總噸數五百噸以上ノ船舶錨泊スルトキハ港長ノ許可ヲ受ケタル場合ヲ除クノ外雙錨泊ヲ爲スヘシ但シ横濱、神戸及大阪ノ防波堤外又ハ長崎ノ女神外ニ錨泊スルモノハ此ノ限ニ在ラス

港長必要アリト認ムルトキハ總噸數五百噸未満ノ船舶ト雖雙錨泊ヲ命スルコトヲ得前項但書ノ船舶ニ付亦同シ

第七條 繫船浮標ヲ使用セムトスル船舶ハ港長ノ許可ヲ受クヘシ

前項ノ許可ヲ受ケタル船舶ハ繫船浮標使用料ヲ納入スヘシ

繫船浮標使用料ニ關スル規定ハ別ニ之ヲ定ム

第二章 航路

第八條 神戸、大阪及長崎ノ各港ニ於テハ船舶ハ別表第二號表ノ定ムル航路及特定條件ニ從ヒ出入スヘシ但シ已ムヲ得サル事由アルトキ又ハ雜種船ニシテ別表第二號表ノ定ムル場合ニ該當セサルトキハ此ノ限ニ在ラス

第九條 航路内ニ於テハ左ノ所爲ヲ爲スコトヲ得ス但シ已ムヲ得サル事由アルトキハ此ノ限ニ在ラス

一、投錨スルコト

- 一、被曳船ヲ放ツコト
- 三、其ノ他船舶航行ノ妨害トナルコト

第三章 航法

第十條 汽船防波堤入口ニ於テ出會ノ虞アルトキハ入港船ハ防波堤外ニ於テ出航船ノ進路ヲ避クヘシ
 第十一條 汽船ハ港界内及港界附近ニ於テハ他船ニ危害ヲ及ホササル程度ニ速力ヲ減シテ航行スヘシ
 帆船ハ港界内ニ於テハ帆ヲ減シ又ハ曳船ヲ用キテ航行スヘシ但シ航路内、横濱港東水堤燈臺及北水堤燈臺附近、門司港界内及長崎女神内ニ於テハ縫航スヘカラス

第十二條 船舶ハ並列シテ航行スヘカラス

第十三條 航路ヲ横切ラムトスル船舶ハ航路ヲ航行スル他船ノ進路ヲ避クヘシ

航路ニ於テ行逢ヒタル船舶ハ互ニ航路ノ右側ヲ航行スヘシ

船舶ハ航路ニ於テ他船ヲ追越スヘカラス

第十四條 雜種船ハ汽船及帆船ノ進路ヲ避クヘシ

第十五條 船舶ハ防波堤、埠頭又ハ繫泊船等ノ一端ヲ右舷ニ見テ通航スルトキハ之ニ近寄り左舷ニ見テ通航スルトキハ之ニ遠サカリテ航行スヘシ

第十六條 本章ニ定ムルモノノ外船舶ノ航法ニ關シテハ海上衝突豫防法ノ定ムル所ニ依ル

第四章 爆發物及危險物

第十七條 開港港則第九條ニ掲クル爆發物及容易ニ燃燒スヘキ物件ノ種類ハ別表第三號表ノ定ムル所

ニ依ル

第十八條 爆發質ノ物件ニ付テハ船舶ニ備付ケタル大砲一門毎ニ火藥五十發分門管又ハ爆管七十個、小銃一挺毎ニ火藥百發分門管百五十個並信號用ノ榴彈、火箭、焰管及救命焰ハ之ヲ常用ト看做ス容易ニ燃燒スヘキ物件ニシテ船舶所用ノ目的ヲ證明シ得ルモノ亦同シ

第十九條 常用ニ超過シタル爆發物又ハ容易ニ燃燒スヘキ物件ヲ積卸又ハ運搬セムトスル船舶ハ豫メ港長ノ許可ヲ受クヘシ

前項ニ掲クル物件ヲ積載シタル船舶ハ港長ノ指定シタル場所ニ非サレハ碇泊又ハ停留スルコトヲ得ス但シ容易ニ燃燒スヘキ物件ヲ積載シタルモノニシテ碇泊ノ期間及場所並積荷ノ種類及數量ヲ具シ

港長ノ許可ヲ受ケタルトキハ此ノ限ニ在ラス

第一項ニ掲クル物件ヲ積載シタル船舶ハ晝間ハ赤旗ヲ、夜間ハ紅燈一個ヲ舷縁上見易キ場所ニ掲揚スヘシ

スヘシ

第五章 届出手續

第二十條 開港港則第二條第三項ニ規定スル著港届ハ第一號書式ニ、同第十四號第一項ニ規定スル出

港届ハ第二號書式ニ、同條第二項ニ規定スル著發届ハ第三號書式ニ依リ港長ニ差出スヘシ

第二十一條 出港シタル船舶避難、修繕其ノ他事故ノ爲出港後十二時間内ニ歸港シタルトキハ其ノ事由ヲ記載シタル届書ヲ港長ニ差出シ著港届ニ代フルコトヲ得

第二十二條 船舶ヲ修繕又ハ休繋セムトスルトキハ豫メ其ノ旨港長ニ届出ツヘシ

前項ノ届出アリタル場合ニ於テ港長必要アリト認ムルトキハ當該船舶ノ修繕又ハ休繋中相當船員ノ

乗組ヲ命スルコトアルヘシ

第二十三條 船舶ヲ進水又ハ船渠ニ出入セシムトスルトキハ豫メ其ノ旨港長ニ届出ツヘシ

第二十四條 開港港則第十二條第六項ニ掲クル船舶入港シタルトキ又ハ碇泊中ノ船舶ニ同條第一項ニ

掲クル傳染病ノ疑若ハ家畜傳染病ノ疑アルモノ發生シタルトキハ直ニ其ノ旨港長ニ届出ツヘシ

第二十五條 港界内又ハ港界附近ニ於テ難破又ハ沈没等ノ事故發生シタルトキハ直ニ其ノ旨港長ニ届

出ツヘシ之ヲ發見シタルトキ亦同シ

第二十六條 國籍證書ヲ受有スルコトヲ要セサル船舶、平水航路ノミヲ航行スル船舶及内地ニ於ケル

一定ノ港ヲ定期ニ航行スルモノニシテ豫メ港長ノ許可ヲ受ケタル船舶ハ第二十條ノ手續ヲ省略スル

コトヲ得

第二十七條 本章ニ規定スル届出ハ特ニ定ムル場合ヲ除クノ外船長又ハ船舶所有者之ヲ爲スヘシ

第六章 雜 則

第二十八條 雜種船、筏等ハ濫リニ之ヲ繫船浮標、艀船ノ船尾若ハ船側ニ繫留セシメ又ハ船舶航行ノ

妨害トナルヘキ場所ニ碇泊若ハ停留セシムヘカラス

第二十九條 船舶他ノ船舶、筏等ヲ曳航スルトキハ左ノ制限ヲ超ユヘカラス但シ港長ノ許可ヲ受ケタ

ル場合ハ此ノ限ニ在ラス

一、總噸數三百噸以上ノ船舶ヲ曳クトキハ一艘、總噸數百噸以上三百噸未満ノ船舶ヲ曳クトキハ

二艘、總噸數百噸未満ノ船舶ヲ曳クトキハ三艘

二、雜種船ヲ曳クトキハ神戸及大阪ノ防波堤内ニ於テハ八艘（五艘以上ヲ曳クトキハ二縱列ト爲

スヘシ）横濱防波堤内及長崎女神内ニ於テハ五艘、門司ニ於テハ四艘

三、被曳船ヲ竝列シテ曳クトキハ二縱列

四、筏等ヲ曳クトキハ曳船ノ船首ヨリ被曳物件ノ後端ニ至ル迄長百二十米

曳船ト被曳船及被曳船相互間ノ曳索ノ長ハ航行ニ支障ナキ程度ニ止メ濫リニ延長スヘカラス筏等

ノ場合ニ付亦同シ

第三十條 船舶ハ濫リニ左ニ掲クル場所ニ碇泊又ハ停留スヘカラス

一、埠頭、棧橋、運河、船溜ノ入口又ハ船渠ノ附近

二、門司港柁ヶ鼻低立標ヨリ二百二十二度二百七十五米ノ所ヨリ零度ニ向ヒ港界線ニ引キタル

線内ノ水域及小森江製鋼所西側煙突ヨリ若松ヲ經テ港界線ニ引キタル一線（三百四十八度

三十分）ト發著信號竿ヨリ西側岸壁ノ尖端ヲ經テ港界線ニ引キタル一線（三百三十二度）

トニ圍マレタル水域

三、横濱港東水堤燈臺及北水堤燈臺ヨリ各八十五度及二百六十五度ニ引キタル平行線内ニシテ

前記燈臺ノ外方ニ在リテハ千米其ノ内方ニ在リテハ四百米ノ水域

第三十一條 大阪港櫻島棧橋ニ繫留又ハ解纜セムトスル船舶アルトキハ同棧橋ノ信號柱ニ國際信號

旗HRヲ掲揚ス此ノ場合ニ於テハ當該船舶ハ其ノ前橋頭ニ直徑二尺ノ黒球一個ヲ掲揚スヘシ

前項ノ船舶ニ對シテハ他ノ船舶ハ成ルヘク其ノ進路ヲ避クベシ

第三十一ノ二 門司港外國貿易岸壁ニ繫留又ハ解纜セムトスル船舶アルトキハ稅關廳舍屋上及葛葉

港務部見張所信號柱ニ繫岸旗又ハ離岸旗ヲ掲揚ス、此ノ場合ニ於テハ繫留セムトスル當該船舶ハ

其ノ前橋頭ニ國際信號旗ノTノ下ニ回答旗ヲ掲揚スヘシ

第三十一ノ三 神戸港第四及第五航路ニ依リ始下同時ニ出港スル船舶(共ニ總噸數約百噸以上ノ船舶ナル場合ニ限ル)アルトキハ川崎鼻見張所信號柱ニ畫門ニ在リテハ國際信號旗B二旗ヲ連揚シ夜間ニ在リテハ綠燈三箇ヲ縱ニ一米ヅツヲ隔テ、連揚ス此ノ場合ニ於テハ當該船舶ハ川崎鼻ニ於テ出會ノ危險ヲ避クル爲其ノ運航ニ注意スベシ

第三十二條 門司ヲ出港スル總噸數八百噸以上ノ船舶ハ其ノ前橋又ハ見易キ場所ニ左ノ信號旗ヲ掲揚スヘシ

一、下關海峽東口ヘ向ケ出港セムトスルトキハ國際信號旗第一代表旗ノ下ニE

二、下關海峽西口ヘ向ケ出航セムトスルトキハ國際信號旗第一代表旗ノ下ニW

第三十三條 下關海峽東口ヨリ門司ニ入港セムトスル汽船ハ壇ノ浦燈臺ニ竝ヒタル時ヨリ又門司ヨリ同東口ニ向ヒ出港セムトスル汽船ハ柁ケ鼻ニ竝ヒタル時ヨリ孰レモ門司崎ヲ通過スル迄汽笛又ハ汽角ヲ以テ長聲三聲ヲ隨時吹鳴スヘシ

第三十四條 船舶ハ法令ニ規定アル場合ヲ除クノ外濫リニ汽笛又ハ汽角ヲ吹鳴スヘカラス

第三十五條 船舶ニ搭載セル竹木材ヲ水上ニ卸サムトスルトキ又ハ筏等ヲ繫留若ハ運行セムトスルトキハ港長ノ許可ヲ受クヘシ

第三十六條 灰燼、塵芥、動物ノ死體等ヲ處置セムトスルトキハ港長ノ承認シタル塵船ヲ使用スヘシ

塵船ヲ使用セムトスル船舶ハ國際信號旗FTヲ掲揚スヘシ

第三十七條 船舶ノ碇泊又ハ航行ノ妨害トナルヘキ場所ニ於テ魚撈ヲ爲スヘカラス

第三十八條 港長ハ期間及區域ヲ限リ船舶ノ航行ヲ禁止スルコトヲ得

前項ノ期間及區域ハ之ヲ告示ス

第三十九條 港界内及港界附近ニ於テ船舶航行ノ妨害トナルヘキ總テノ難破物又ハ沈没物等ハ之ヲ除去スル迄其ノ所有者ニ於テ危險豫防ノ爲必要ノ措置ヲ爲スヘシ

第四十條 港界内ニ於テ船舶航行ノ妨害トナルヘキ作業ヲ爲サムトスル者ハ豫メ港長ノ許可ヲ受クヘシ港界内及港界附近ニ於テ難破物又ハ沈没物等ヲ引揚ケムトスル者亦同シ

第四十一條 船舶ハ港界内及港界附近ニ於テ他船ノ運航ノ妨害トナルヘキ探照燈其ノ他類似ノ燈火ヲ濫リニ使用スヘカラス

第四十二條 特設信號ヲ使用セムトスル者ハ港長ノ許可ヲ受クヘシ

第四十三條 信號符字ヲ有スル船舶ハ航行中ニ之ヲ掲揚スヘシ但シ雜種船ハ此ノ限ニ在ラス

第四十四條 雜種船ハ夜間航行中絶エス海上衝突豫防法ニ規定スル船燈ヲ掲揚スヘシ

第四十五條 本令ニ於テ雜種船ト稱スルハ氣艇、艇船、端舟及櫓權ノミヲ以テ運轉シ又ハ主トシテ櫓權ノミヲ以テ運轉スル舟ヲ謂フ

第四十六條 本令中第一條、第二條、第四條、第五條、第八條乃至第十六條、第二十四條、第三十六條及第三十八條ノ規定ハ之ヲ軍艦ニ適用ス

第四十七條 報時信號及氣象信號ノ方法ハ之ヲ告示ス

第四十八條 本令ノ規定ハ船舶ニ類似セル形體ヲ有スル工作物ニ之ヲ準用ス

第七章 罰則

第四十九條 第二條、第十九條第一項及第二項、第二十四條ノ規定ニ違反シタル者ハ百圓以下ノ罰金ニ處ス
 第四條、第五條第二項、第七條第一項、第八條、第九條、第十九條第三項、第二十二條第一項、第二十三條、第二十八條乃至第三十條、第三十五條、第三十七條、第四十條及第四十四條ノ規定ニ違反シタル者第二十五條ニ規定セル事故ヲ發生セシメ之ヲ届出テサル者及第三十八條ノ規定ニ依リ港長ノ禁止シタル區域内ヲ航行シタル者ハ五十圓以下ノ罰金又ハ科料ニ處ス
 第五十條 前條ノ規定ニ該當スル者法人ナル場合ニ於テハ其ノ者ニ適用スヘキ罰則ハ法令ノ規定ニ依リ法人ヲ代表スヘキ者ニ之ヲ適用ス

附則

本令ハ昭和二年四月二十日ヨリ之ヲ施行ス
 明治三十一年遞信省令第十六號開港港則施行細則、明治四十一年神奈川縣令第五十五號橫濱港規程、明治四十一年兵庫縣令第四十五號神戸港規程、大正十年大阪府令第七十八號大阪港規程、明治四十一年長崎縣令第四十七號長崎港規程及明治四十一年福岡縣令第二十六號門司港規程ハ本令施行ノ日ヨリ之ヲ廢止ス
 前項ノ諸規則又ハ規程ニ依リ港長ノ爲シタル處分ハ本令ニ依リ爲シタルモノト看做ス

(別表)

第一號表(各港區分表)

港ノ名稱	第一區		第二區		第三區		第四區		境界	碇泊スヘキ船舶ノ種別
	境	分	境	分	境	分	境	分		
大	北防波堤及東防波堤内ノ水域	第一區	橫濱北水堤燈臺ヨリ八十五度ニ向ヒ港界線迄引キタル線ノ南方ノ水域	第二區	橫濱北水堤燈臺ヨリ八十五度ニ向ヒ港界線迄引キタル線ノ北方ノ水域	第三區	見立先防砂堤及防波堤並同防波堤ニ沿ヒ港界線迄引キタル線内ノ水域	第四區	汽船、總噸數五百噸未満ノ帆船及雜種船但雜種船ハ沿岸附近ニ限ル	汽船、總噸數五百噸以上ノ帆船及爆發物又ハ容易ニ燃燒スヘキ物件ヲ搭載セル船舶
神	神戶港東防波堤南燈臺ヨリ二百七十度ニ引キタル線、東防波堤南燈臺ヨリ二百七十度ニ引キタル線及同線ヲ延長シタル線内ノ水域	第一區	神戶港東防波堤南燈臺ヨリ二百七十度ニ引キタル線、東防波堤南燈臺ヨリ二百七十度ニ引キタル線及同線ヲ延長シタル線内ノ水域	第二區	神戶港東防波堤南燈臺ヨリ二百七十度ニ引キタル線、東防波堤南燈臺ヨリ二百七十度ニ引キタル線及同線ヲ延長シタル線内ノ水域	第三區	神戶港東防波堤南燈臺ヨリ二百七十度ニ引キタル線、東防波堤南燈臺ヨリ二百七十度ニ引キタル線及同線ヲ延長シタル線内ノ水域	第四區	汽船、帆船及雜種船但シ雜種船ハ沿岸附近ニ限ル	汽船、帆船及雜種船但シ雜種船ハ沿岸附近ニ限ル
戸	第一區及第二區以外ノ水域	第三區	第一區及第二區以外ノ水域	第四區	第一區及第二區以外ノ水域	第五區	第一區及第二區以外ノ水域	第六區	軍艦、爆發物又ハ容易ニ燃燒スヘキ物件ヲ搭載セル船舶及雜種船但シ雜種船ハ沿岸附近ニ限ル	汽船但シ總噸數八百噸未満ノ汽船ハ大棧橋北側
大	大阪南突堤燈臺ヨリ大棧橋端ニ向ヒ千八百五十度ニ引キタル線ヨリ西方突堤内ノ水域	第一區	大阪南突堤燈臺ヨリ大棧橋端ニ向ヒ千八百五十度ニ引キタル線ヨリ西方突堤内ノ水域	第二區	大阪南突堤燈臺ヨリ大棧橋端ニ向ヒ千八百五十度ニ引キタル線ヨリ西方突堤内ノ水域	第三區	大阪南突堤燈臺ヨリ大棧橋端ニ向ヒ千八百五十度ニ引キタル線ヨリ西方突堤内ノ水域	第四區	汽船但シ總噸數八百噸未満ノ汽船ハ大棧橋北側	汽船但シ總噸數八百噸未満ノ汽船ハ大棧橋北側

版	時 長
安治川筋ニ出入スル航路 前項航路線ノ東端ニ 起リ其ノ北線ヲ五十五度九百五十五米其ノ南端ニ ナリ其ノ北線ニ各延長シタルニ線内ノ水城	女神以內ニ出入スル航路高銚島南東端、神崎鼻 立標ヨリ境界線ニ沿ヒテ三百七十米ノ點及遠見鼻 立標ヨリ境界線ニ沿ヒテ三百七十米ノ點ヲ連ヌル線 ト陸ノ尾島燈臺、女神立標ヨリ境界線ニ沿ヒテ百 二十米ノ點ヲ連ヌル線トノ間ノ水城

第三號表 (爆發物及容易ニ燃燒スヘキ物件表)

爆發物

火藥 (有煙火藥、無煙火藥ノ類)

雷酸鹽 (雷末ノ類)

起爆ノ用途ニ供スル窒化物 (窒化鉛ノ類) 其ノ他ノ起爆劑

ナイトログリセリン及之ヲ主トスル爆發藥 (各種ダイナマイト類)、綿火藥、硝化棉、鹽素酸鹽

類 (鹽素酸曹達、鹽素酸加里ノ類)、過鹽素酸鹽類 (過鹽素酸加里、過鹽素酸アンモニアノ類)

硝酸鹽類 (硝石、智利硝石、硝酸アンモニアノ類)

芳香系列ノ硝化物ニシテ爆發性ヲ有スルモノ (ナイトロベンジン、ピクリン酸ノ類)

實包、空包、藥筒ノ類

火藥又ハ爆發藥ヲ裝填シタル彈丸、信管、雷管ノ類

煙火其ノ他火藥又ハ爆發藥ヲ使用シタル火工品 (玩具用普通火工品ヲ除ク)

壓縮瓦斯類

容易ニ燃燒スヘキ物件

原油、揮發油、石油、輕油、重油其ノ他ノ石油類

黃燐、赤燐、硫化燐

カリウム、ナトリウム、マグネシウム、過酸化曹達、エーテル、硫化炭素、コロヂウム、メチー

ルアルコール、ベンゾール、トルオール、ソルベントナフサ、アルコール、アセトン、キシロー

ル、テレピン油、セルロイド

濃硫酸、濃硝酸

生石灰、炭化石灰、燐化石灰

其ノ他「エーベル」又ハ「ペンスキー」閉塞發焰試驗器ヲ用ヒ七百六十耗ノ氣壓ニ於テ攝氏三十

五度以下ノ溫度ニテ發焰スルモノ

第一號書式

一、船 著 名 種 港 屆

見シタルモノハ檢疫官吏ノ指定ニ從ヒ更ニ檢疫ヲ受ケテ許可證ヲ得ルニ非レハ他港ニ進航シ陸地又ハ他船ト交通シ船客乗組員ノ上陸、物件ノ陸揚ヲ爲スコトヲ得ス

第三條 船長其ノ他ノ乗組員及船客ハ檢疫官吏ノ尋問ニ對シテ之ニ應答シ又船長其ノ他ノ乗組員ハ檢疫官吏ノ請求アルトキハ所定ノ式紙ニ事實ヲ記入シ其ノ氏名ヲ署シタル明告書ヲ差出スヘシ

船長ハ檢疫官吏ノ請求ニ應ジテ航海日誌ヲ示シ且船内ノ各部ヲ開キ検査ヲ受クヘシ但シ船ハ航海中船客又ハ乗組員ニテ占居シタルトキ又ハ他ノ事故ニ依リテ傳染病ニ汚染シタル疑アルトキニ限リ其ノ検査ヲ受クヘシ

第四條 海外諸港ヨリ檢疫ヲ施行スル港ニ來ル船舶ニシテ左ノ各號ノ一ニ該當スルモノハ其ノ入港前ヨリ許可證ヲ得ルマテ檢疫信號ヲ掲クヘシ

一、現ニ傳染病患者若クハ死者アルモノ

二、航海中傳染病患者若クハ死者アリタルモノ

三、傳染病流行地ヲ發シ又ハ其ノ地ヲ經テ來航シ若クハ傳染病ニ汚染シタル船舶ト交通シ其ノ他傳染病ニ汚染シタル疑ヒアルモノ

第二條 第二項ノ船舶ハ傳染病患者若クハ死者又ハ傳染病ニ汚染シタル疑アルコトヲ發見シタル時ヨリ許可證ヲ得ルマテ檢疫信號ヲ掲クヘシ

檢疫信號ハ晝間ハ船舶ノ前檣頭ニ黃旗ヲ掲ケ夜間ハ同所ニ紅白二燈ヲ連掲スルモノトス

第五條 海外諸港ヨリ檢疫ヲ施行セサル港ニ來ル船舶ニテ第四條第一項ノ各號ノ一ニ該當スルモノ又ハ其ノ港内ニ碇泊中傳染病患者若クハ死者又ハ傳染病ニ汚染シタル疑ヒアルコトヲ發見シタルモノハ前條ノ規定ニ從ヒ檢疫信號ヲ掲ケ其ノ地ノ警察官吏ニ届出指揮ヲ待ツヘシ

前項ノ場合ニ於テ警察官吏ノ命アルトキハ直ニ檢疫ヲ施行スル港ニ回航シテ檢疫ヲ受クヘシ

第一項ノ場合ニ於テ警察官吏ノ指揮アルマデハ他港ニ進航シ陸地又ハ他船ト交通シ船客乗組員ノ上陸、物件ノ陸揚ヲ爲スコトヲ得ス

警察官吏ニ於テ第一項ノ事實アリト認め其ノ旨ヲ告知シタル場合亦前二項ニ同シ

第六條 檢疫官吏ハ第一條ノ船舶ニ對シ左ノ處分ヲ爲スコトヲ得

一、現ニ傳染病患者若クハ死者アルモノハ停船ヲ命シ患者死者又ハ物件ノ處分ヲ指示シ船舶其ノ他ノ消毒方法若ハ鼠族、昆虫等ノ驅除ヲ施行シ且必要アリト認めルトキハ命令ノ定ムル期間船客乗組員ヲ検査所又ハ船中ニ停留スルコト

二、航海中傳染病患者若クハ死者アリタルモノハ第一號ノ規定ニ準シテ處分スルコト

三、傳染病流行地ヲ發シ又ハ其ノ地ヲ經テ來航シ其ノ他傳染病ニ汚染シタル疑ヒアルモノハ必要アリト認めルトキ第一號ノ規定ニ準シテ處分スルコト

四、停船中傳染病患者若クハ死者又ハ傳染病ニ汚染シタル疑ヒアルコトヲ發見シタルトキハ更ニ第一號ノ規定ニ準シテ處分スルコト

五、傳染病ノ疑ヒアル患者アルトキ又ハ傳染病ノ病源検査上必要アルトキニ限り二日ヨリ多カラサル期間停船ヲ命スルコト

六、發航地若ハ寄港地ノ狀況又ハ船舶ノ状態ニヨリ消毒方法又ハ鼠族、昆虫等ノ驅除ヲ施行スルコト

檢疫官吏ハ船舶ヲシテ前項ノ消毒方法又ハ鼠族、昆虫等ノ驅除ヲ施行セシムルコトヲ得

第七條 停船ヲ命セラレタル船舶ハ檢疫官吏ノ指示シタル場所ニ碇泊シ其ノ許可ヲ得ルニ非レハ他ニ

移轉スルコトヲ得ス

入港後前條第一項第五號ノ規定ニヨリ停船ヲ命セラレタル船舶ハ檢疫官吏ノ許可ヲ受クルニ非レハ陸地又ハ他船ト交通シ船客乗組員ノ上陸、物件ノ陸揚ヲ爲スコトヲ得ス

第八條 檢疫所ニ移轉セシメラレタル船客乗組員ハ檢疫官吏ノ許可ヲ得ルニ非レハ本船其ノ他ト交通シ若ハ物件ヲ搬出スルコトヲ得ス

第九條 船舶及物件ノ消毒又ハ鼠族、昆虫等ノ驅除ヲ檢疫官吏カ施行スル場合ニ於テハ船長其ノ他ノ乗組員ハ其ノ施行上ニ關シ之ヲ補助スルノ義務アリ

前項ノ消毒又ハ鼠族、昆虫等ノ驅除ニ關スル費用ハ船主船長若ハ其ノ代理人ヨリ徵收ス

第十條 檢疫所ニ移轉セシメラレタル者ノ食費及患者死者ニ關スル費用ハ其ノ乗組員ニ屬スルモノハ船長若ハ其ノ代理人ヨリ其ノ船客ニ屬スルモノハ本人ヨリ之ヲ徵收ス

本條及第九條第二項ノ費額及其ノ徵收ニ關シ必要ノ規程ハ命令ヲ以テ之ヲ定ム

第十條ノ二 檢疫官吏ハ職務執行上必要アルトキハ命令ノ定ムル所ニ依リ無償ニテ船舶ニ乗組ムコトヲ得

第十一條 第二條、第五條、第七條、第八條ノ規定ニ違背シタルモノハ貳千圓以下ノ罰金ニ處ス

第十二條 此ノ法律ノ執行ヲ拒ミ若ハ之ヲ妨害シ又ハ檢疫官吏ノ尋問ニ對シテ答辯ヲ爲サス若ハ虛偽ノ事實ヲ答辯シ又ハ其ノ命令ニ從ハサル者ハ五百圓以下ノ罰金ニ處ス

船長若ハ船長ノ職務ヲ行フ者前項ノ罪ヲ犯シ又ハ船客乗組員ノ之ヲ犯スヲ知ツテ制止セサルトキハ千圓以下ノ罰金ニ處ス

第十二條ノ二 此ノ法律ハ朝鮮臺灣又ハ樺太ヨリ來ル船舶ノ檢疫ニ關シ之ヲ準用ス

第十二條ノ三 朝鮮臺灣又ハ樺太ヨリ來ル船舶、内務大臣ノ指定スル海外諸港ヨリ來ル船舶及此ノ法律ヲ適用シ難キ船舶ニ對スル檢疫ニ關シテハ命令ヲ以テ別段ノ規定ヲ爲スコトヲ得

附則略ス

海港檢疫法施行規則

(明治四十四年六月公布(省令)
大正十五年七月改正)

第一條 檢疫ヲ施行スル海港ハ大阪港、橫濱港、神戸港、長崎港、門司港、敦賀港、下關港、若松港、三池港、口ノ津港、長崎縣松島港、崎戸港、相ノ浦港及佐々港トス其ノ他ノ海港ニ於テ臨時ニ檢疫ヲ施行スルトキハ告示ヲ以テ之レヲ指定ス

下關港、若松港ニ來ル船舶ハ門司港ニ於ケル檢疫所、相ノ浦港及佐々港ニ來ル船舶ハ崎戸港ニ於ケル檢疫所ノ檢疫ヲ受クヘシ

檢疫官吏海港檢疫法第六條第一項ノ處分ヲ爲ス爲必要アリト認ムルトキハ大阪港ニ於テ檢疫ヲ受ケタル船舶ヲ兵庫縣和田岬ニ、橫濱港ニ於テ檢疫ヲ受ケタル船舶ヲ長濱ニ、三池港及口ノ津港、長崎縣松島港及崎戸港ニ於テ檢疫ヲ受ケタル船舶ヲ長崎縣女神ニ回航セシムルコトヲ得檢疫所ニ於テ海港檢疫法第六條第一項ノ處分ヲ爲スコト能ハサル場合ニ於テハ内務大臣ハ處分ノ必要アル船舶ヲ他ノ檢疫所ニ回航セシムルコトアルヘシ

第二條 檢疫ヲ施行スル傳染病ハ、「コレラ」、痘瘡、猩紅熱、「ベスト」、黃熱トス其ノ他ノ傳染病ニ對シ臨時檢疫ヲ施行スルトキハ告示ヲ以テ之ヲ指定ス

第二條ノ二 海港檢疫法ニ依ル檢疫ヲ受ケタル船舶ニシテ同一航海中檢疫ヲ施行スル他ノ港ニ來ルモノニ對シテハ檢疫官吏ニ於テ海港檢疫法第三條第一項ノ明告書及船舶ノ狀態ニ依リ船客乗組員ノ檢診其ノ他檢査ノ必要ナシト認ムルトキハ直ニ海港檢疫法第二條ノ許可證ヲ交付スヘシ

第三條 海港檢疫法第六條第一項第一號ノ停留期間ハ消毒方法又ハ鼠族、昆虫等ノ驅除ノ施行ヲ了リタル時ヨリ起算シ「ベスト」ハ十日以内「コレラ」、黃熱ハ五日以内トス但傳染病流行地ヲ發シ又ハ其ノ地ヲ經テ來航スル船舶其ノ他傳染病毒ニ汚染シタル疑アル船舶ニ付テハ傳染病流行地ヲ發シ又ハ其ノ地ヲ經過シ若ハ傳染病毒ニ汚染シタリト疑フヘキ事實アリタル時ヨリ起算ス

停船中ト雖モ檢疫官吏ハ一定ノ條件ニ該當スル場合ニ於テ停留ノ必要ナシト認ムル船客乗組員ノ上陸又ハ物件ノ陸揚ヲ許可スルコトヲ得

第四條 海港檢疫法第六條第一項第一號乃至第四號ノ場合ニ於テ停留ノ必要アル船客乗組員ヲ檢疫所ニ移轉セシメタルトキハ消毒方法又ハ鼠族、昆虫等ノ驅除ヲ施行シタル船舶ノ停船ヲ解除スルコトヲ得消毒方法又ハ鼠族、昆虫等ノ驅除ヲ施行シタル船舶ニシテ相當設備アルトキハ停留ノ必要アル船客乗組員ヲ船内ニ隔離シ條件ヲ附シテ前項ノ處分ヲ爲スコトヲ得

第五條 海港檢疫法第六條ノ處分ニ關シ鼠族、昆虫等ノ驅除ヲ施行シタル場合ニ於テ檢疫官吏ハ消毒方法ヲ施行セサル貨物ニ對シ條件ヲ附シテ陸揚ヲ許可スルコトヲ得

第六條 海港檢疫法第三條第一項ノ明告書ハ附錄様式ニ據ルヘシ

第七條 傳染病及其ノ疑アル患者ハ檢疫所所屬ノ病院ニ入ラシムヘシ但シ痘瘡又ハ猩紅熱ナルトキハ本人ノ請求ニ依リ相當ノ設備アル他ノ病院ニ入ラシムルコトヲ得

第八條 檢疫所ノ停留所ニ移轉セシメタル船客乗組員ニ傳染病ヲ發生シタルトキハ其ノ全部若ハ一部ノ人員ニ對シ更ニ第三條第一項ノ期間停留ヲ繼續ス

第九條 海港檢疫法第四條第一項第二號又ハ第三號ニ該當スル船舶ニシテ海外ノ港ニ於テ消毒ノ處分ヲ受ケタルモノト雖モ其ノ消毒ヲ受ケタル時ヨリ起算シ二週間以上ヲ經過セサルモノニ對シテハ同法第六條第一項第三號ニヨリ處分スルコトヲ得

第十條 死體ハ所定ノ場所ニ於テ火葬シ其ノ遺骨ハ引取人又ハ船長若ハ其ノ代理人ニ引渡スヘシ若シ引取人ナク船長若ハ其ノ代理人在ラサルカ又ハ引取ヲ拒ムトキハ行旅病人及行旅死亡人取扱法ニ依リ處分スヘシ

親族又ハ縁故アル者ヨリ死體引渡ヲ願出タルトキハ病毒傳播ノ虞ナシト認ムル場合ニ限り之ヲ許可スルコトヲ得

第十一條 海港檢疫法第五條ノ場合ニ於テハ警察官吏ハ最寄檢疫所ニ回航セシムヘシ但シ船長又ハ其ノ代理人ノ請求アルトキハ他ノ檢疫所ニ回航セシムルコトヲ得

警察官吏若シ其ノ船舶ノ檢疫ヲ施行スル海港ニ回航シ難シト認ムル場合又ハ相當ノ處置ヲ爲シ得ヘシト認ムル場合ニ於テハ檢疫所ニ回航セシメス船長及其ノ他ノ乗組員ヲシテ相當ノ消毒方法又ハ鼠族、昆虫等ノ驅除ヲ施行セシムルコトヲ得此ノ場合ニ於ケル費用ハ船主、船長若ハ其ノ代理人ノ負擔トス

前項の場合ニ於テ患者ヲ隔離スルノ必要アリト認メタルトキハ本人又ハ船主、船長若ハ其ノ代理人ヲシテ實費ヲ仕拂ハシメ所定ノ場所ニ收容スルコトヲ得
第十二條 停船中ノ船舶ニシテ特別ノ事情ニ因リ船長又ハ其ノ代理人ニ於テ海外諸港ニ進航センコトヲ請求シタルトキハ検査官吏ハ相當ノ設備アル船舶ニ限り條件ヲ附シテ之ヲ許可スルコトヲ得
検査ヲ施行スル帝國内他港ニ進航センコトヲ請求スル場合ニ於テ其ノ到着前停船期間ヲ滿了スヘキトキ亦前項ニ同シ

第十三條 海港検査法第十條ノ二ニヨリ検査官吏ノ乗船スルハ左ノ各號ノ場合ニ限ル

- 一、他ノ港ニ回航セシムルトキ
- 二、帝國内他港ニ進航スル船舶内ニ傳染病ノ疑アル患者又ハ「ベスト」ノ疑アル鼠アリテ特ニ乗船調査ヲ必要ト認メタルトキ

三、前條第二項ノ進航ヲ許可シタルトキ

四、第二十條ニ依リ航海中検査ヲ施行セシムルトキ

第十四條 傳染病流行地及海港検査法第六條第一項第六號ノ發航地又ハ寄港地ニ該當スヘキ地方ハ告示ヲ以テ之ヲ指定ス

前項後段ノ指定地方ヨリ別ニ告示ヲ以テ指定セル港ニ來航スル船舶ニ對シテハ鼠族、昆虫等ノ驅除ヲ行フモノトス但シ積荷ノ種類等ニヨリ検査官吏ニ於テ必要ナシト認ムル場合ハ此ノ限りニ在ラス

前項以外ノ船舶ト雖モ積荷ノ種類其ノ他船内ノ狀況等ニ依リ必要ト認ムルトキハ消毒方法又ハ鼠

族、昆虫等ノ驅除ヲ行フヘシ

前二項ノ處分ヲ爲シタルトキハ船長又ハ其ノ代理人ノ請求ニ依リ其ノ證ヲ交付スヘシ
本條ノ處分ヲ受ケタル船舶ニ對シテハ同一航海中再ヒ同一ノ處分ヲ行フコトナシ

第十五條 消毒費ハ左ノ區別ニ依リ之ヲ徴收ス但シ内外國軍艦及帝國陸軍部隊ニ關スルモノハ此ノ限リニアラス

船舶消毒費	
總噸數二十噸未滿又ハ積石數二百石未滿	五圓
同 百噸未滿又ハ積石數五百石未滿	貳拾圓
同 百噸以上千噸未滿	四拾圓
同 千噸以上二千噸未滿	六拾圓
二千噸以上一千噸未滿ヲ増ス毎ニ貳拾圓ヲ加フ	
局部消毒費ハ各其ノ四分ノ一トス	

積荷消毒費	一個ニ付 參拾錢
船客乗組員ノ衣服、手荷物、所持品ノ消毒費	
一等二等船客及之ニ準スヘキ乗組員	一人分ニ付 貳圓
三等船客及之ニ準スヘキ乗組員	一人分ニ付 貳拾錢

第十六條 海港検査所ニ移轉セシメタル者ノ食費、患者死者ニ關スル費用及鼠族、昆虫等ノ驅除費ノ徴收額ハ稅關長（臨時海港検査所ニアリテハ地方長官）之ヲ定ム

十六、航海中寄港中及現在船中ニ「ベスト」鼠又ハ鼯鼠ノ有無
十七、他港ニ於テ検査消毒停船ノ有無
右之通相違無之候也

年 月 日

船 船
醫 長
某 某
印 印

雜 則

船舶氣象觀測報告規則

(昭和九年二月八日)
(文部遞信省令第一號)

第一條 公衆通信ヲ取扱フ無線電信ノ施設ヲ有スル船舶及主務大臣ノ特ニ指定スル船舶ハ海岸局ノ通信距離内ヲ航行中毎日中央標準時午前六時、正午及午後六時ニ氣象觀測ヲ爲スベシ
天候異常ノ場合ニ於テ特ニ必要ト認メタルトキハ前項ノ時刻外ト雖モ氣象觀測ヲ爲スベシ
第二條 前條ニ定ムル氣象觀測ヲ爲シタルトキハ直ニ中央氣象臺宛電報ニ依リ之ヲ報告スベシ
第三條 前條ノ報告ハ中央氣象臺ノ告示スル船舶氣象電報式ニ依ルベシ

附 則

本令ハ昭和九年三月一日ヨリ之ヲ施行ス

危險物船舶運送及貯藏規則

(昭和九年二月五日)
(遞信省令第十四號)

危險物船舶運送及貯藏規則

第一條 船舶ニ依ル危險物ノ運送又ハ船舶ノ常用危險物ノ貯藏ニ關シテハ本令ノ定ムル所ニ依ル但シ船舶ノ全部ヲ以テ軍事輸送ノ用ニ供スル場合ハ此ノ限ニ在ラズ
船舶ノ常用危險物ノ範圍ニ付テハ開港港則施行規則第十八條ノ規定ヲ準用ス
第二條 本令ニ於テ危險物トハ別表第一號表ニ定ムルモノヲ謂ヒ火藥類トハ同表第一號乃至第八號ニ掲グルモノヲ謂フ
第三條 火藥類ヲ貨車積ノ儘鐵道連絡ノ爲船舶ニ積ミ運送ヲ爲ス場合ニハ第二十一條及之ニ基ク第二十七條ノ罰則ノ規定ヲ除クノ外本令ヲ適用セズ火藥類鐵道運送規程ニ依ル
第四條 危險物ノ荷送人ハ危險物ノ容器及包裝ニ關シテハ別表第二號表ニ定ムル所ニ依ルベシ但シ陸海軍ノ託送ニ係ルモノハ其ノ定ムル所ニ依ルコトヲ得
第五條 船長ハ危險物ノ積付ノ方法及場所ニ關シテハ別表第二號表ニ定ムル所ニ依ルベシ
第六條 危險物ノ荷送人ハ危險物ノ容器又ハ包裝ノ外部見易キ所ニ品名(火藥類ニ在リテハ火藥、爆藥、火工品及普通火工品ノ別)ヲ朱記シ又ハ朱記シタル標札ヲ附シ且取扱上ノ注意事項ヲ表示スベシ
第六條 火藥類ハ其ノ容器、包裝及内容ノ表示ニ關シ前二條ノ規定ニ依リタルモノニ非ザレバ之ヲ船積スルコトヲ得ズ
火藥類ノ荷送人ガ銃砲火藥類取締法施行細則ノ規定ニ依リ當該官廳ノ運搬許可證ヲ受クベキ場合

ニ於テハ船長ガ其ノ許可證ヲ檢閲シタル後ニ非ザレバ之ヲ積積スルコトヲ得ズ
 第七條 危險物ヲ外國ニ於テ積積シ又ハ外國ニ於テ積積シタル危險物ヲ日本ニ於テ積換フルトキハ其ノ容器、包裝及内容ノ表示ニ關シ第四條及第五條ノ規定ヲ適用セズ

第八條 火藥類（普通火工品ヲ除ク）ハ管海官廳ノ許可ヲ受ケ又ハ逕信大臣ノ認定シタル積荷ノ檢定ヲ行フ公益法人ノ檢定ヲ經タルトキニ限り之ヲ火藥庫以外ノ場所ニ積藏スルコトヲ得

前項ノ許可ヲ受ケントスル者ハ附録書式ノ申請書ニ通テ積藏地ニ在ル管海官廳ニ提出シ當該官廳ノ指定スル所ニ從ヒ手数料ヲ納付スベシ但シ官廳又ハ公共團體ノ申請ニ係ルモノニ付テハ手数料ヲ徵收セズ

手数料ハ當該官吏ノ臨檢一回毎ニ三十圓トス

手数料ハ其ノ金額ニ相當スル收入印紙ヲ手数料納付書ニ貼附シテ之ヲ納付スベシ、

手数料ハ申請者ノ都合ニ依リ其ノ申請ヲ取下ゲタルトキト雖モ當該官吏ガ船舶ニ臨檢シタル後ナルトキハ之ヲ徵收ス

第九條 管海官廳ハ前條ノ申請アリタルトキハ當該官吏ヲシテ船舶ニ臨檢セシメ申請ヲ適當ト認ムルトキハ申請書ノ一通ニ許可ノ與書ヲ爲シ許可ヲ爲シタル年月日及官廳名ヲ記載シ官廳印ヲ押捺シ之ヲ申請者ニ還付ス

第十條 積荷ノ檢定ヲ行フ公益法人第八條第一項ノ認定ヲ受ケントスルトキハ申請書ニ左ニ掲グル事項ヲ記載シタル書面ヲ添附シテ之ヲ逕信大臣ニ提出スベシ
 一 積荷ノ檢定ニ關スル規則

二 手数料及旅費ニ關スル規則

三 積荷檢定員ノ氏名及履歷

逕信大臣ノ認定ヲ受ケタル積荷ノ檢定ヲ行フ公益法人積荷檢定員ヲ選任セントスルトキ又ハ前項第一號若ハ第二號ニ掲グル規定ヲ變更セントスルトキハ逕信大臣ノ認可ヲ受クベシ

逕信大臣ハ第八條第一項ノ認定ヲ爲シタルトキ又ハ其ノ認定ヲ取消シタルトキハ之ヲ告示ス

第十一條 甲板ヲ有セザル船舶旅客ヲ搭載スルトキハ火藥類ヲ積積スルコトヲ得ズ
 甲板ヲ有スル船舶ト雖モ旅客ヲ搭載スルトキハ雷酸塩（雷末ノ類）其ノ他ノ起爆劑及爆藥ヲ裝填シタル火工品ヲ積積スルコトヲ得ズ但シ陸海軍ノ託送ニ係ルモノハ此ノ限ニ在ラズ

第十二條 湖川港内ニ於テ火藥類ノ積積若ハ陸揚ヲ爲ス船舶又ハ火藥類ヲ積藏シ湖川港内ニ於テ航行、碇泊若ハ繫留セントスル船舶ハ船積地、陸揚地、發航地、碇泊地又ハ繫留地ヲ管轄スル警察官署ニ其ノ品名及數量並ニ其ノ日時及場所ヲ届出ヅベシ

前項ノ規定ハ船舶ノ常用火藥類ニ付テハ之ヲ適用セズ

第十三條 石油類ヲ積藏スル船艙ハ他ノ船艙、機關室、石炭庫、軸路、旅客室、船員室又ハ料理室等ニ其ノ發生ガスタ漏洩セシメザル水密隔壁其ノ他ノ設備ヲ有シ且該船艙ノ換氣管ハ二重細目金網製覆ヲ施シタルモノナルコトヲ要ス

石油類ヲ積藏シタル船艙内ノ電線ニハ電流ヲ通ズルコトヲ得ズ但シ船舶設備規程第二百六條ノ規定ニ依ル電氣設備ヲ有スル場合ハ此ノ限ニ在ラズ

第十四條 危險物ノ積藏、船積又ハ陸揚中ノ船舶ニ於テハ危險ヲ及ボス惧アル修繕工事ヲ爲スコト

ヲ得ズ

第十五條 火藥類ハ旅客ノ乗船又ハ下船ト同時ニ船積又ハ陸揚ヲ爲スコトヲ得ズ

第十六條 火藥類ヲ船積、陸揚又ハ荷繰スルトキハ之ヲ投下シ又ハ激突セシムベカラズ

第十七條 銃砲火藥類取締法施行規則第十八條各號(未尾記載)ニ掲グル以外ノ火藥類ハ所轄警察官

署ノ許可ヲ得タル場合ヲ除クノ外日没ヨリ日出迄ノ間ニ於テ之ヲ船積陸揚又ハ荷繰スル事ヲ得ズ

第十八條 危險物ノ船積若ハ陸揚ヲ爲ス場所又ハ之ヲ積藏シタル場所ニ於テハ裸火若ハ燐寸其ノ他

發火シ易キ物品ヲ携帶シ、鐵釘ヲ附シタル靴類ヲ穿テ又ハ喫煙スルコトヲ得ズ

第十九條 火藥類及石油類其ノ他可燃ガスヲ發スル危險物ヲ積藏シタル船艙ニ於テハ安全燈ヲ除ク

ノ外懐中電燈其ノ他ノ燈火ヲ使用スルコトヲ得ズ又當該船艙ノ開閉ニ當リ金槌等ヲ使用スル場合

ハ火花ヲ發セザル様適當ナル措置ヲ講ズベシ

第二十條 危險物ノ船積又ハ陸揚作業ヲ中止又ハ完了シタルトキハ直ニ火藥庫又ハ船艙ヲ閉鎖スベ

シ

第二十一條 銃砲火藥類取締法施行規則第二十八條(未尾記載)ノ規定ニ依リ倉庫ニ貯藏スルコトヲ

得ベキ數量ヲ超過スル火藥類ヲ積藏スル船舶湖川港内ニ於テ航行、碇泊又ハ繫留スルトキハ晝間

ハ赤旗ヲ夜間ハ紅燈一箇ヲ檣頭其ノ他見易キ場所ニ掲グベシ但シ船舶ノ常用火藥類及第二十四條

ニ掲グル火藥類ノミヲ積藏スル場合ハ此ノ限ニ在ラズ

第二十二條 船舶ニハ其ノ常用外ノ火藥類ヲ貯藏スルコトヲ得ズ但シ業務用トシテ貯藏スル場合又

ハ銃砲火藥類取締法施行規則ノ規定ニ依リ繫留船若ハ倉庫船ニ貯藏スル場合ハ此ノ限ニ在ラズ

第二十三條 旅客ハ火藥類ヲ携帶シテ乗船スルコトヲ得ズ但シ船長ノ許可ヲ得テ少量ノ銃用火藥類

及玩具用普通火工品ヲ携帶スル場合ハ此ノ限ニ在ラズ

第二十四條 銃用實包、銃用空包、銃用雷管、爆管、信管、門管、緩燃導火線、濕藥(箱内ノ火藥

又ハ爆藥ヲ爆發シ危險ナキニ至ル迄十分濕潤ノ上箱ヲ密閉シ該箱ノ上ニ濕藥ト明記シタルモノ)

芳香系列ノ硝化物又ハ之ヲ主トスル混和物ニシテ起爆劑ヲ附セザルモノ、硝酸アンモニアヲ主ト

スル爆藥中ニトログリセリン又ハ硝化纖維素ヲ含有セザルモノニシテ起爆劑ヲ附セザルモノ、煙

火及玩具用普通火工品ニハ第十一條及第十五條ノ規定ヲ適用セズ

第二十五條 船長ハ船舶ニ積藏シタル貨物ガ本令ニ違反シタル惧アリト認ムルトキハ何時ト雖モ證

人立會ノ上之ヲ開封シテ検査スルコトヲ得

第二十六條 管海官廳又ハ警察官署ハ危險物ノ運送及貯藏ニ關シ必要アリト認ムルトキハ何時ニテ

モ當該官吏ヲシテ船舶ニ臨檢セシメ且危險豫防ノ爲必要ナル處分ヲ爲サシムルコトヲ得

第二十七條 船舶所有者又ハ船長第六條、第十一條乃至第十五條、第十七條、第二十一條又ハ第二

十二條ノ規定ニ違反シタルトキハ百圓以下ノ罰金ニ處ス

第二十八條 第十八條又ハ第十九條ノ規定ニ違反シタル者ハ百圓以下ノ罰金ニ處ス

第二十九條 第四條、第五條又ハ第二十三條ノ規定ニ違反シタル者ハ三月以下ノ懲役又ハ百圓以下

ノ罰金ニ處ス

第三十條 地方長官ハ遞信大臣ノ認可ヲ受ケ船舶ニ依ル危險物ノ運送及貯藏ニ關シ別段ノ規定ヲ設

クルコトヲ得

附 則

第三十一條 本令ハ昭和九年三月一日ヨリ之ヲ施行ス

第三十二條 明治四十四年四月逕信省令第九號火藥類船舶運送及貯藏規則ハ之ヲ廢止ス

第三十三條 第三十條ニ掲グル規定ニシテ本令施行ノ際現ニ存スルモノハ同條ニ依ル逕信大臣ノ認

可ヲ受ケタルモノト看做ス

附録書式 火藥類火藥庫外積藏許可申請書

- 一 船種、船名
 - 二 國籍、船籍港
 - 三 船舶所有者名
 - 四 船積港、發航日時及陸揚港
 - 五 積藏火藥類ノ品目及數量
 - 六 積藏場所及其ノ設備
 - 七 積合セ貨物ノ品目及數量
- 右火藥庫外積藏許可相成度危險物船舶運送及貯藏規則第八條ニ依リ及申請候也
- 年 月 日

申請人 船舶所有者又ハ船長
住所 (所在地)

氏 名 (名稱)

管海官廳宛

別表

第一號表

- 一 雷酸塩類其ノ他ノ起爆劑
(雷汞、雷銀、雷酸カドミニウム、窒化鉛、硫化窒素、ジアゾバークロレート等白色、灰色又ハ黃色様物質ニシテ爆藥ノ起爆劑ニ應用セラレ爆發力強大ナルモノ)
- 二 爆藥類ヲ裝填シタル火工品
(爆藥ヲ裝填シ又ハ加工シタル彈丸又ハ信管類ニシテ摩擦、動搖又ハ衝擊ニ對シ危險度大ナルモノ)
- 三 硝酸塩混合火藥類
(硝石ヲ主劑トセル紛狀、粒狀、扁平、圓柱、六稜等ノ緩性火藥類ニシテ摩擦、動搖又ハ衝擊ニ對シ危險ナルモノ)
- 四 硝基化合物火藥類
(硝酸エステル、ニトロ化合物火藥類ヲ指稱シニトログリセリン及之ヲ主トスル爆發藥及綿藥、芳香系列ノ硝化物及之ヲ主トスル混和物等ニシテ各種ダイナマイト類、トリニトロトルオール、トリニトロフエノール、テトリール等ニ屬ス)
- 五 塩素酸塩爆藥
(綿藥又ハニトログリセリンヲ含有スルモノハ自然發火ノ危険アルヲ以テ溫度及通風ニハ特ニ注意ヲ要スベキモノ)
(スプレンドル氏火藥、塩斗藥等ニシテ自然發火ノ惧アルヲ以テ溫度及通風ニ注意ヲ要スベキモノ)

- 六 過塩素酸塩爆薬
- 七 火工品
- 八 普通火工品
- 九 塩素酸塩類

(カリソナイト、カーリツト等)
 (爆薬ヲ装填又ハ加工シタル火工品中比較的安全ナルモノニシテ雷管、爆管、門管、銃用實包、銃用空包等)
 (緩燃導火線、發雷信號、信號焰管、星火ヲ發スル榴彈、火箭等ノ煙火類似品、打上煙火、ペンガリー煙火、線香花火等ノ玩具用普通火工品)

- 十 過塩素酸塩類

(過塩素酸アンモン、過塩素酸カリ、過塩素酸ソーダ等ニシテ白色結晶体ヲ成シ其ノ性質塩素酸塩類ニ同ジ)
 (ピクリン酸ノ如ク爆發性ヲ有スルモノ)

- 十一 ニトロ染料類

(帶黃白色蠟狀物質ニシテ空氣ニ接スル時ハ黃綠色ノ焰ヲ發スル有毒物)

- 十二 黃燐類

(過塩素酸アンモン、過塩素酸カリ、過塩素酸ソーダ等ニシテ白色結晶体ヲ成シ其ノ性質塩素酸塩類ニ同ジ)
 (ピクリン酸ノ如ク爆發性ヲ有スルモノ)

- 十三 金屬ナトリウム

(銀白色ノ軟金屬ナリ水ニ接スルトキハ反應強烈ニシテ燃燒シ苛性ソーダヲ生ズルモノ)

- 十四 金屬カリウム

(銀白色ノ軟金屬ナリ水ニ接スルトキハ反應強烈ニシテ燃燒シ苛性カリヲ生ズルモノ)

- 十五 燐化カルシウム

(黃燐、石灰、木炭ヲ原料トシテ製造シタル褐色固体ニシテ水ニ接スルトキハ燐化水素ヲ生ジ自然發火スルモノ)

- 十六 硫化燐

(白色又ハ黃色結晶様物質ニシテ硫黃ヲ含有スルヲ以テ自然發火スルモノ)

- 十七 過酸化ソーダ

(帶黃色ノ粉末ニシテ空氣中ノ濕氣ヲ吸收發熱シ有機質ノ混在ニ因リ發火スルモノ)

- 十八 過酸化バリウム

(白色ノ粉末ニシテ空氣中ノ濕氣ヲ吸收發熱シ有機質ノ混在ニ因リ發火スルモノ)

- 十九 カーバイド

(白色又ハ灰色ノ塊狀ヲ成シ濕氣ニ接スルトキハ非常ニ燃燒シ易キアセチレンガスを發生スルモノ)

- 二十 晒粉

(塩素ガスを消石灰中ニ吸收セシメタル白色粉末ニシテ團塊ヲ成スコトアリ塩素類ニ類似セル強烈ナル刺戟性ノ臭氣トガスを發散スルモノ)

- 二十一 マグネシウム粉末

(銀色粉末ニシテ空氣中ノ濕氣ヲ吸收シテ發熱シ自然發火スルモノ)

- 二十二 ニトロセルロース及其ノ製劑

(ニトロセルロースハセルロイド、コロヂオン等ノ原料ニシテ植物纖維素ヲ濃厚硝酸、硫酸混液ニ因リ硝化セルモノヲ謂ヒ燃燒極メテ早ク摩擦又ハ日光等ニ依リ發火ス)

- 二十三 セルロイド

(其ノ製劑コロヂオンハニトロセルロースヲアルコール、エーテルノ混和液又ハアセトンニ溶解セル無色透明粘稠ノ液ニシテ容易ニ引火シ燃燒スルモノ)
 (無色透明ナルモノニ顔料ヲ混ジタルモノアリ樟腦ノ香氣ヲ有シ彈

二十四 硝石類

二十五 油紙油布類

二十六 酸類

カアル固体ニシテ燃燒シ易キモノ)

(硝石、智利硝石等ニシテ白色結晶体ヲ成シ酸化力強ク容易ニ酸素ヲ放出シ發火スルモノ)

(亞麻仁油等ノ乾燥性油ニ乾燥性油及動物油ヲ混ジ塗布シタル防水紙又ハ防水布ニシテ油類ノ自己酸化ニ因リ發火スルモノ)

發煙硫酸(硫酸中ニ無水亞硫酸ヲ吸收セシメタルモノニシテ硫酸ニ比シ危險度高キモノ)

強硫酸(油狀ノ液ニシテ酸化力強ク有機質、無機質ヲ酸化シ高熱ヲ生ジ自然發火スルモノ)

發煙硝酸(硝酸中ニ次硝酸ヲ吸收セシメタルモノニシテ硝酸ニ比シ危險度高キモノ)

強硝酸(無色又ハ黃褐色ノ液ニシテ強キ酸性ヲ有シ有機質ヲ酸化シ自然發火スルモノ)

二十七 二硫化炭素

二十八 石油類

二十九 可燃性液体類

(無色又ハ帶黄色ノ液体ニシテ揮發シ易ク不快臭アリ空氣ト混ズルトキハ爆發性ヲ有シ攝氏零下二十度ニ於テ引火スルモノ)

第一種石油、第二種石油(未製石油及其ノ蒸溜産物又ハ變成石油ニシテアペール又ハペンスキ閉塞發焰試験器ヲ用ヒ七百六十ミリメートルノ氣壓ニ於テ攝氏二十一度未満ノ溫度ニテ發焰スルモノヲ第一種石油トシ二十一度以上七十度未満ノ溫度ニテ發焰スルモノヲ第二種石油トス)

(エーテル、メタノール、ベンゾール、トルオール、ソルベントナ

三十 壓縮ガス及液化ガス類

亞硫酸ガス
アンモニアガス

フサ、アルコール、アセトン、キシロール、テレピン油、アミールアルコール、ブチールアルコール、芳香系列ノ炭化水素等)

アセチレンガス(カーバイドニ水ヲ作用セシメテ生ズル無色ガスニシテ爆發シ易キモノ)

油ガス(石油類ヲ分解シテ得ラルル下級炭化水素ヲ含有スルモノニシテ燈用ガスナリ)

水素ガス(無色無臭ノ輕キガスニシテ酸素ト混合スルトキハ爆發スルモノ)

硫化水素ガス(硫化物ニ酸ヲ作用セシメテ得ラルルモノニシテ空氣又ハ酸素ト混合シタル場合火氣ヲ近ヅクルトキハ容易ニ爆發スルモノ)

一酸化炭素ガス(炭素ノ不完全燃燒ニ因リ生ズルモノニシテ酸素又ハ空氣ト混合シ火花ニ依リ爆發スルモノ)

石炭ガス(石炭ヲ乾溜シテ得ラルルガスニシテ空氣中百分ノ八乃至二十三ヲ混ズルトキハ爆發性ヲ具備スルモノ)

天然ガス(石油地帯等ニ天然ニ噴出スルガスニシテ空氣ト混ズルトキハ爆發スルモノ)

(無色ニシテ稍臭氣アリ熱シタル金屬類ヲガス中ニ投ズルトキハ發火スルモノ)

(特有ノ刺戟臭アルモノニシテ塩素ガス又ハ沃度ト混ズルトキハ爆發スルモノ)

二十	二十	二十	二十
晒粉	晒粉	晒粉	晒粉
正味五百瓦未滿ノ場合ハ硝子壘ニ入レ密封ス	正味五百瓦以上ノ場合ハ硝子壘ニ入レ密封ス	正味五百瓦以上ノ場合ハ硝子壘ニ入レ密封ス	正味五百瓦以上ノ場合ハ硝子壘ニ入レ密封ス
木箱ニ入レ壘ノ周圍ニ藁ノ類ヲ填充ス	木箱ニ入レ壘ノ周圍ニ藁ノ類ヲ填充ス	木箱ニ入レ壘ノ周圍ニ藁ノ類ヲ填充ス	木箱ニ入レ壘ノ周圍ニ藁ノ類ヲ填充ス
日光ヲ遮シタル場所ニシテ良好ナル通風ヲ得ルコトヲ要ス	日光ヲ遮シタル場所ニシテ良好ナル通風ヲ得ルコトヲ要ス	日光ヲ遮シタル場所ニシテ良好ナル通風ヲ得ルコトヲ要ス	日光ヲ遮シタル場所ニシテ良好ナル通風ヲ得ルコトヲ要ス

十六	十七	十八	十九
三硫化磷	五硫化磷	過酸化バリウム	カーバイド
完全ナル罐詰ト爲ス	完全ナル罐詰ト爲ス	右ニ同ジ	右ニ同ジ
木樽又ハ木箱入トス	木樽又ハ木箱入トス	右ニ同ジ	右ニ同ジ
積ト爲サザル	積ト爲サザル	積ト爲サザル	積ト爲サザル

二十九	可燃性液	右ニ同ジ	付ヲ爲サザル
三十	及液類 ガガ 化ガ ス等	右ニ同ジ	付ヲ爲サザル
三十一	炭酸ガス 酸素	右ニ同ジ	付ヲ爲サザル
三十二	ガ注前耐 スタル砲 ニテ密封 シテ被覆 スル器ニ シテ出セ ザル器ニ 在リ	右ニ同ジ	付ヲ爲サザル
三十三	木杵入ト ス(直徑六 ・六種以 上ノ丸太 ヲ二ツ割 ト爲シタ ルモノ四 本ヲ組合 セ其ノ兩 端ハ厚サ 一・五種 以上ノ板 片ヲ十字 形ニ釘附 シタルモ ノ若ハ杵 ノ形ニ相 當スル底 板ヲ當テ タルモノ 又ハ帶鐵 繩ノ類ヲ 以テ十分 緊縮シタル モノ)	右ニ同ジ	付ヲ爲サザル
三十四	堅牢ナル 木箱入ト ス	右ニ同ジ	付ヲ爲サザル
三十五	ハボンブ 罐入ノ帽 蓋ノ周圍 ニ外徑ハ 罐ノ胴丸 ノ内徑ハ 蓋ノ外徑 ノ高サハ 帽蓋ノ高 サニ等シ キ木又ハ 柔軟物製 ノ環狀物 ヲ挿入シ テ帽蓋ヲ 完全ニ圍 繞シ向テ 之ヲ徑○ 九種以上 ノ麻繩ヲ 以テ作リ タル網袋 (目ノ太 サ四・五 種ノ方以 下ノモノ) 又ハ籐 製ノ籠ニ 入レ其ノ 口ヲ緊縛 ス	右ニ同ジ	付ヲ爲サザル

備考

- 一 火薬類以外ノ危険物ニ付テハ事情ニ應ジ本表ニ定ムル事項ニ適當ナル變更ヲ加フルコトヲ妨
グズ
- 二 本表ニ掲グル火薬庫ニハ持運式火薬庫ヲ包含ス
- 三 火薬類ノ積藏ニ付テハ左ノ各號ニ依ルベシ
 - (イ) 艙口ヨリ容易ニ接近シ得ル場所ナルコト
 - (ロ) 燃燒シ易キ貨物其ノ他爆發ノ誘因トナルベキ惧アル貨物ニ接近セシメザルコト
 - (ハ) 外板ニ接觸セル場所、震動ヲ受クル場所及旅客室、船員室、油槽、機關室、蓄電池、發電
機、石炭庫、料理室其ノ他火氣又ハ熱氣アル場所ヲ避クルコト
 - (ニ) 他ノ貨物ノ下積ト爲サザルコト
 - (ホ) 露出セル鐵類トノ接觸ヲ避クルコト
- 四 銃砲火薬類取締法施行規則ノ規定ニ依リ別棟ノ火薬類貯藏所ニ貯藏スベキモノハ之ヲ同一ノ
火薬庫又ハ船艙ニ積藏スベカラズ
- 五 甲板ナキ船舶ニ在リテハ前項ノ火薬類ヲ同一船舶ニ積藏スベカラズ
- 六 船舶ノ常用火薬類ハ木製ノ箱ニ容レ且容易ニ取出シ得ベキ安全ナル場所ニ之ヲ貯藏スベシ
- 六 火工品中安全實包及安全空包ハ火薬類ヲ裝填セザル雷管附又ハ爆管附藥莖ト同一ノ取扱ヲ爲
スコトヲ得

- 七 塩素酸カリ、塩素酸ソーダ、ニトロ染料、黄燐、金属ナトリウム、金属カリウム、燐化カルシウム、硫化燐及過酸化バリウムハ易燃性又ハ可燃性物質トノ積合セテ避クベシ
- 八 カーバイド、マグネシウム粉末、ニトロセルローズ其ノ他ノ製劑、セルロイド、硝石類、油紙油布類、酸類、石油類及可燃性液体類、壓縮ガス及液ガス類ハ自然發火ヲ爲シ易キ物質トノ積合セテ避クベシ

備考

銃砲火藥類取締法施行規則拔萃

第十八條 軍用銃砲又ハ左ノ各號ノ火藥類ノ讓渡及讓受ノ許可ハ所轄警察官署ニ之ヲ申請スベシ

- 一、火藥 一貫三百匁以内
- 二、銃用實包 千箇以内
- 三、銃用空包 千箇以内
- 四、銃用實包又ハ銃用空包ニ要スル雷管又ハ雷管附藥莢 二千箇以内

第二十八條 火藥類貯藏所ニ貯藏スル火藥類ハ左ノ數量ヲ超過スルコトヲ得ス

火藥類ノ種類	貯藏所ノ種類	火藥庫	倉庫	假貯藏所
火藥	藥	一萬貫	十二貫	五千貫
爆藥	藥	五千貫	三貫	二千五百貫
銃用實包		二千萬貫	三萬箇	千萬貫
銃用空包		二千萬貫	三萬箇	千萬貫
銃用雷管		五千萬貫	十萬箇	五百萬箇
工業用雷管		三百萬貫	一萬箇	三十萬箇
信管、爆管、門管		無制限	三萬箇	無制限

前項ニ掲ケサル火工品ハ其ノ原料タル火藥又ハ爆藥ノ數量ニ依リ前項ノ規定ヲ適用ス但シ雷管附藥莢及導火線ハ此ノ限ニ在ラス

大阪府水路取締規則

(明治四十三年八月公布
大正元年九月改正(大阪府令))

第一章 通 則

第一條 本則ニ於テ水路ト稱スルハ河川、運河及港灣ヲ謂フ
第二條 水路ニ於テハ左ノ行爲ヲ禁ス

- 一、水制、測量標、量水標、檢潮標、檢潮器、水道取水塔、水管橋、瓦斯管橋、電纜橋及其保護杭ニ舟筏ヲ繫留シ又ハ之ニ障害ヲ及ホスヘキ行爲ヲ爲スコト
- 二、他船ニ引曳セラル、舟筏ノ操舵ヲ忽ニスルコト
- 三、「テントウ」船、劍先船、三十石船其ノ他之ニ類スル船舶若ハ長二十尺以上ノ筏ヲ船夫又ハ筏夫一人ニテ運航スルコト
- 四、船體不相當ト認ムヘキ重量物件ヲ搭載航行スルコト
- 五、舟筏、竹木等ノ繫留ヲ忽ニスルコト
- 六、土砂、瓦石、石炭殻、塵芥、木片等ヲ投棄スルコト
- 七、他ノ舟筏等ニ驚口類ヲ鈎シテ運航スルコト
- 八、大阪市、堺市ニ在リテハ許可外ノ場所ニ於テ游泳ヲ爲スコト
- 九、安治川筋、木津川筋及築港ニ於テハ本則ノ指定シタル場所外ニ船舶ヲ碇泊スルコト
- 十、碇泊船舶ニ故ナク看守人ヲ置カサルコト但シ艇船「テントウ」船其ノ他之ニ類スル小形船ハ此

ノ限ニアラス

十一、入津料取立所、渡船場、巡航船寄航場、汽船繫泊場、船渠、共同物揚場ノ附近ニ於テ舟筏其ノ他ノ物件ヲ繫留スルコト

第三條 水路ニ於テ左ノ事項ヲ爲サムトスルトキハ警察官署ノ許可ヲ受クヘシ

- 一、假足場、日覆又ハ構臺ヲ設ケ其ノ他一時水路ヲ使用セムトスルトキ
- 二、神輿渡御又ハ川施餓鬼ノ類ヲ執行セムトスルトキ
- 三、積石數二百石以上總噸數二十噸以上ノ船舶ヲ上架又ハ進水セムトスルトキ
- 四、積石數百石以上總噸數十噸以上ノ船舶ヲ解船、修繕、休憩、繕裝等ノ爲五日以上繫留セムトスルトキ、筏ニ付亦同シ
- 五、多衆ヲ會シ端艇競漕ヲ爲サムトスルトキ
- 六、淀川筋天滿橋上流ニ於テ長六十尺幅六尺以上其ノ他大阪市内ノ河川ニ於テ長四十五尺幅六尺以上ノ筏又ハ操縦自由ナラザル物件ヲ運航セムトスルトキ
- 七、舟筏其他ノ物件ヲ連繫シテ運航シ又ハ之ヲ引曳セムトスルトキ
- 八、火藥類搭載船ヲ碇泊セムトスルトキ

第四條 水路使用ノ許可ヲ受ケタル者ハ區域、期間及使用者ノ住所氏名ヲ記シタル目標ヲ其ノ踏易キ場所ニ建設スヘシ但シ一時使用ノモノハ此ノ限ニ在ラス

第五條 運航中ニ非サル筏ニハ所有者若ハ占有者ノ住所氏名ヲ記シタル目標ヲ其ノ踏易キ箇所ニ掲クヘシ

第六條 船舶ノ航法ハ左ノ規定ニ遵フヘシ

- 一、航路及ヒ濤筋ニ於テハ其右側ヲ航行スヘシ
- 二、航路及濤筋ニ於テハ他船ト並航スヘカラス
- 三、航路及濤筋ニ於テ行達フトキハ互ニ右方ニ避クヘシ若シ之ニ依リ難キ場合ハ上リ船ニ於テ避讓スヘシ
- 四、航路及濤筋ヲ横切ラムトスル船舶ハ上リ船又ハ下リ船ニ對シ避讓スヘシ
- 五、汽艇、發動機艇、舢舨、端艇其他櫓權ヲ以テ航行スル船舶ハ汽船及帆船ニ對シ避讓スヘシ
- 六、航路ノ屈角、埠頭、棧橋又ハ碇泊船ニ接シ回航スルトキハ之ヲ右舷ニ見テ航行スルモノハ小廻リヲ爲シ左舷ニ見テ航行スルモノハ大廻リヲ爲スヘシ

前項ハ之ヲ後ニ準用ス

第七條 船舶ハ海上衝突豫防法其ノ他法令ニ規定アル場合ヲ除クノ外濫リニ汽笛、汽角又ハ號角ヲ吹鳴スヘカラス

第八條 汽船ハ他船ニ危害ヲ加ヘサル程度ノ速力ニ於テ進行シ特ニ總噸數四十噸以上ノモノ安治川筋第二區第三區木津川第二區内ニ於テハ舵効ヲ失セサル程度ニ於テ徐行スヘシ

第九條 航行中ハ見張ヲ嚴密ニシ若シ帆ヲ揚ケ又ハ積荷高キ等爲メ前路ヲ見透シ難キトキハ船首ニ見張人ヲ置クヘシ

第十條 船舶ハ錨ヲ船胸ニ垂下スヘカラス

船舶航行中ハ投錨準備トシテ左舷錨ヲ水面以下ニ垂下シ置クヘシ

總噸數百噸以上ノ汽船川筋ヲ航行中ハ必要ニ應シ速ニ投入シ得ル様中錨以上ノ錨ヲ船尾ニ準備シ置

クヘシ

第十一條 積石數百石以上總噸數十噸以上ノ船舶川筋ニ於テ投錨シタルトキハ浮標ヲ設クヘシ

第十二條 船舶航行中ハ海上衝突豫防法第十條ニ規定セル白燈ヲ船尾ニ掲クヘシ但シ同法第七條乃至第九條ノ船舶ハ白色燈ヲ以テ之ヲ代用スルコトヲ得

海上衝突豫防法第七條第三號第四號ニ該當スル船舶航行中ハ同條第三號ニ規定セル燈火ヲ其ノ前方ニ掲クヘシ

第十三條 碇泊船ハ海上衝突豫防法第十一條ノ規定ニ依ル碇泊燈ヲ表出スヘシ但シ舢舨、「テントウ」船其ノ他小形ノ空船ハ航路ニ面シタルモノヲ除クノ外之ニ依ラサルコトヲ得

第十四條 川筋ニ於テ回航中ノ積石數二百石以上總噸數二十噸以上ノ船舶ハ最モ睹易キ場所ニ晝間ハ萬國信號旗Rヲ夜間前檣ノ頂部ニ紅燈一個ヲ掲クヘシ

第十五條 船舶ノ點燈、信號及航行ニ關シテハ前各條ノ外海上衝突豫防法ニ依ルヘシ

第十六條 舟筏運航上障害若ハ危險ノ虞アル場所ニ膠砂、沈没、顛覆シタル船舶其ノ他ノ物件ハ所有者又ハ占有者ニ於テ速ニ之ヲ除却スヘシ

前項ノ除却ヲ終ル迄ハ相當ノ標識ヲ設クヘシ

第十七條 船夫及筏夫ハ年齢十八年以上ニシテ身體強壯ノ者タルヲ要ス

第十八條 警察官吏ニ於テ危害豫防又ハ交通上ニ關シ必要アリト認ムルトキハ臨時其ノ處置ニ付キ指示又ハ命令スルコトアルヘシ

第十九條 大阪市、堺市及其接續町村ニ於テハ水路ニ臨ミタル屋根、物干、窓、手摺等ニ濫其ノ他見苦數物品ヲ懸ケ置クヘカラス

第二十條 本則ニ依ル願届ハ大阪府及其接續町村ニ在リテハ水上警察署其ノ他ニ在リテハ沿岸地所轄警察署ニ差出スヘシ

第二章 大阪港

第二十一條 大阪港界内ヲ内港、外港ニ區別ス

内港ハ築港内ノ海面外港ハ開港々則ニ定メタル大阪港ノ区域内ヨリ築港内ヲ除キタル海面

第二十二條 内港ヲ左ノ二區ニ區別ス

第一區 築港關門口ヨリ内方一千間ノ地點迄

第二區 第一區ヲ除キタル海面

第二十三條 内港ニ出入スル航路ハ關門口兩燈臺ヨリ眞方位北六十五度、東南六十五度ニ走ルニ並行

線内トシ航路ノ延長ハ防波堤外ニ於テハ該燈ヨリ五百間防波堤内ニ於テハ第一區境界線迄トス

安治川ニ出入スル航路ハ内港第一區航路ノ南終點ヨリ眞方位北四十二度四十五分東ニ八百十六間、更ニ其點ヨリ北五十度十分東ニ三百十三間、同航路北ノ終點ヨリ眞方位北四十八度東ニ七百五十四間、更ニ其ノ點ヨリ北五十二度東ニ三百二十間ノ二線内トス(本項大正元年九月改正)

第二十四條 内港第一區中關門口ヨリ航路ニ沿ヒ北側三百間以内ハ燒燃シ易キ物件ヲ其ノ南側三百間以内ハ傳染病患者ヲ搭載スル船舶ノ碇泊所トシ殘餘ノ區域ハ帆船ノ假泊所トス

内港第二區ハ汽船及帆船ノ碇泊所トス但總噸數三百噸未滿ノ船舶ハ陸岸ニ接近シテ碇泊スヘシ

第三章 安治川筋

第二十五條 安治川筋ノ區域ハ安治川口(櫻島運河入口ト天保山燈臺トヲ連絡シタル一線)ヨリ上流

春日出橋、端建藏橋及船津橋迄ノ間トシ左ノ三區、區別ス

第一區 官設鐵道線堀割口北岸ヨリ直角ニ南岸ニ引キタル一線ト安治川口迄ノ間

第二區 逆川中心ヨリ直角ニ南岸ニ引キタル一線及春日出橋ト第一區境界線迄ノ間

第三區 端建藏橋及船津橋ヨリ第二區境界線迄ノ間

第二十六條 安治川筋筋ニ於ケル航路ハ筋筋ノ中央ヨリ左右ヘ各十間トス

第二十七條 安治川筋筋第一區ハ空船、荷役未定船、休航船、修繕船及燃焼シ易キ物件ヲ搭載シタル船舶ノ碇泊所トス但シ棧橋ニ繫留スルモノ又ハ警察官吏ノ承認ヲ得タルモノハ此ノ限ニアラス

安治川筋筋第二區ハ前項以外ノ各種船舶ノ碇泊所トス

安治川筋筋第三區ハ航洋汽船及稅關ノ手數未濟貨物搭載船ノ碇泊所トス但シ曳船汽船汽艇及舢舨ハ元

安治川橋上流北岸ニ碇泊スルコトヲ得

第二十八條 安治川筋筋ニ於テハ筏ヲ運航スヘカラス但シ警察官署ノ許可ヲ受ケタルモノハ此ノ限ニ在ラス

第二十九條 安治川筋筋第二區第三區ニ於テハ船舶ノ帆走ヲ爲スヘカラス但シ第二區ニ於テハ「テントウ」船、劍先船、其ノ他之ニ類スル小形船ハ此ノ限ニアラス

第三十條 木津川筋ノ區域ハ木津川口標標ノ西端ヨリ上流日吉橋及千代崎橋迄ノ間トシ左ノ二區ニ區別ス

第一區 中口町南端ヨリ木津川口濠標ノ西端迄ノ間
 第二區 第一區ニ屬セサル區域
 第三十一條 木津川筋ニ於ケル航路ハ濠筋ノ中央ヨリ左右ヘ各七間トス
 第三十二條 木津川筋第一區ハ空船、荷役未定船、休航船、修繕船及燃燒シ易キ物件ヲ搭載シタル船舶ノ碇泊所トス但シ棧橋ニ繫留スルモノ又ハ警察官吏ノ承認ヲ得タルモノハ此ノ限ニ在ラス
 木津川筋第二區ハ前項以外ノ各種船舶ノ碇泊所トス
 第三十三條 木津川筋第二區ニ於テハ船舶ノ帆走ヲ爲スヘカラス

第五章 罰 則

第三十四條 第三條第八號、第六條、第八條及第九條ニ違背シタル者及第十六條第一項ノ除却ヲ忘リタル者ハ三十日未滿ノ拘留又ハ二十圓未滿ノ科料ニ處ス
 第三十五條 第二條第一號乃至第七號、第九號乃至第十一號、第三條第一號乃至第七號第四條、第五條、第七條、第十條第一項、第二十八條、第二十九條、第三十三條ニ違背シタル者ハ二十日以下ノ拘留又ハ十五圓以下ノ科料ニ處ス
 第三十六條 第二條第八號、第十九條ニ違背シタル者ハ十圓以下ノ科料ニ處ス
 第三十七條 前三條ノ科料ニ關スル罰則ハ法人ニ在リテハ其ノ代表者、犯罪無能力者ニ在リテハ其ノ法定代理人ニ之ヲ適用ス

大阪府汽船航運營業取締規則

（明治三十四年九月公布
 明治三十四年四月改正（大阪府令）
 昭和二年三月改正）

第一條 本則ニ於テ汽船ト稱スルハ蒸氣ヲ用ユルト否トニ拘ハラズ機械力ヲ以テ航運スル裝置ヲ有スル船舶ヲ謂フ
 第二條 汽船航運業ヲ爲サントスル者ハ船舶検査證書若ハ船鑑札ノ謄本及附録様式ノ明細書ヲ添へ届出ヘシ
 曳船及港灣ノ部分ニ非サル河川ヲ航運スル汽船ニ係ルモノハ前項書類ノ外尙營業ノ方法ヲ詳記シ所轄水上警察官署ヲ經テ當廳ニ願出許可ヲ受クヘシ船數ヲ増加シ又ハ營業ノ方法ヲ變更セントスルトキ亦同シ
 第三條 營業者ニシテ營業所所在地ニ居住セサル者ハ營業所ニ常置スル代理者ヲ定メ雙方連署シ届出ヘシ
 第四條 荷客ノ運賃ハ貨物ノ種類客室ノ等級ニ據リ之ヲ定メ届出ツヘシ變更セントスルトキ亦同シ運賃額ハ營業所及乗船券賣捌所ニ揭示シ置クヘシ
 第五條 運賃ヲ受領シタル乗客ニハ乗船券ヲ交付スヘシ
 乗船券ニハ發著地船名客室ノ等級及運賃額ヲ記載シ番號ヲ附スヘシ
 第六條 船舶ニハ各客室ニ等級及旅客ノ定員ヲ揭示スヘシ
 定員ハ船舶安全法ノ適用ヲ受ケサル船舶ニ在リテハ五歳以上十二歳未滿ノ者ハ二人五歳未滿ノ者ハ

四人ヲ以テ一人ニ計算スルコトヲ得

第七條 荷客搭載ニ關シテハ左ノ規定ニ從フヘシ

- 一、旅客ノ住所、身分、職業、氏名、年齢ヲ記錄シ營業所ニ備置キ六箇月間之ヲ保存スヘシ
- 二、火藥類、發火性及引火性ノ物品ヲ搭載セントスルトキハ其ノ品名、數量、積込及陸揚地ヲ届出テ火藥類ハ附録様式ノ標旗其ノ他ハ品名ヲ表記シ且危險物ト朱書シタル標札ヲ掲クヘシ但シ時宜ニ依リ搭載ヲ禁止スルコトアルヘシ
- 三、汚汁又ハ惡臭ヲ發スル物品ハ客室及其ノ附近ニ置クヘカラス
- 四、船内ノ通路ニハ器具、貨物ヲ置クヘカラス

第八條 荷客ノ搭載及陸揚ハ明細書ニ記載シアル場所ニ限ルヘシ但シ臨時冲出シ又ハ潮取ヲ爲ストキハ此ノ限ニ在ラス此ノ場合ニ於テハ豫メ届出ヘシ

第九條 汽船ヲ出航セントスルトキハ其ノ出航時間ヲ記シ拔錨時ヨリ二時間前ニ届出ヘシ變更セントスルトキ亦同シ但シ入航ノ即日日出航スルモノハ其ノ届出ノ時間ヲ一時間前ニ減縮スルコトヲ得

同船又ハ他船ヲ以テ代航シ若ハ入航後一時間以内ニ出航セントスルトキハ拔錨前ニ届出ヘシ

第十條 河川航運ノトキハ左ノ規程ニ從フヘシ

- 一、内港(明治四十三年八月府令第六十八號ニ依ル)及各河川ニ於ケル信號ハ海上衝突豫防法第二十八條ニ依ルノ外左ノ例ニ依リ發聲スヘシ
 - 一 發船及航行 長聲(四秒乃至六秒時間以下同シ)一發
 - 一 曳船航行 長聲一發、短聲(約一秒時間)二發
- 二、海上衝突豫防法ヲ適用セサル河川ニ於テモ夜間ハ仍同法ノ規定ニ準據シ船燈ヲ點用スヘシ

三、曳船ノ航行スル河川及其ノ繫曳船數ハ左ノ制限ニ依ルヘシ但シ安治川筋第一區下流ニ限り暴風激浪ノ際ハ其ノ制限ニ依ラサルコトヲ得(四十年三月府令第十六號ニテ改正)

木津川筋 千代崎橋ヨリ落合下流マテ(四十年二月府令第十六號ニテ改正)

尻無川筋 檣橋下流

淀川筋 中ノ島七丁目劍先ヨリ築港關門内方千間ノ地點マテ(四十年二月府令第十六號ニテ改正)

中津川筋 春日出橋下流(四十年二月府令第十六號ニテ改正)

以上ノ各河川ニ於テハ二百石積以上ノモノハ一艘百石積以上二百石積未満ノモノハ二艘以下百石積未満ノモノハ三艘以下但シ安治川筋第一區下流ニ於テハ二百石積以上ノモノハ三艘以下百石積以上二百石積未満ノモノハ六艘以下百石積未満ノモノハ九艘以下ヲ繫曳スルコトヲ得(西洋形船舶ハ一噸ヲ以テ十石ト算シ)「テントウ」船劍先船三十石船ノ類ハ舳梁ヨリ艫梁マテノ長八間以上ノモノハ百石積以上八間未満ノモノハ百石積未満トシ其ノ他ノ間數船ハ六間以上ノモノハ百石積以上六間未満ノモノハ百石積未満トス以下同シ(四十年二月府令第十六號ニテ但書追加)

淀川筋 中ノ島七丁目劍先上流(四十年二月府令第十六號ニテ改正)

木津川筋 千代崎橋上流

中津川筋 春日出橋上流(四十年二月府令第十六號ニテ改正)

以上ノ各河川ニ於テハ百石積以上二百石積未満ノモノハ一艘百石積未満ノモノハ二艘以下但シ天神橋上流天滿橋下流ニ於テハ五艘以下天滿橋上流ニ於テハ十艘以下ヲ繫曳スルコトヲ得(四十年二月府令第十六號ニテ改正)

四、曳船ノ曳綱ハ六間以上ニ延長スヘカラス(三十五年府令第九十九號ヲ以テ改正)
五、曳船ヲ解放シ又ハ停船セントスルトキハ他ノ舟筏通航ノ妨害トナラサル場所ニ於テスヘシ
第十條ノ二、前條以外ノ河川ニ於テ曳船ヲ爲サムトスル者ハ第二條ニ據ルノ外願書ニ左記ノ各號ヲ詳
具スベシ

一、航行區域(圖面添付)
二、被曳船數及其ノ最大積量

前項ノ許可ヲ受ケタルモノハ曳船航行中許可證又ハ航行區域所轄水上警察署ノ證印アル許可證寫ヲ
船内ニ備ヘ置クヘシ

第十一條 旅客ヲ搭載スル汽船海上航行中ハ難破船救助ノ爲ニスルノ外荷客ヲ搭載セル他ノ船舶ヲ曳
クヘカラス

第十二條 左ノ各號ニ該當スル事故アリタルトキハ最寄警察官署又ハ巡查派出所巡查駐在所ニ届出ヘ
シ但シ第三號ノ場合ニ於テハ之ヲ原狀ニ回復スル義務アルモノトス

一、旅客及乗組員中ニ死傷者アリタルトキ
二、衝突坐礁具ノ他ノ異變アリタルトキ

第十三條 左ノ各號ノ行爲ヲ禁ス
一、營業所外ニ於テ乗船券ヲ賣捌クコト但シ特ニ認可ヲ受ケタル場所ハ此ノ限ニアラス
二、每船各室ノ定員ニ超過シタル乗船券ヲ賣出スコト
三、乗船假切符ヲ使用スルコト

一、許可ヲ受ケタル者許可ノ條件ニ違反シタルトキ又ハ所在不明トナリタルトキ
二、營業ヲ繼續スルニ適セスト認メタルトキ
三、公安上危害ヲ生スルノ虞アリト認メタルトキ

第十六條 警察官吏ハ臨時營業所、乗船券賣捌所及船舶ヲ検査スルコトアルヘシ

第十七條 廢業又ハ廢船シタルトキ若ハ船舶検査證書、船鑑札、明細書ニ異動アリタルトキハ三日以
内ニ届出ヘシ

四、荷主又ハ旅客ニ對シ定額外ノ賃錢ヲ請求スルコト
五、正當ノ理由ナク乗船ヲ拒ムコト
六、乗船ヲ勸ムル爲メ船名又ハ出船時間ヲ詐リ若クハ客引人ヲ使用スルコト
七、每船十分時以上ヲ經過セスシテ出航スルコト
八、他船ト速力ヲ競争スルコト
九、約束外ノ地ニ於テ強テ旅客ヲ上陸セシムルコト
十、荷主又ハ旅客ニ對シ侮慢猥褻又ハ粗暴ノ言行アルコト
十一、船内ヲ不潔ニスルコト
十二、旅客ニ不潔ノ食器又ハ不良ノ飲食物ヲ供スルコト

第十四條 警察官署ニ於テ危害豫防若ハ衛生ノ爲メ必要ト認ムルトキハ出航ノ時間ノ伸縮、荷客積卸
場ノ變更又ハ船體ノ使用停止若ハ其修繕ヲ命スルコトアルヘシ

第十四條ノ二、左ノ各號ノ一ニ該當スルトキハ第二條第二項又ハ第十條ノ二ニ依ル許可ヲ取消スコト
アルヘシ

一、許可ヲ受ケタル者許可ノ條件ニ違反シタルトキ又ハ所在不明トナリタルトキ
二、營業ヲ繼續スルニ適セスト認メタルトキ
三、公安上危害ヲ生スルノ虞アリト認メタルトキ

第十五條 警察官吏ハ臨時營業所、乗船券賣捌所及船舶ヲ検査スルコトアルヘシ
第十六條 廢業又ハ廢船シタルトキ若ハ船舶検査證書、船鑑札、明細書ニ異動アリタルトキハ三日以
内ニ届出ヘシ

第十七條 營業上家族代理者雇人ノ所爲ニ付キテハ行爲者及營業者汽船乗組人ノ行爲ニ付キテハ行爲者及船長共ニ其ノ責ニ任ス

第十八條 本則ニ定ムル願届ハ第二條第二項及第十二條ノ場合ヲ除ク外所轄水上警察官署ニ差出スヘシ但シ第七條第二號及第九條ノ届書ハ同官署所屬ノ巡查派出所ニ差出スコトヲ得

第十九條 本則第二條乃至第十三條第十六條ニ違背シタル者若クハ第十五條ノ検査ヲ拒ミタル客ハ拘留又ハ科料ニ處ス

前項ノ罰則ハ法人ニ在リテハ其ノ代表者ニ之ヲ適用ス

附 則

第二十條 本則第七條第二號、第十條、第十條ノ二、第十一條、第十二條、第十三條第七號、第八號ノ規定及第十八條ノ罰則ハ非營業ノ汽船ニ對シテモ亦之ヲ適用ス

第二十一條 汽船以外ノ船舶ヲ以テ航運營業ヲ爲ス者ニ對シ航運ノ狀況ニ依リ必要アリト認ムルトキハ特ニ命シテ本則ノ幾分ヲ遵守セシムルコトアルヘシ

第二十二條 大阪市内ノ河川ヲ限リ航運營業ヲ爲ス場合ニ於テハ本則第七條第一號及第九條ヲ適用セス

第二十三條 本則施行前認可ヲ受ケタル營業者ハ本則第二條第二項ニ依リ許可ヲ得タルモノト看做ス

汽船何丸明細書
船長ノ氏名及免狀ノ種類
運轉士ノ氏名及免狀ノ種類
機關士ノ氏名及免狀ノ種類
公稱馬力
旅客定員
一時間運力
荷客積卸場
各寄航場
營業場
右之通相違無之候也

住 所 汽船航運營業者 氏 名

備考 船舶検査證書ヲ受有スル船舶ニ在リテハ船長公稱馬力及旅客定員ヲ記載セサルモ妨ケナシ

火 藥

曲尺 縱三尺五寸横五尺
地質 赤 地
文字 白 地

新海軍法令集



昭和九年三月拾五日印刷
昭和九年三月貳拾日發行
昭和九年四月五日增補再版發行
昭和九年六月二十五日增訂第三版發行

新海軍法令集

定價金九拾錢

但送料十六錢

大阪港區北境川町一丁目二十三番地
編輯兼發行人 黒坂利真

不許
複製

6.22

大阪大正區三軒家市場通二丁目二十二番地
印刷所 境川文庫印刷部

大阪港區北境川町一丁目二十三番地
印刷人 堀川菊松

發行所 大阪港區北境川町壹丁目貳拾參番地
電話 西二〇四八・五〇九七番
振替口座 大阪一五六〇四番
境川文庫出版部

大正十一年六月一日

東京文庫出版

不 詳

大正十一年六月一日

東京文庫出版

大正十一年六月一日

東京文庫出版

大正十一年六月一日

終

